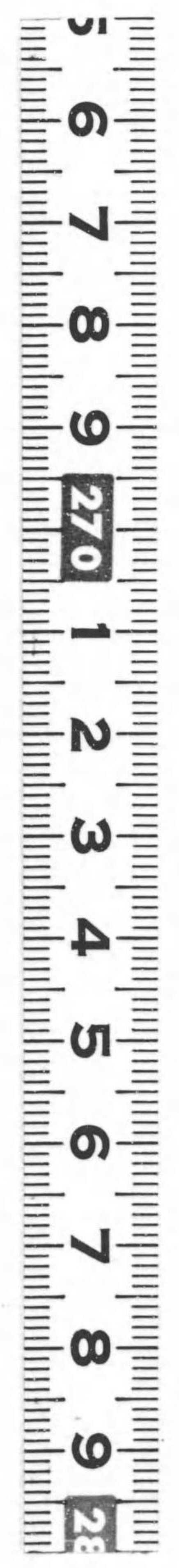


543
5



始



KI4D-54



覺



凡例

- △本書はロシア現代の作家メレジュコフスキイ氏の小説 Forerunner を英譯より重譯したものである。
- △著者メレジュコフスキイ氏の如何なる作家であるかに至つては序文を見られたし。
- △Forerunner の譯語には少なからず困却した。初めには「先達」として見たが、それでは多少頭領株の意があるので、改めて先覺者の意味で「先覺」としたのである。併し著者の主人公ヴェインチの取扱ひ方は、たゞに先覺としてゝはない。矢張 Forerunner としてゝある。即ち先きぶれ、時代の先驅としてゝある。それ故意味から言へば先驅とするのが最も良いのであるが、先驅では少し題名として落着を缺くので、やむなく先覺とした次第である。
- △本書の内にはイタリヤ語とラテン語とが隨處に顯はれて來るのでこれまた少なからず困却した。先輩の教を受けた處も少くはないが大體は自分の乏しい兩國語の知識をいろ／＼に工面してこれを譯して置いた。蓋し間違も少くはあるまいと思ふが、これを諒とせられたい。
- △本書の譯については西野彌三次君の多大なる助力を仰いだ。深く同君に謝意を表して置く。

大正四年八月末日

譯者識

序

ミランの公イル・モロはその宮廷に當代の學者を集めて哲學・神學の問題を討議させた。時は千四百九十八年でサヴォナローラが火渡りの試験をするといふその時の事であつた。列席の學者の提出した論題が頗る面白い、その一二を取つて見ると斯様なのがある。

美人は醜婦よりも子を産む事多きや。

婦人は不完全なるものなりや。

基督が十字架に釘けられし時、その脇腹より水出でたりといふ、此の水は身體の何處に存したりしか。

婦人は男子よりも多情なりや。

先づこんなもので甚だ滑稽な話であるが、當時の學者は決してこれを滑稽とも冗談とも考へて居たのではない、眞面目に本気で、斯様な事を考へて居たのである。その時本書の主人公たるレオナルド・ダ・ヴィンチは一隅に黙として控へて居たが、それと見た宮廷の婦人達は是非レオナルドにその學説を述べさして見たいと云つて、その起立を強ひた。彼等婦人達はこの學者の討論を犬の囀合か雞の蹴合のやうに心得て居たのである。レオナルドは素より自分の學説などの傾聴される筈はないと考へて居た事として、固く起立を辭つたが、宮廷の人々は斷じてそれを許さないで、やむなくやがて演壇に立つて口を開く、そして何を云ふかと思ふと口を納らせながら、

諸君はアノ貝殻を御存じですか、アノ貝殻を、始め海に棲む生物の影が山の上にあるのを御存じですか、あれは一體何の理由でせうかと説き出した。

神學・哲學の高尙な問題を討議する際に當つて、こんな馬鹿らしいたわいもない貝殻の話を始めたので、一座の大學者は一齊にレオナルドを嘲笑し、中には憤怒するものもあつた、そしてその結果は一堂大騒亂に終つてしまつた、而もレオナルドはこの貝殻から地球上の變化、地理上の諸問題を説明したのであるが、所謂當時の學者にはそんな事は一向に解らなかつたのである。

自分は嘗てこの『先覺』の中に於けるこの一節を読んで深く感ずる所があつた。今日理想とか絶對とか如何にも高尙らしい事を云つて居るものは、矢張り千四百九十年代の學者の考へて居た途方もない滑稽な所論と軌を同じくして居るのではないかと。爾來自分はこの書を以て近代の好著と考へて居た。

併しさらにそれを熟讀するに及んでこの書が暗示的にまた啓發的であり、而も讀物として頗る面白いものであり、上記の貝殻の話の如きはその内の些細なる一挿話に過ぎぬ事を知つた。先づレオナルド・ダ・ヴィンチなる人物が近代人物の先驅として、所謂文藝復興期の一切を代表して居る所が興味甚だ深く、次で文藝復興期なるものが如何にも明晰に眼前に見えるやうに描かれて居る事は、正にこの書が近代の歴史小説として他に一頭地を抜いて居る所以である。

文藝復興期、その代表たるヴィンチ、この二者を明らかに描いて當代を具現するのが恐らくこの書の目的であらう。そしてその目的は充分に達せられて居ると自分は思ふ、思想の公平な人であるならば、何人でもさう考へ

る事であらう。

ヴィンチの事業の第一は飛行である、飛行機を考察するのが彼の第一の仕事であつた。飛行機は實に二十世紀劈頭の所産である、新らしきものと云へば飛行機である。それを、今を去る四百年の昔にあつて考察したといふに至つては、その事が新人にして新時代の先覺たる第一の特徴と云はなければならぬ。よし飛行機の考察は實際の事ではなくて、只著者メレジュ・コーフスキイの想像から、ヴィンチがこれを工夫したと假定したのだとしても、新人先覺たるヴィンチを具體的に描くには尤もその當を得た要點である。

第二にはその特に専門としたる繪畫の上に於ける新機軸である、恐らく油を以てする近代の油繪なるものはヴィンチから始まつた事らしい。そして其畫は今なほルーヴル宮殿の寶物となつて居る、「最後の聖餐の圖」「モンナ・リサ」——昨年盜難にあつて一代を騒がした——等は美術の新時代を規するものとして永く敬重されて居る。

その他都市の設計、運河の開鑿を始め耶蘇の十字架に用ひたりと云ふ釘をあぐる起重機の工夫、桃樹に毒素を注入する試験等、凡て時代を遠く踏み出したる考慮をなせる事は、その新人先覺たる所以を明らかに示すに足るのである。

特に繪畫を以て手工に於ける一技術となさず、これを以て天地の美を表現するものとなし、特に自然科学、解剖學にその基礎を置かなくてはならぬ事を説いた處は、深く最新時代の精神と合致して居る事として注意すべきである。なほその弟子に與へる折々の教訓等に至つては實に驚くべきものがあるのである。さて一方にかく主人公ヴィンチが斯様な風に顯はされて居ると共にその時代なる文藝復興期がまた同様に面白く顯はされて居る。

第一に中世から過渡期の文藝復興時代に於けるイタリアの邦國は實に紛亂を極めて居る。ミラン、ヴェニス、フロレンス等の諸侯それ／＼相結び相戦ひ、その合縱連衡の狀は支那の戰國時代と同じく、諸々の専制君主がみなその權勢を張らんとして居るその状態は、イル・モロ公を劈頭に、シイザア・ボルシヤ、その他皆手に取るやうに示されて居る。さしにも紛亂したイタリアの有様も著者メレジュ・コーフスキイの筆に依つて瞭然たらしめられるのである。

なほ専制君主に對してはロオマ法王なるものがあり、さらにこれに對して宗教界の大人物サヴォナローラを點出し、これに依つて當時の宗教界が如何なる有様にあつたかを説明して居る。サヴォナローラは曠世の大聖であらうが、時代の影響は免れがたく常に一種の迷信に囚はれて居たり、さらに法教に潛心するの餘り、あらゆる奢侈品は云ふまでもなく、美術に關するものをも盡くこれを異端のものとなして、これを排斥し遂にこれを燒棄さしてしまふ。こゝにも文藝復興期の特徴が見えるが、面白いのはその美術品を沒收する少年の神聖軍で、やがてサヴォナローラの大刑に就かんとする時には、同じこの少年隊の一人が悪戯して老僧をその途中で轉倒せしむる事をするあたりは、些事ながらまことによく文藝復興期の人心を指示したものであると思ふ。

美術を排して異端惡魔の具とする教徒から見れば、ヴァインチは勿論惡魔そのものである。それ故酷しく當時の熱狂者流から迫害される。併しその實ヴァインチは深奥な思想家であると共に必らずしも大なる意味に於ける宗教に冷淡なるものではないのであるが、その眞想は到底了解されずに終る。

さらに時代は斯くの如くであるが、一方に又民人の間に於ける古美術に對する憧憬は甚だ切なるもので、切り

に土地の開墾が行はれ、埋没されたる古美術が世に引き出される。同時に諸々の専制君主もまた美術を愛好し、ヴァインチの如きも、かれよりこれと轉々して諸の君主に師事する事を得たのであつた。

そんな事實を一夕書いて居ては際限はないが、特に注意すべくまた面白く思はれるのは、この才人の仕事が一として成就されたものはなく盡く失敗に終つたといふ事である。第一に「最後の聖餐」の畫は龜裂を生ずる傾向を示して、永久の作となる能はざる事を證し始め——但しこれは今でもルーヴルに立派な實物として残つては居るが——イル・モロ公の没落と共に騎馬像は野蠻なる佛軍の兵士の爲めに破壊され、飛行機は終に飛行せず、却つて弟子の一人は計算の誤謬を知らずして飛行を試み、負傷して不具になつてしまつた。その上に財政上の窮乏に陥り、一方には自分より偉大なるミケランジェロ、ラファエル等の大畫家が輩出して己の名譽を蔽うてしまふのは、まだしも、ヴァインチの公明なる喜んでアンデロと握手せんとするも對手はこれを惡意に解し——アンデロの性格描寫にはやゝその當を得て居ないやうに思はれる節もあるが——さらにその弟子中の尤物はラファエルの下に去り、尤も愛情を傾けたる一弟子は失望のあまり自殺するに終るが如きは、尤も痛烈なる悲劇といふべきものである。なほ自分はこの一代の奇才と怪傑マキアヴェルリとの會見交情に多大の感興を持つもので、こゝに無量の情趣が籠つて居ると考へるものである。

さてこの書はこんな風にして一方にはヴァインチの人物を具現すると共に一方には時代を明らかに描き出して居るが、かくて自分はこの書を以て近代の傑作となし、特に新らしい歴史小説としてこれを讀書社會に推舉するに躊躇しない。

由來この先覺 Foreunner は三部小説の中卷である。第一卷は「神々の死」と題し、背教者ジュリヤン Julian, the Apostate を書いたものであり、第三卷はビーター大帝を材としたものである。そして第二卷なる此の書は、オナルド・ダ・ヴィンチを題としたものであるが、第一卷の題に對してこの書を一つに又「神々の復活」といふのである。蓋し第一に於ては皇帝ジュリヤンの努力を以てしてなほ且つ古の神々は基督教のために倒され全く死して葬られ終つた事を寓し、第二卷に於て新時代即ち近世の先驅としてヴィンチをあけ、これと共に再び古ギリシャの神々は復活し來る事を示し、さらに第三卷のビーター大帝に於てギリシャの神々の思想と基督教の思想との合致を説くのである。而も三卷を一貫して明らかに認められるものは非基督教的的精神である。恐らく著者の考は、キリスト教の爲めに埋没されたる古の思想精神が徐ろにその頭を擡げ來つて、近代に於て優にキリスト教的思想を壓倒するに至つた経過を語らんとするのであらう。三卷を通じてこの心持はまさしく認められる。

メレジュコーフスキイに於けるこの非基督の思想は、蓋しその源をドイツのニイチエに發し、著者はその感化の下に筆を執つて居るのだといふ説もある。その力なるものを力説しこれを宣傳し、且つ今のべた如くに非基督を唱ふ處を以て見ればこの説には道理がある。正しく著者はゴルキイと共にこのドイツの思想家の影響を受けて居るのであらう。殊に又基督、非基督を超越した偉人の出現を著者が期して居る邊は、ニイチエの Overman を眼中に置いて居るとも云へやう。

さてこの書は三部小説の中卷であるが、他の二部とは獨立して讀みうる事勿論である。そして往々人は背教者ジュリヤンを書いた第一卷を以て最も勝れて居るやうに云ふが、自分はいろいろの理由からこのヴィンチを書いた「先覺」を以て白眉とする。これは人々の嗜好にも依る事であるが靜かなる判斷力ある人は自分のこの意見を正當と認めるであらうと信ずる。蓋しこの「先覺」には非基督の勝利の露骨に顯はれて居る爲めに或は宗教の側から嫌はれる恐れがありはしまいかと察しられる、但し吾々基督教にあまり深い關係のないものには殊にこの點に就て公平な判斷が出来はしまいかと思ふ。

抑も文藝復興期の事を書いた小説と云へば、吾々は直ちにジョオジ・エリオットのロモラを思ひ浮べる。ロモラはエリオットの大作でまた往々その傑作と言はれて居るものである。自分は嘗てこれを読んだが、さらに何等の感興を得なかつた。當時は自分の鑑賞力がなかつたのであらうと考へて、其後數年にして、これを再讀して見た。併し再讀の場合にもなほ且つその評判ほどの優越を認める事が出来なかつた。婦人なる主人公ロモラの性格に至つては一向に人間らしい感じを得られなかつた、サヴオナローラに至つても強い印象を與へられなかつた。文藝復興期といふ感じに至つてはさらにこれを得るによしなかつた。たゞタイトオなる青年の心理、その罪惡の淺瀬より一步毎に深みへ陥つて行き、再び引きかへせなくなる経過だけは多少の興味を以て味ふ事が出来たのであつた。ロモラほど有名な作に對して、それほど感興を得ないといふのは、勿論自分の鑑賞力の不足に依るに相違あるまい、併しながらそれは全然鑑賞力の不足にのみ歸する事は出来まいかと思ふ。嘗て自分は小泉八雲—— Lafcadio Hearne —— 氏の講義を聞いた時、氏は英文學史を説いて、このロモラに至り、その諄々たる口吻を以て、ロモラの作に就て、著者の苦心と努力とを語り、さて曰く、書を読する事五百、而もこれ失敗の作なりと。先生はかくこの大作を斷じ去つたが、その時の先生の語氣はまだ耳に残つて居るやうな氣がする。兎に角先

生の批評に依つてもロモラが文藝復興時代の描寫としては價値のないものである事が了解される。

然るにメレジュコーフスキイのこの作に至つては前段述べた通り、その大局に於て微細の點に於て、著者の期して居る處は充分に達せられ、讀者は實に十五世紀のかの不思議な時代に伴はれ、グインチといふ不思議な鬼才に接して居るやうに感ずるのである。イギリスの批評家 Courtney 氏の如きは、メレジュコーフスキイの作が必ずしも、現實のグインチを顯はすものでないやうに云つて居るが、それは間違ひである。吾々はエリオットの作に於て時代の事に關して得る處のないに反して、この作に於てはよしコオトネエの説の如く、グインチが眞實でないにしても、讀者はそれに依つてその人物と時代とに關して何者かを獲取しうる、この獲取はすでに偉大なる所得ではあるまいか。吾々は少くともこの點に於て著者メレジュコーフスキイをエリオットの上に置きうるのである。そしてメレジュコーフスキイがエリオット以上であると云へば、その世界文學の間に於ける位置は大略察し得られる次第ではあるまいか。

著者メレジュコーフスキイ氏は最近のロシアの作家である。ツルゲネフ、トルストイ、ドストイエフスキイに次でロシア文壇の覇權を握つて居る作家である。自分はロシア文を読み得ないので、その文の如何を云ふ事は出來ぬが、察する處頭腦の頗る明晰な人であるらしい。その例は澤山にある、中にも自分の最も感服したのは「*Man and Artist*」なる書物である、この書に於て著者は尤も明晰にトルストイを論じ、ドストイエフスキイと對比して飽まで讀者を首肯せしむる斷案を下して居る。この外極めて小冊子ではあるが、フロオベルを論じた小論文の如きも同様である。その明晰といふ點に就てはこの *Fore-runner* も同様で、飽まで著者は自分の思想と主

張と、その取り扱つて居る時代なり人物なりを讀者に納得させなければ已まない概がある。若し缺點と云へばあまりその明快な處にある、何となれば讀者はあまりに要領を得るに過ぎて、或は著者が云ひ過ぎて居るのではないかと懸念を起さしめるからである。併しそれがまた氏の著書の興味に富んで居る所以である。自分は今こゝにこの珍らしい近代の好著を吾が讀書社會に紹介し得たのを光榮とするものである。

戸川秋骨

目次

序	一—九
一の卷	白夜叉.....	一
二の卷	此の神を見よ——此の人を見よ.....	五
三の卷	毒ある果實.....	九
四の卷	巫女の安息日.....	三三
五の卷	汝の意思の如く成させ給へ.....	六六
六の卷	デヨーヴァンニ・ボルトラフィオの日記.....	九八
七の卷	虚榮物の篝火.....	一四九
八の卷	黄金時代.....	二六四
九の卷	相似.....	三三七
十の卷	静水.....	四三
十一の卷	翼を有するやうになる.....	四九一
十二の卷	ケーザルか然らずんば無.....	五〇〇
十三の卷	紫衣の獣.....	五八三

十四の巻 夫人リサ・ヂョーヨンダ…………… 六三

十五の巻 宗教裁判…………… 六五

十六の巻 レオナルド、ミケランヂェロ及びラファエル…………… 六七

十七の巻 死——翼ある先驅…………… 七〇

後 紋…………… 七二

先 覺



我れ想ふ、
ユリアヌス再び起てりと——

ペトラルカ

露 國 メレジュコーフスキイ著
戸 川 秋 骨 譯

人なる神の神なる人に對するが如き——
アポロ・ベルゼエレの基督に對するが如き、
吾人は廣大なる矛盾の逢着を見る。

ドストイェフスキイ

一の卷 白夜叉——一四九四年

「シエナで又もヴァイナスの彫像が発見されたので、其處の市民は非常に喜んだ。そして大勢の者が集まつて盛大な宴を張り儀式を催してから、此の彫像をば「歡樂の泉」といふ名の噴水の上に据ゑ付けて飾りとした。

「ところが後にフロレンスと葛藤を生じて國歩甚だ艱難となつたので、シエナ議會の一員、即ち市民の一人が起つて斯んな事を提言した——我が市民諸君、あの彫像が発見されて以來、不幸の数々が當市に起りました。で、我等は如何に偶像崇拜が吾々の信仰上嚴禁されてゐるかの點に思ひ及びますれば、神がこれを罪惡なりと認めて此の禍難を下し給うたことより外に考へやうがないのではありませんまいか？ 依つて私は忠告致します。彼の像を當市の廣小路から持出し、その直を傷けた上、粉微塵に打碎いてから。フロレンス人の領分内に運んで埋めなければなりません——」

「衆人は此の説に賛同して法令を以て之れを認可した。そして實際にそれを執行して、彫像は我等の領土内に埋没された。」(十五世紀に出でたるロレンツォ・ギベルチの「フロレンスの彫刻家」に附せる註釋より。)

フロレンスにある染物組合の商店はオルサンミケレなるカノニカの直ぐ近くにあつた。小屋、納屋、それから曲がつた突喰棒を嚙まされてゐる張出しの建物などのために店々の形は損ぜられた上に、瓦屋根が甚だ近く接し合つてゐるため、殆んど天が塞がつて、眞晝の光りにあつてさへ往來は暗かつた。下の門口には外國から送つて来た毛織もの、見本が吊下がつてゐるが、それは鮮苔から得るリトマス液や、洋紅や、タスカニの明礬の腐蝕液に浸した大青などで染めるために、このフロレンスに送られたものである。往來には粗雑な敷石があつて、染料の桶から滲み出す各種の色は下水に流れて居た。それから主要立つた商店、即ち伊太利語で云ふフォンダキの入口にある楕形の看板には、「紅色地に金地の鷲を出し、銀地の羊毛の球形の上にそれを見せた」此のカリマラ(蓋し染物組合を斯く名けるので)の紋章が光つて居た。

此等大商店の一つの、夥しい出納帳や商賣に關した書類を重ねた中に、チブリアノ・ブオナコルシは座を占めてゐた。此の人はフロレンスの豪商で同時にカリマラ組合の長である。

時は寒い三月の誰彼時、押し付けられて息詰まるやうな窘からじめくした空氣が發散してゐる。老主人は風邪心地なので、着てゐる栗鼠の外套をば固く掻き合はした。彼の耳には鵝筆が挿んであつて、視力衰へて近眼となつた其の目は、無頓着なやうで然かも念を入れてゐるらしいのであるが、一切のものを知りぬいて居るかのやうに、彼はその嵩高な元帳の羊皮紙を見てゐた。元帳は左方が借方、右方が貸方で、幾本かの直線を以て其の

間を割られ、直立體な變化のない手跡で小書を入れられ、句讀、花文字、亞刺比亞數字などの飾りは付けてなかつた。それ等は些細な新案で商用の帳簿には邪魔なものと考へられて居たのである。其の最初の頁には大きな文字で次ぎの文句が記してあつた。

『我等の主耶蘇基督と最も幸ある童貞マリヤとの御名により、本帳簿は紀元一千四百九十四年に始まる。』
チブリアノ主人は抵當に受取つた荷包の數に誤りのあるのを直して、それから莢の儘の胡椒や、メッカの生姜や、肉桂の束などの最近の記入を見て、満足の色を見せて疲れた身體を椅子の背に寄り掛け、兩眼を瞑つて、佛蘭西モンベリエの羊毛市場へ派出した自分の使者に送るべき手紙の事を考へてゐた。丁度其の時誰か這入つて來たので、老人は目を開けて見ると小作人のグリルロであつた。此の男には兼てムニオーネの河畔にあるサン・ヂエルヴヅの山莊に附屬してゐる葡萄園や畠を貸してあるのである。グリルロは無暗と丁寧な辭儀をして、念入りに填めた鳶色の卵の籠を差出した。其の帶の間には肥えた雛が二羽、足を括られ首を吊られて、クゝと鳴いてゐる。

『あ、グリルロかい！』と例によつて品の良い口の利き方をしてブオナコルシは言つた。『何うちやな神様の御慈悲に預かつてゐるかな？でも何うやら到頭春めいて來たやうぢや。』

『チブリアノ様、私が見たやうな年寄りに春が來たと何の嬉しい事がござりませう。古びたこの骨の痛みは前よりも烈しくなりまして、墓へ這入りたいと大い聲で怒鳴つてをりますぢや。然うく且那樣、復活祭のお供へになさる卵と雛を持つて参りました。』彼は斯う言つて碧い目を緊め付けるやうに閉ぢた。すると無數の小

雛が目の回りに現れたが、それは無慈悲な風や天日に曝された結果に外ならないのである。ブオナコルシは進物の禮を述べて仕事に取掛らうとした。

『ちやお前は畠の方の人数を用意して置いたね？夜の明ける前にすつかり片付くか知ら？』

グリルロは大袈裟に溜息して、杖にぐたり寄り掛かつて考へ込んだ。『支度はすつかり出來てゐますし、人数も充分に揃つてゐます。だがチブリアノ様、これは私からお伺ひするのでござりますが、少しお待ちなさる方が善くはござりますまいか？』

『それはお前可けないよ。待つてはならん、でないと事が人に知れるからとお前が言つたぢやないか。』

『如何にも申しました。が、恐ろしい事なのでござります。云は、罪惡でござりますから——それに此の頃は聖日に差掛かつてゐまして、齋日ですし、あの仕事と云つてはそれとはまるで違つた性質のものでござりますからナ。』

『構はないよ、罪は私一人の身に背負つてやるから。何にも恐がるには及ばん、私はお前を困らすやうな事はしないから大丈夫だ。只これだけ聞かして呉んなさい——尋ねてゐる物が全く見付かるか何うか。』

『なんで見付からない事がありますものか？私共の手引になるやうな形跡は幾らもござります。あの水ヶ窪にある水車場の後ろの山の事は先代の人だつて知つてゐませう？それから夜分はサン・チョーヴァンニに鬼火が飛ぶさうでござります。それに依つてもその附近にはどつさり缺けらのある事が分ります。大して古い事でもありませんが、私が一寸小耳に挿んだ事がござります、マリニョラの葡萄畑を掘つてゐましたら土の中からそつくり

した鬼が出て来たさうでございます。

『鬼だつて？ 何んな風の鬼だナ？』

『青銅で出来てゐまして角が生えていました。毛の一杯生えた足をしてゐまして——左様、山羊の足で——蹄もありましたから。そして笑ひ顔をして、片足で踊りながら指を弾いてゐました。何でも極く古いものと見えまして、體中が緑色になつて、壊れて居ました。』

『それを皆で何うしたのぢや？』

『鐘に鑄まして、新たに建立になつたサン・ミケレ寺へ納めました。』

チブリアノは我を忘れて言つた。『グリルロ、お前其の時私に言つて呉れ、ば好かつたのに。』

『でも旦那様はシエナへ行つてゐらつしやいました。』

『手紙で知らして呉れさうなものぢやないか。左様すれば誰か人を送るのだつたに——否や私が行つても好かつたのだ——金なんぞは惜む事ぢやない——それを呉れ、ば代りに鐘の十位鑄てやるのだつたがな。實に馬鹿共ぢや！ 踊つてゐる林野の神を潰して鐘にするなんて——殊によつたら本統のスコ・オ・バスの作であつたかも知れんのに！』

『左様でございます、馬鹿な真似をやつたものでございます。併しチブリアノ様、左程お腹立ち遊ばすがものはありませぬ。其の罰があつた衆りに来たのでございますもの、と申すのは新しい鐘を吊るしてからは蟲共が林檎を喰ひまするし、それに阿列布は滅茶でございます。のみならず鐘の音色は悪うございます。』

『何故かな？』

『其の御返答は私には出来ませんが、本統の音色ではございません。基督教信者の心に喜びを起す調子ではなく、何だか意味のないやうな音を出してゐます。それは其の筈でございます、口の利けない鬼を基督教の鐘に拵へる事は出来せんからな。箇様に申しましたとお忿りになつては可くませぬが、父なる神様のなさる事に間違はございません。チブリアノ様、御覽なさいまし、汚物を斯様掘り出しましたが善い事は少しもございませぬ。今晚もあの仕事に出掛けます時は能く用心をしまして、十字を切つたり祈りをしたりして豫防をするのが肝腎でございます。悪魔といふ奴は恠巧な上に威力の強い者でして、まあ犬の子とでも云つたやうなものでございませう。何しろ一方の耳から這入つても一つの耳へ抜ける奴でございますから。現に私は水車屋の山でツケオが見付けた石の腕位で以て誘惑された程でございますから。私を誘惑したのは悪魔でございます。其のため非道い目に逢ひました。お、神様の御守護を願ひまする！ 斯う思出してさへ恐ろしい！』

『何んな事だつた、グリルロ？』

『それは昨年秋、マルチン祭の晩に起つた事でございます。私は坐つて食事しようとしてしまして、家内が食卓の上へ粥を載せました。丁度其の時でございます。水車場の山で畠の土を掘つてゐた私の甥のツケオが飛んで這入つて来ました。そして叔父さん！ まあ叔父さん！ と叫んで、顔は心配らしく色を變へてゐますし、震へて齒はカチ／＼鳴つてゐるのでございます。神様がお前を護つて下されてゐるぢやないか！ と私が斯う申しますと甥は話し出しました。あ、叔父さん！ 壺の下から死體が匍ひ出してゐます！ 叔父さん御自身で行つて

御覽なさい——斯う申すものですから私らは十字を切つて家を出ました。その時はもう暗くなつてゐまして、林の後ろから月が上つてゐました。行つて見ると橄欖の古い切り株があつて、其の側の土を掘つてある處に何か光る物がございます。屈んで見ますと、それは眞白な一本の腕で、御城下の女御衆に見るやうな丸々とした綺麗な指がついてございました。で、私は、これはまあ何と云ふ残酷な事をしたものだらうと思ひながら、提灯を穴の中へ差し入れますと、ま何うでせう、其の腕が動きまして、指で以て私に何か合圖をします！これが何うして動かないでゐられませう、私はキツと叫んで膝を突きました。所が私の祖母のモンナ・ボンダは私を吐りました。元來此の祖母は評判の柄巧者でございまして、随分年を取つてはゐますが、何うして仲々の元氣者でございしますが。それが私に言ひますには、此の馬鹿者が、何がそんなに恐いのだ？目で見れば分るぢやないか、これは死んでもゐなければ生きてゐない唯の石といふ事が見て分らないのか？と申しまして手を掛けて土の中からそれを引き出しました。私は、そんな事をしては可けない、矢張り打遣つて置きなさい、手を觸れてはならない、埋めて置いた方が宜い、でないと私は飛んだ目に遭ひますよ、と斯う言ひました。それでも祖母は、そんな事はあるもんぢやない、兎に角お寺へ持つて行つて神様に祓ひ淨めて頂かうと言ひましたが、それは祖母が私を欺いたのでした。何故ならお坊様には出さずに燧爐の隅の方にそれを隠して置いたからでございまして。一體祖母の部屋には襦袢、膏藥、草、御符と云つたやうな種々様々のがらくた物が貯めてあるのでございまして。私が達て申しますと祖母も強情を張つて其の腕を手放さうとはしません。そしてその日からと云ふもの此お婆様が非常に不思議な療治をするやうになつた事は疑ふ餘地もありません。例へば齒痛みと致しませうか。祖母が其の人の

頬にあの腕を觸れるだけで以て、腫れてゐるのが退いてしまひます。熱病、疝氣、癩癩も祖母の手に掛れば治ります。牛が産氣付いてゐながら出ない時は、モンナ・ボンダがあこの石の腕を其の牛に當てますと、鳴き聲を立てて轆を産みまして、出た轆は薬の中で躍つてゐるといふ始末。斯んな不思議な事をする評判が世間に立ちましてお婆様の金箱には金が盛り上りましたが、併しそれがために一向何も善い事はございませんでした。と云ふのはあのドン・ファウスチノ様が一日として私に安い思ひをさせなかつたのでございまして。寺で皆の前で説教なされる時、此の私を悪し様に仰有りました。お坊様は私を地獄の子だの悪魔の伴だのと罵つた上に、私の事を僧正様に傳へて聖餐を頂かせないやうにすると言つてをられます。往來へ出ますと子供達が背後から跟いて来て、指しながら、彼處へ行くのがグリルロだ、魔法使ひだ、彼奴の祖母は巫女なのだ、二人とも悪魔に身體を賣つたのだと囃しなす。夜分でさへ私の心には休まりがありません。思ひなしか石の手が持ち上がつて柔然私の首の上に載つかります。と不意に其奴のために喉を押へられて息がつまりさうになりますから、聲を出さうとしますけれど、それが出せませぬ。此奴あ本統に飛んだ事だ——と斯う考へたものですから、或る朝未だ明るくなる前に婆様が草を掴みに行つたを幸ひ、私は起きて婆様の部屋を明けると腕がありましたから、取出して旦那様の處へ持参致しました。屑屋のロットならあれを十ソルヂで買つたのでせうが、あなたからはそれで八ソルヂを頂いた計りでした。けれども旦那様のおためになる事なら差引二ソルヂは愚かな事、私の一命をさへ何時なりとも差し出します。何卒神様の聖い御恵みが旦那様に降りますやうに、アンヂェリカ様にも、お子様達にも、お孫様達にも降りますやうに！

『それではグリルロ、お前の言ふところに依つて見ると』とチブリアノは思ひに沈みながら言つた。『水車場の山には私らの物が見付るなう？』

『何うやら澤山見付かりさうでございます』と深い溜息を吐いて老爺は言つた。『併しドン・ファウスチノ様に何うあつても話してはなりません。若しかお坊様の耳に其の事が這入ると、お坊様は定めし私の悪口を言ひ觸らしませうし、又旦那様に對しましても悪い事をし兼ねますまい。何故と申すに坊様は皆の衆を煽動して、旦那様のお仕事が出来ないやうにするからでございます。まあ、神様にお願ひをしまして御慈悲を垂れて頂かなくてはなりません。それは然うと旦那様、私を御見捨てなく何うぞ私のために一言裁判官に言つて戴きたいもので。』

『はてな？ お前の地面を少し計り水車場の奴が横取りした事かな？』

『左様でございます、旦那様、彼奴實に狡猾極まる悪漢でございます。よく人を酷い目にはあはす奴でございます。斯うでございます、私が裁判官に牝の犢を一匹贈りましたら、奴等牛を奮發しました。裁判官が奴の利益になるやうな判決をしなければぬかと案じられてなりません。何しろ訴訟の黒白が付かないのに、最早あの牛は立派な牡を産んだのでございます。何うぞ御願ひでございますから私のために口を利いて戴きたいもので——全く旦那様は親と思つて居りますので。ある水車場の山でしようといふ仕事は、旦那様の御親切に報いる積りです。計りでございます。他の理由なら私の良心を斯んなにして罪に墮すやうな事は致さんのでございますが。』

『安心してゐらつしやい、グリルロ。お前のために此の私が口を利いて進ぜよう、裁判官とは友人の間柄ぢや

でなう。ではお前臺所へ行つて、御飯を食つて一杯やるが好い。そして今晚は私と一緒にサン・ヂェルヴァズへ出掛けるのぢや。』

老爺は數度辭儀をして出て行くし、チブリアノは藏に近い小さな部屋へ這入つた。其處は古物の置場で、大理石や青銅で作つた物が壁に懸かつたり臺の上に並べたりしてある。それから鑄牌、古泉の列んでる臺には巾を被せてあるし、彫像の壞れて未だ繼合せてないものは大きな箱の中に入れてあつて、何時かを待つて癒合する事になつてゐる。彼は各國にゐる自分の商業代理人の手を経て、或はアゼンス、或はスミルナ、ハリカルナツサス、サイブラス、リユーコシア、ローデス、又埃及の僻陬、東部諸邦の中心地と云つたやうな、あらゆる古代美術の土地から古物を買ひ入れたのであつた。カリマラ組合の長は此の寶物を眺めてから、羊毛の輸入に對する關稅の事を深く考へ込んだ。そして到頭モンペリエの羊毛市場へ行つてゐる手代に送る手紙を書いた。

二

さて一方に、倉庫の後ろの、荷包みが重ねてあつて、光りといへばマドンナ像の前の燈明のみが細々と光つてゐる前で、三人の青年ドルフォ、アントニオ、チョーヴァンニが冗口を利いてゐた。ドルフォといふのはブオナコルシの手代で、赤毛の獅子鼻ではあるが氣心の善い若者、アントニオ・ダ・ヴィンチがカンナといふフロレンスの尺で手早く反物を量つてゐるのを帳簿に記入してゐる。アントニオは年よりは老けて見え、眼はどんよりとして、其の黒い髪は薄くばさ／＼してゐる。チョーヴァンニ・ボルトラフィオはミランから繪畫の修業に來てゐる者で、十九

歳の大きな少年なのに、臆病な羞恥み屋で、そして無邪氣な灰色の目は打沈んで、優柔不斷な容子が顔に表れてゐる、彼は既に出来上つた荷包みの上に足を組んで坐つて熱心に耳を傾けてゐた。

『到頭斯んな事になつたのだ、異端の神を土中から掘り出したたりなんかして！』とアントニオは激して言つてから、『さ、蘇格蘭地の茶編だ、三十二ブランチ、六フィンガーと八ネールだ』と反物の丈をドルフォに書き取らした。それから其の反物を疊んで、置き場所へ投つてから、豫言者の威嚇するやうな態度をして指を擧げて、フ

ラ・ヂロラモ・サヴォナロオラの句を真似て、アントニオは叫んだ、『疾くく地上の神に短剣を！ 聖ヨハネはバトモスの島で斯んな光景を夢想された。それは天使が龍、即ち大蛇、實は悪魔であるが、其の龍を捕へて一千年の間繋いで置く事にして、底無し穴に入れて閉ぢ込めた上封印をなされた。そして一千年が満つる迄は人間を欺かないやうにされた。所が今日こそはサタンが宥されて彼の幽閉から出たのだ、今日こそは千年が盡きたのだ。偽りの神や、非基督教徒の先進や後進は天使の封印の下から這ひ上つて、人類を誘惑するため此の世界へ歸つて來たのだ！ 陸上に棲むものも、海上に棲むものも、みな憐れなる哉だ！——えと、ブラバントの黄色薄地、十七ブランチ、四フィンガー、九ネールだ！』

『ではアントニオ、君の考へは何うです？』と驚きながらも熱心な興味を見せてヂョーヴァンニは尋ねた。『そんな徴候は證據になるのか知ら——』

『然うとも、然うとも！ ね、君、到頭其の時になつて來たのだよ。古代の神像を發掘するばかりか、それに模して新しい奴を拵へるのだ。畫家も彫刻家もモロク——といへば悪魔の事だがね、其のモロクに奉事するに

日も維れ足らずだ。詰り神のお住ひを變へてサタンの殿堂にするのだ。宗教畫としてからが、殉教者や聖徒と見せ掛けて、不潔な神を描くのだもの、そして一般の人がそれに祈りを捧げる始末さ。例へばバプテスマの約翰の代りにバツカスを描くし、主の聖母の代りに無恥なヴィーナスを私らに授けるのだ。あの畫が皆んな火に焚けて、其の灰が風に吹き散らされれば好いのに！』

熱心な手代の情い黒目から押へ隠して居たやうな閃光が發した。併しヂョーヴァンニは敢て答へようともせず沈黙してゐた。其の優しい、子供のやうな眉毛は沈思の重みに壓されて締まつてゐたが、それでも到頭口を開いた。『アントニオ、噂に依れば君の親戚のレオナルド先生は畫室へ弟子を取つてくれるさうだ。私も以前から希望してゐたが——』

アントニオは蓋面作つて相手の言を遮つた。『ヂョーヴァンニ、君は魂を亡くしたければレオナルドの家へ行

くが好い！』

『何ですと？ 何故です？』

『あのレオナルドは私の近い親戚で、私よりは二十年も先に生れてゐるけれど、併し聖書に書いてあるぢやないか、汝は第一、第二の諫めを受けたる後には、異教の徒より引返すべしと。レオナルドは其の異教徒なのだ、そして不信心家さ。あの人の心はサタンのやうな自負で以て曇つてゐる、何しろ數學や魔術に沈湎して自然の奧秘を闡明しようと思ふのだもの。』斯う言つてから目を天の方に向けて、サヴォナロオラの最近の説教を繰返した。『此の世の知識なるものも神の眼には愚なる事に過ぎぬ。我等は彼等——彼の學者達の如何なるものなるか

を知つてゐる、彼等は擧つて悪魔の家へ行くのである。』

『そしてアントニオ、君はレオナルド先生が此のフロレンスにゐる事を聞きましたか？ つい此の頃ミランから歸つて来たさうですが』となほ羞恥むやうにしてチーヴァンニは言つた。

『何の目的で来たのか知ら？』

『それはミランの殿様が、なくなられた大ロレンツ様の所藏に係る畫を買はれるものなら買ひたいと思召され、レオナルド先生を御遣はしになつたのです。』

『成程。レオナルドが當フロレンスにゐるのなら、ゐるだけの事だ。そんな事は私に取つて大事な事でも何でもない』とアントニオは言つて、身體を旋してカナナを持つてつゞいて綠色の反物の丈を量りだした。

暮方の勤行に呼ぶ寺の鐘が鳴り出した。ドルフォは身體を伸ばして、安心の色を見せて帳簿をハタと閉ぢた。蓋しこれで此の日の仕事は濟んで、店や倉庫の戸が締まるからであつた。

チーヴァンニは往來へ出た。微かに夕映に赤く染まつた灰色の空は濡れた屋根の間から細く見え、細かい雨が風のない空から降つてゐる。と、不意に近い小路の窓から唄の聲が流れて来た――

偕ても綺麗な羊飼ひ、

女だてらに足軽く、

何處の山からいらした？

聲はよく徹つて若々しい。調子を取つて踏子をうつ音からチーヴァンニはそれが娘の機を織つて居るので、唄

は梭を投げる度に唄ふのであると察した。何とはなしにほんやりした喜びを感じて彼は聞いてゐるうち、春めいて来た事を思ひ出して、柔かいそして物悲しい一種變な風の感情が湧き上つてゐるやうに思はれた。

『ナンナー ナンナー小つちやなお前は何處へ行つた？ お前の耳は何を聞いた？ 急かぬと饅飴は冷めるぞえ。』と唄の聲がしてから、木履で牀の上を早く歩む音が聞えて、尋いで靜かになつてしまつた。

チーヴァンニは窓を見詰めて長い間立つてゐた。今聞いた快活な唄は、

偕ても綺麗な羊飼ひ、

女だてらに足軽く、

何處の山からいらした？

と宛ら遠くに響く牧童の笛を聞くやうに、彼の耳の中で反響してゐた。

そして獨りで溜息しながら彼はカリマラの組合長の家へ這入つて、蟲の食つた欄干が附いてぐる／＼曲つてゐる階を登つて、圖書室になつてゐる大きな部屋へ這入つたが、其處の机に倚つてゐるのはミラン侯の宮廷の史官チヨルデオ・メルラであつた。

三

メルラがフロレンスに來たのは君侯の使命を奉じて、大ロレンツオの書庫にある珍本類を購うためであつた。そして古代人の學藝に關して自分と同様に甚だ熱心なブオナコルシの家に寓してゐるのである。で、フロレンス

へ来る途、メルラは路傍の或る旗亭で、このジョーヴァンニ・ボルトラフィオと知り合ひになつて、寫字生が要るといふ口實を設けて、チブリアノの家へ伴つて来たのである。

ボルトラフィオが這入つて来た時、メルラはロオマ教の祈禱文書か乃至は詩篇らしい非常に古びた書物を、悲しく眺めながら吟味してゐた。彼は用心に用心を加へて水氣ある海綿で羊皮紙の上を撫でたが、それは死んで生れた小羊の皮から製した物で甚だ柔かな質の紙であつた。そして所々を輕石で擦つて、小刀の刃と光澤を付ける道具とで滑かにしてから、明るい方へ翳して再びそれを打ち眺めた。

『實に美しいものだ！』と嬉しさうに唇の内に吸ひ込むやうにしてメルラは呟いた。『出て来て天の光りを受けろが好いぞ！』まあ大勢ゐること、そして何といふ美しさぢやらう！』

彼は仕事を止めて禿けた頭を擡げた。其の顔は脹れて鼻は赤く、眉毛は能く動いて、小さな生彩のない目にはそれでも一杯の元氣が籠もつてゐるらしい。窓臺の自分の傍にある杯に酒を注いで、それを飲んでから咳をして、更に仕事に着手しようとした時、ジョーヴァンニの姿が目に入つた。

『おや、これはお若い出家様か！』とメルラは愉快氣に叫んだ。『其方は私の手を缺かしてゐたぞ。私は一人で、小僧さんは何處へ行つてゐるぢやらう？』屹度フロレンスの美人に戀慕したのに違ひない、と言つてゐたのぢや。大した美人に相違あるまい。そして戀慕は罪惡ではないからなう。いや、此の私も無駄に時間を費しては居なかつたぞ。あんな美しい代物を其方は生れて未だ見た事はなからうて。其の美人を見せて貰ひたいといふのかな？ 否、然うは行かぬ、見せるが最後、其方は東西南北にバツと一件の物を言ひ觸らすからなう。そして考

へて御覽、私は希伯來の襪襪賣から歌と思つて買つたのに、それが實は美人ぢやつたのだ。まあ、其方には見せてやらざるまい、其方だけにはな！』そして怪しげに應いて囁いた。『此方へお出で——もつと寄つて——此方へ！』

そして經文の角張つた文字を一面に書き附けてある或る頁を指したが、それは聖母を頌した詞や、聖歌、祈禱の文句などで、大きく記した樂譜が其の間に混じつてゐた。更にメルラは書物の他の處を開けて、ジョーヴァンニの目の高さ位に舉げて光線に當てた。ジョーヴァンニは注意して見ると、メルラが經文を削け取つた箇處からは別の文字が現れてゐるが、それは判然分らないもので、謂はゞ文字ではなくて文字の幽靈であつた。蒼白く瘦せ衰へ、消え入らん斗りの姿ながら、それでも矢張り羊皮紙の上に捺されて迷つてゐるのである。

『見えるかな？ 見えるかな？』と得々としてメルラは言つた。『可愛い奴ぢやないか？ だから美しい代物だつて言はぬこつちやない！』

『けれども何でせう、これは？』ジョーヴァンニは魂消て斯う訊いた。

『其處迄は言へんが、多分古い詩集の殘片で、希臘の美神に屬する新しい寶ぢやと思ふ。で、若しか私があるなければ、此奴は神の光りに接する事が出来んのぢや——和唱の歌や懺悔の讚美歌の下に何時までも埋もれてゐるのぢやつた。』そして中世の寫字僧は高價な羊皮紙を利用するため、多分希臘の古代文字と思はれる此の詞句を削つて、其の跡へ自分の聖歌を書いたのだらうと、メルラはジョーヴァンニに説明して聞かした。此の時、室内は徐ろに暮れ行く夕陽の紅色に満ちて、それが最後にバツと輝いた刹那、古書の幽靈たる此の古びた文字の影は、

一倍明瞭になつて現れた。

「御覽！ 御覽！」とメルラは恍惚として叫んだ。「年代を経た墓から死人が出たのぢや！ オリンピヤの神を頌した歌なのぢや！ 其方に初めの方の數行は分つたらうな！』
と言つて、希臘語を譯しながら斯う讀んだ――

「優しき神、見事なる冠を戴き給ふディオニサスに光榮あれ、

銀の弓を持ちて箭を遠くに射給ふ恐ろしき神、

流るゝ髪かみの神、ニオベの子等を殺し給ひし神、

爾なんぢフエーバスに光榮あれ――

それから其方が非常に恐れてゐる例のヴィーナスを頌した歌もあるぞ――

榮光あれ、爾なんぢに、金の四肢を有ち給ふアフロヂテの神よ、

爾なんぢは神と人との喜びなり。』

併し詩句は此處で上に書いてある經文のために隠されて斷れてゐた。ヂョーヴァンニは其の本を下に置いたが、置くと直ぐ古代希臘の文字の跡が薄く有耶無耶になつて、羊皮紙の滑かな黄色の中へ消えてしまつた。目に見えるのは、寫字僧の書いた黒色の、判然として脂染みた文字で、唄ふため大きい方形の譜の書いてある懺悔の歌であつた――

我が祈りに耳を假しませ、あはれ大神よ、願はくは隠れて我が祈願を拒み給ふが如き

事あらざれ。我が心は、我が中にありて我れを痛め苦しむ、あなや死の恐怖は、我れに臨み來りぬ。

蕃薇色せる反射の光は消え失せて、暗黒は室内に漲つた。メルラは土燒の徳利にある酒を注いで飲んでから、手に差した。

「これさ、私の健康を。一切の善き物を捨て、酒を選ぶ！ 其方は厭やと言ふのか？ よし、よし！ 何うなりと其方の自由ぢや。其方のため、私は飲むとしよう。それにしてもお若い出家様、あなたは何故其のやうに機嫌が悪るい？ 水の中へ陥まつたやうに青い顔をしてゐらつしやる。は、あ、あのアントニオの没分曉漢が豫言めいた事を言つて嚇かしたのぢやな？ あんな言葉には唾を引つ掛けるのぢや、ヂョーヴァンニ、唾を引つ掛けて置けば澤山ぢや！ 不吉な聲を出すあの鴉共のカー／＼啼くのに痘瘡の神が取つ憑けば好い！ さ、言はつしやい、其方はアントニオと一緒にゐたのぢやらう？』

「然うです。』

「して彼奴何と言ひ居つた？』

「非基督教徒の事とレオナルド・ダ・ヴィンチ先生の事を言つてゐました。』

「私の思つてゐた通りぢや！ 其方は口を利けば必然レオナルドの事を言ふ！ あの男に其方は迷ひ込んだな、お馬鹿さん。私の言ふ事を聞くのぢや、ヂョーヴァンニ。そんな愚にも付かん事を頭の中から出してしまつて、甘んじて私の秘書となつてゐらつしやい。世間の事は私から其方に見せて上げる、古學や法律を教へようし、又辯

吾家にもして上げるし、堂上の詩人にもして上げる。富貴榮達の途は備はつてゐるのぢや。へん、畫か！ あんな無益な物が何になる！ 畫なんてものは一種の商賣ぢや、士人の携はるべき物ぢやない、とセネカが言つたけな。美術家なんていふ手合ひを顧みてゐるぢや可かんで、奴らはみんな無學で、野鄙な人間なんぢやから——」

「そんな事はありません。私の聞いたところでは、レオナルド先生は大學者ださうです。」

「これは耳新らしい。ぢや伺はうが、あの男は拉典ができる様ぢやらうか、シセロとクインチリアンとを混雜にし、希臘語といへば匂ひさへしないぢやないか。それでも其方は彼れを學者と云ひなされるか？」

「でも、」とボルトラフィオは言ひ張つた。「先生は素晴らしい機械を拵へました。それに自然現象に關する先生の研究は——」

「機械だつて！ ウーフ！ 自然の研究だつて！ 其方は何處までそんな事に囚はれてゐるのぢやらう？ 私

は「拉典語の優美」といふ書物を書いて、語の特質を二千以上摘録した事がある。あれなんぞは眞に新機軸で、實に優美なものぢや。あのため私が何れ程困難をしたか其方には分るまい？ 所で車輪を機械に應用したり、鳥の飛び方や野原の草の發芽を注意して見たりするのを、其方は學問ぢやと言ふのかえ？ そんな事は要するに遊び事ぢや、赤ん坊の碌でもない戯れに過ぎんのぢやて。」

老人は口を閉ぢた。其の顔は嚴めしくなつた。尋いで少年の手を執つて、重々しい口調で言葉を續けた。

「能つく聴くが好い、デオヴァンニ、私の言ふ言葉を其方の心に焼き付けて置きなさい。私らの先生は希臘人と羅馬人ぢや。凡て此の地球上の人間の出来る事は残らずあの人達がして置いたのぢや。私らはたゞ希臘羅馬の

人の後から跟いてさへ行けば宜いのぢや。「弟子は其の主より大ならず」と記されてゐるではないか？」と言つて酒の杯を擧げながら自分の顔の線も皺も一つの大きな微笑の中に溶けるやうに無氣味な笑ひを湛へつゝ、デオヴァンニの目の中を凝と眺め入つてから言葉を續けた。

「おゝ青春！ 青春！ 其方を見てゐると羨望に堪へん。其方は蓄ぢや、春が來れば綻びる雷なのぢや。所が馬鹿な其方は女を遠ざけ酒を賤しとして、隠者、世捨人になりたがつて居るが、それにも拘らず其方の心中には小さな悪魔が住んでゐるぞ。おゝ私の友よ、私は能く其方の心を讀んで知つてゐる。其方の心の奥の奥まで能く見抜いて知つてゐるのぢや！ そして何時か其の悪魔が飛び出す日が來るに相違ない。いや、左様でないと云つてもそれは駄目ぢや。其方は何れ程氣六ツかし屋でも、其方と交る事を嬉しがる奴がゐるぢやらう。これさデオヴァンニ、これ倅や、其方は此の羊皮紙ぢやぞ——外は懺悔の歌ぢやけれど、其の下にはヴィーナスを頌する歌がある！」

「デオルドオ先生、暗くなりましたが、明りを持つて來る方が好いぢやありませんか？」

「何故そんなに急くのぢや？ 斯んな薄暗がりの中で話し合つて、私の過ぎ去つた青春を回顧する方が楽しいて。」彼の舌は縫れて、言葉は判然しなくなつた。「定めし其方は私の顔を見詰めて、此の爺酒に酔つて他愛もない事を言つてゐる、と心の中で思つてゐるぢやらう。それはちやんと私に分つてゐるさ。併し私は其奴を此處の中に納めてゐる」と満足氣に禿けた額を拍つて點頭いて見せた。「自慢ぢやないが、此のメルラ位拉典語の精妙な者が他にゐるか何うか學者に尋ねて御覽！ マルチアルを發見した者は誰ぢやつた？ チブル門に載つてゐる

る有名な誌銘を讀んだ者は誰ぢやつた？ と云ふのは即ち頭がフラク／＼する位高い處に昇つて、石は足の下から崩れ落ちるし、木の枝に掴まる時は眞逆様に墜ちさうな氣がするやうな目に遇つての事ぢや。幾日となく、日がな一日燃えるやうな太陽に照らされて、僅か計りの古文字を讀んで、そして寫し取つたのぢや！ 其處を百姓娘らが通り掛つて、あの上を御覽よ、肥えた鶉が彼處で巢を作る場所を捜してゐますよ、と互に斯んな事を言ひ合ふので、私も媚かしい返答をする。そしてその娘達が彼方へ行つてから私は又仕事に取り掛つたのぢや。或る時などは石が壞れてその上に蘿や茨が生えてゐるが、それを取つて見ると唯つた二語が見付かつたわい、「羅馬人の光榮！」つて。』斯う言つて大分黙してゐるが、此の壯嚴な響きある發聲の反響を聞くやうに、メルラは低い、恐怖を帯びた語調で繰り返した。『グロリア・ロオマノオルム！ 羅馬人の光榮！』

更に彼は危なかく手を振つて、『本統に！ 過去は再び歸らないけれど、こりや記憶すべき事なのぢや』と言ひつゝ、杯を舉げて、嘎れた聲で學生の酒の歌を唄つた。

『唯の一滴だつて僕は見道さない、
唯の一滴だつて、君！
生命のある限り樽を目掛けて行つて、
樽のある所で僕は止まる、君。
僕は酒を愛して酒の歌を唄ふ、
僕は又拉典の三女神を愛する、

僕が酒を飲めば僕の喉は、
ホラチウスよりも上手に唄ふ。
酒に親しみ居る限り、
酒は僕らの腦の回りを廻轉する、
諸君、バックカスに對して聲を揚げよう、
神を榮頌せん！ と。』

彼は咳しさうになつたので、歌を終りまで言ふ事が出来なかつた。此の時は最早や暗くなつて、チオーヴァンニに師の顔は見取れない。戸外の雨は依然止まずに、頻りにザア／＼降つて、騒がしい音を立てながら下の中庭へ流れ落ちる。

『まあお小僧様聞かつしやい』とメルラは吃りながら言つた。「え、と、何を言ふのだつけ？ 私の妻は美人ぢやて——否——然うぢやなかつた。まあ待つてゐらつしやい。然う、思ひ出した。其方は、記せよ汝羅馬人、汝は帝國の人民を恢復せん、といふあの詩の句を知つてゐる筈ぢや。本統に彼等羅馬人は巨人ぢやつた、宇宙の君主ぢやつた！』とかく語つた彼の聲は震へた、チオーヴァンニは師の目の中に涙の宿つてゐるのを見た。『私は繰り返して巨人と呼ぶ。然るに今日は——あ、今日はそんな事を口にしてさへ宜しくない！ がまア私たちの君主、ミランの大公、ルドヴィゴ・イル・モロ様の事を言つて見てもさ。成程私はこの人から祿を頂戴してゐる。この人の傳記を書いてゐる。私はチツス・リヴィウスの亞流で、臆病な野兎であり、又藥のやうな人間でもあるこの人を、

ボンペーやシーザーに比べて居る。併し私の心には、**「ジョーヴァンニ、私の心には——」**と言葉を止めて、世なれた廷臣に能く見るやうに疑念らしく戸の方を眺め遣つてから、相手の少年に寄り添うて囁いた。**『メルラ老人のこの心には自由を愛する念が未だ死んではをらぬ、否決して死にはせんぬちや！ 斯んな事を又と口にしてはならぬが私は其方に言つて聞かせる、今の時世は善くはないぞ、これ程邪悪な事は未だこれ迄なかつた事ぢや。そして人間も然うぢやて！ あんな奴らを見るさへ此の胸が悪くなる。腐れ果てた奴！ 土くれに過ぎんぬぢや！』**所が何うぢやい、奴らは鼻を捻り上げて古代人と同じ者と思つてゐる。何であんなに自惚れが強いのか私は知りたい位ぢや。まあ聞かつしやい、斯んな事がある。希臘にゐる私の知人から手紙が届いたのぢやが、それに依れば未だ近頃の事、キオスの島で尼寺の洗濯女共が朝早く麻の洗ひ物を叩いてゐると、海岸に神様のゐるのを見つけたのぢや。正眞の昔の神様で、魚の尾、鱗、鱗が備はつてゐるトリトンぢやつた。馬鹿な物知らぬ奴とて女共は悪魔ぢやと考へて、恐れて逃げたのぢや。併しトリトンは老衰して何うやら、病氣らしく、沙の上に腹を付けて、緑色の鱗を太陽に干して、其の髪は灰色であるし、目は乳呑兒のそのやうに、どんよりしてゐるの、臆病者共はこれなら大丈夫と勇氣を出したと思ひなさい。そこで周圍に寄つて来て、基督教の祈禱文を無暗と浴せかけて、犬のやうに殴り殺しにしたのぢや。あの古代の神、海洋の神々の中の最後に残つてゐた神様をさ。ボセードンの末孫であるかも知れぬにさ——」

老人は痛ましさに首を動かして、基督教徒の洗濯女に殺された海の怪物の事を思ひやつた時、酒が流さず脆い涙は、雙頬を傳はつて下に落つた。此の時下部が蠟燭を持つて這入つて来て窓の扉を締めたので、異教の幻

は暗と共に去つて消え失せた。そして二人は食事の案内を受けたけれど、メルラは酒に酔ひつづれてしまつたので扶けて寢に就かせる事にした。

ボルトラフィオは仲々眠れなくて、**「ジョルヂオ先生の安らかな聲を聞きながら、心では例の如くレオナルド・ダ・ヴィンチの事を思つてゐた。」**

四

ジョーヴァンニは叔父のオスワルド・イングリムの命を受けて當フロレンスへ来たのである。此の叔父といふのはグレッツに生れた獨逸人で、硝子畫を職とし、ストラスブルヒの有名なヨハン・キルヒハイムに師事してゐた人であつた。ジョーヴァンニは此處タスカニーの首府なるフロレンスでのみ得られる澄んで光りのある繪具を求めに來たのであるが、それはミランの伽藍の仕事をするに就いてイングリムが要るのであつた。此の少年はオスワルドの兄で寶石細工を業としてゐたライノルドの私生兒なので、ボルトラフィオの名は母方から傳はつたのである。そして此の母はロンバルデーの生れであるが、オスワルドに言はせると破廉恥な女で、兄の零落は一々此の女のためであつた。心の扭ぢくれた叔父に養育され、話して聞かされる昔話といへば邪悪な妖怪の事や、鬼、鬼婆、魔法使、狐憑きなどの事であつた。ゆゑ、ジョーヴァンニは物怖ぢのする淋しい質の少年となつた。就中彼が恐れたのは一種の鬼で、北部伊太利の口碑に依れば、それが女の姿に化けるので**『白夜又』**又は**『白眉の叔母さん』**と呼ばれてゐるものであつた。併しジョーヴァンニは極く小さな時分、そら泣くと**「夜 又が来るぞと叔父に嚇**

かされて黙つた頃から、何時か自分は其の白い顔の奴に出會つて、目のあたり其奴の容貌を見てやりたいといふ
競々した好奇心が恐怖の中に混じてゐたのである。

「ジョーヴァンニが大きくなつた時、叔父のイングリムはこれを宗教畫家フラ・ベネデットに託して弟子とならしめ
た。ベネデットは親切な淳朴な質の老人で、畫に取り掛る第一歩として全能の神や、愛の深い聖母や、基督教徒
中最始の畫工であつた聖路加や、其の他天國にまします一切の聖徒に祈願する事を教へ、次に慈愛、恐怖、忍辱、
從順の衣を着ける事を教へ、最後に卵の黄味と、無花果の嫩枝から得た汁に酒を混じたのとて、繪具を調査し、
且つ骨灰——能ふべくば去勢した鶏の翼を焼いて灰にしたので、柵の古木の板を磨いて置くべき事を教へた。
其の教授は無際限な上に微かい點に涉つてゐたので、ジョーヴァンニは直きに、『そんな物を打遣るが好い、何の
益にも立ちやせんのだから』と言つて、麒麟褐といふ色を捨てる時に用ゐた其の輕蔑的な言葉を覚えてしまつた
が、此の言葉は定めしフラ・ベネデットの師匠も、又其の師匠の師匠も口にしてゐたものであらうと想像した。ベ
ネデットが弟子に順次畫の秘訣を教授して行く時は、常に靜かな誇りの含んだ微笑を湛へてゐるのであつた。例へ
ば年若い者の顔を描くには町に飼つてある牝鶏の卵でなくてはならない、田舎のは赤味の勝つた黄味の卵を生む
ので、それは皺の寄つた赤黒い顔を描く場合にしか適しないといふやうな事を教へて呉れた。斯うした微細な事
を心得てゐながら實に質朴な小兒のやうに清淨な畫家で、仕事に取り掛る前は夜も眠らず食物を攝らないので
ある。救世主磔刑の圖を描く時、顔は定まつて滂沱たる涙に濡れてゐた。

ジョーヴァンニは此の師匠を敬愛して畫家中第一の人であらうと目してゐたが、近頃になつてそれが動いて來た。

フラ・ベネデットは、男子の身長は其の顔面の長さの八倍と三分の二に當るといふ自家の解剖上の規則を説明する
際、麒麟褐の事を言つたと同じ生半可な語調で、『併し婦人の身體の方はそれに據つては可けない。婦人には比
例がないものだから』と附加するのが常であつた。此の獨斷、並びに他の例則も凡て魚類の表面は黒味を帯びて
ゐるが内部は鮮明であるとか、神がイーヴを造り給うた理由に依つて、男子の肋骨は婦人のに比して数が少いと
云つたやうな事は、彼に取つて信條とも目すべきものであつた。又例へば比喩的に四大元素を描き表さうとし
て、鼯鼠を土、魚を水、火蛇を火、カメレオンを空氣の意味にしたが、併しカメレオンなる語はカメル（駱駝）
から來たものと考へた結果、此の單純な頭腦の僧は、大きな駱駝が喫驚する程額を開いて、仰山相に呼吸してゐ
る圖で氣體を表したのである。此の他彼の有する概念は凡てこれと同様不精確なもの計りであつた。斯んな譯か
らジョーヴァンニの心に疑惑が潜むやうになつて、フラ・ベネデットが所謂『現世の知識の惡魔』たる反抗的精神が
生じたのであつた。此の少年がフロレンスに來る暫らく前、たま／＼レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた畫を少し
計り見たので、疑惑の念は彼の心に迅速な勢ひで湧き上つて、最早それが鎮壓する事の出來ないやうになつた。

此の夜、タスカニーの首府フロレンスで、ジョーヴァンニはジョルヂオ師の安らかな鼾聲を傍らに聞きながら寢
てゐても、依然此の事を思ひめぐらしてゐた。今夜これを思ふのは恐らく千回目であるかも知れないが、考へれ
ば考へる程益々惑ふ計りなので、彼は天の加護を乞はうと決心した。そして満腔の希望を抱きながら、夜の濃い
闇の中に目を擧げて祈りを捧げた。

「神よ、私を捨てずに助力し下されるやうに願ひます。まことレオナルド師が不信仰の人で其の妙技の底に

誘惑と罪惡が潜んでるまするなら、何卒私の思ひがあの人の上に及ばないやうにして下さい。私の心を彼の畫の記憶から淨め、且つ私を惡から連れさせて下さい。それとも若しや貴い畫があなたの喜びとなり、あなたの御名の光榮となつて、フラ・ベネデットの知らぬ事、又私が切に學びたいと望んでゐる事、例へば解剖、遠近法、明暗の法則のやうな——畫道の一切を知る事が出来まするものなら、おゝ神様、果してそれが出来まするなら、何卒私の意志を強固にして下さい。私の目を明かにし、斯くして疑惑を根絶しうるやうにして下さい。そしてレオナルド師が師の畫室へ私を接見して呉れるやうに、又フラ・ベネデットは私を宥して呉れて、私は決してあなた神様の目に罪ある者と映じてゐない事を知つて貰ふ事を許して下さい。」

熱誠の籠もつた此の祈りが濟んだ時、ディーヴァンニは心の上に鎮靖劑が降つて來たやうに感じ、頭腦が少しづつ混亂して來た。そして自分は硝子畫家たる叔父の家へ歸つて、白熱した鐵を硝子の中へ突き刺す時に發するシューといふ音を聞いてゐるやうな氣がした。幾つかの色硝子の櫃になつてゐる紐形の鉛の扭られたのが見えるし、又硝子を固著せしめるため、鉛の端の方にもつと刻み目を入れろと命令してゐるオスワルドの聲も聞えたが、其の中にあらゆる物は消え去つて、寢返りを打ちながら彼は眠つてしまつた。

それから一つの夢を見たが、後々に至る迄それは折々思ひ出されるのであつた。今自分のゐる處は廣い眞暗な大伽藍の中で、前には様々な色を見せたゴチック式の窓がある。其の窓の畫は救世主が『我が父は農夫なり』と説かれた言葉に因みある彼の不思議な葡萄の刈入れの光景であつた。磔に掛かり給うた裸形の體は酒を搾る器械に挟まれて、傷口から血が流れてゐる。そして其の血を桶や樽に受けてゐるのは法王、大僧正、皇帝なぞで、諸

諸の使徒は葡萄の實を投げ込んでゐるし、彼得は其の葡萄を踏み躪つてゐる。後ろの方では豫言者や長老達が葡萄畑の土を掘つたり葡萄の枝を剪んだりしてゐる。それから、獅子、牡牛、鷲が一臺の荷車を挽いて通り過ぎたが、其の馱者は聖馬太であつた。

此の種の意味を寓した畫を自分は叔父の仕事場で見た事はあるが、併し斯んな各種の色——黯黒んではゐるが寶石の燦たる光ある斯んな色は何處でも見た事はない。就中自分が驚いたのは主の血の眞紅な事である。と、伽藍の奥の方から微かに反響して聞えるものがある、それは自分が愛誦してゐる次ぎの歌らしい——

あゝ童貞の花、
匂高き百合の花、
いつくしみは深く、
朱の色は六個に。

併し歌は止んで窓の眞赤な光りは最早やなくなつた。そしてアントニオ・ダ・ヴィンチの荒々しい聲が耳邊に高く響いた。

『おい逃げろ！ 逃げないと生命がないんだぞ！ そらあの女が來るよ！』
あの女とは何の女の事か訊く必要はない。何故なら白 夜 又が後ろに來てゐる事は自分に分つてゐるからである。氷のやうに冷めたい一陣の風が吹き起つて、人間の手とは見えないほど重い手が自分の喉を締めて窒息させようとする。もう今にも死にさうなので聲を揚げた途端に目が覺めた——見れば Cholch 才師が自分の側に

立つて、蒲團を取除けようとしてゐる。

「さ、牀から出ないと置いてきほりを喰はされるぞ。さ、起きるのぢや！ 時間が、もう過ぎてゐるのぢやか」と考古學者は喚き立てた。

「え、何です！ 何處へ？」と半分は眠りながらジョーヴァンニは吶つて言った。

『何處へだつて？ 忘れる法があるものか。サン・チェルヴァソの山莊へさ、水車場の山へ掘りに行くのぢや。』

『私は行きません。』

「行かない？ 何のために私は其方を起したと思ふ？ 何故私は二人で樂に行けるやうに、黒驢馬に鞍を置かせたと思ふ？ さ、そんな強情はな廢めにするのぢや。さ、さ、起きた、では、ジョーヴァンニの坊ちゃん、其方の耳の端で言ふ事がある、レオナルドも行くが何うぢや。』

と聞くなりジョーヴァンニは跳ね起きて、二の句を繼がせず著物を引つ掛けた。

そして二人は直ぐに中庭へ降りて行くと一行は其處で出立の支度をしてゐた。グリルロは彼方此方を駆け廻つて助言したり指圖したりしてゐた。到頭一同は發足した。チブリアノの今一組の友人連、其の中にはレオナルド・ダ・ヴィンチもゐるのであつたが、それは別の途を取つてサン・チェルヴァソへ行くので、此の一行とは後刻出會ふ事になつてゐた。

五

雨は止んで、北の風が雲を吹き拂つてしまつた。月のない空に星のきら／＼してゐる様は、宛ら小さいランプが風に煽られてゐるかのやう、樹脂の燃える松明も風にゆらく／＼揺らめいて、火の粉がぱつと飛んで行く。騎馬の一隊は道をリカソリ街道に取つて、サン・マルコの御寺を過ぎて、鋸の目に似たサン・ガルロ門に差し掛かつた時、其處の番兵共は口喧しく罵つて罷り通す事は成らぬと力味立つたが、餘り眠たさに眼前の事が能くも分りはせず、それに過分の袖の下を掴まれたので直ぐに門を出してやつた。門を出ると道はムニョーネ河の狭い深谿に沿つてゐる。一行は幾つか寒村を通つたが、其處の往來は、フロレンスのよりは狹隘で、粗雑な石造の家は城塞のやうに高かつた。それを通り抜けるとサン・ヂェルヴァソの農民の所有に係る橄欖の林に出た。そして二道の會合してゐる處で馬を下りて、チブリアノの葡萄島の直ぐ側にある水車場の山へと歩んだ。百姓衆は鋤や鋤を手にして一行を此の山で待つてゐた。山の後ろで、水ヶ窪の名で通つてゐる沼の向ふ方の、闇に暗い樹の間から朧ろに白い物の見えるのは、山莊の壁であつた。それから亭々として黒く聳えてゐる絲杉が山嶺に見えるし、下のムニョーネ河の岸に山の名の由來ある水車があつた。

グリルロは發掘の箇所を考へて、其の場所を示したが、メルラは別の處を持ち出すし、園丁のストロッコは、總じて悪鬼は水の邊りに潜んでゐるのが常であるから、今一層下へ降りて水ヶ窪の附近を掘らなくてはならんと主張した。併しチブリアノはグリルロが言つた箇所を掘るやうに命じたので、鋤はさく／＼音を立て、掘り立ての土の匂ひが直ぐに鼻を打つた。一羽の蝙蝠が無気味な翅でジョーヴァンニの顔を掠めて行つたので彼は喫驚したが、メルラは其の肩を叩いて斯んな事を言つた。「お出家様、何も恐がるに及ばないで、悪鬼なんか此處には一

匹もゐないのぢやからな。あのグリルロは頓馬さ。仕合はせと此處の發掘は何時も私の見聞してゐるものと違ふのぢや。時は第四十五回のオリンピックアッドの年（メルラは基督教曆を嫌つてゐた）、法王はインノセント八世の頃であるが、ロンバルチから羅馬府へ来た土掘りがケーチリア・メテルラの墓に接したアッピア街道を掘つてゐると古代の石棺が出て来た。「クラウヂウスの女ユリア」といふ字が現れてゐて、其の中の死骸は芳紀十五の美しい少女で、體は一面に蠟で包まれてゐながら、其の顔は宛ら眠つてゐる人のやうであつた。然うぢや、現に呼吸をしてゐると言うても宜かつたのぢや、頬の赤味が去らずにあつて、未だ生命が通つてゐるやうぢやつたからな。で、大勢の者が墓へ群つて来て、何うしても立去らうとしないのぢや、何故かならユリアの美しい姿を見たいからぢや、親しく見なかつた者は兎ても信じない縹致ぢやつたわい。ところが法王は自分の宗徒の者共が異教徒の死骸を拜してゐるのを憤つて、死骸を密にピンチアの岡に埋めさせたのぢや。何うぢや、私の言つた事は分つたらうな？ そんなのが幾分か發掘らしい發掘ぢや！」

と言つて彼は土掘りが自分の足へ投つた土塊を忌々し氣に蹴飛ばした。不意に一挺の鋤がカチリと音を出したので、立つて見てゐる人は一齊にはつとした。

「骨だ！ 此處は昔の墓地の跡ですから」と園丁のストロッコが言つた。

丁度此の時サン・ヂェルヴァソの方から犬の遠吠が聞えた。ヂョーヴァンニは心の中で、「斯んなにして墓を發くなんて、不祥な事にならなければ好いが」と思つた。

「何だい馬の骨か！」とストロッコはさも蔑んだ調子で言つて、朽ちた長形の頭骨を土中から出した。

「グリルロ」とチブリアノは心配さうに言つた。「もつと他の場所を試る方が好くはないかな？」

「だから私は言はぬこつちやない」とメルラは大聲で言つて、二人の土掘りを拉して山の裾の方で新に發掘を始めた。ストロッコも同時に一手を率ゐて水ケ窪を掘つた。

と、程なくヂョルヂオの興奮した聲が聞えた。

「やい阿呆共此方へ来い！ 何處を掘つて好いか知らぬ私ぢやないわい。」

一同はヂョルヂオの方に馳せ寄つたが、此の度も又寶と思つたのが無になつてしまつた。大家の手に成つた大理石の殘缺と思つた物は其の實普通の石に過ぎなかつた。

誰一人グリルロの側にゐるものはないなつたので、彼は陽に屈辱を感じながら、それでも唯一人壞れ掛けた角燈の光りを便りにして掘つてゐた。

風が止んで空氣は幾分の暖氣を帯びて来た。水ケ窪から霧の立ち昇るのが見える。櫻草や董の匂ひは淀んでゐる水の濕りに纏れて来た。曉の氣空に迫つて、夜明けを報する二番鶏が鳴いた。

突然グリルロは穴の底に落ちて悲鳴を揚げた。

「助けて！ 助けて！ 落つこつた！ 地面が崩れた！」

彼の持つてゐた角燈が消えたので暫らくは何も見えずに唯跪いて、呻つて、はあく言つてゐる聲が聞えるばかり。やがて明りが来たので能く見ると、グリルロの身體の重みで地下の窖の屋根が抜けた事が分つた。で、二人の若い男が穴の中へ這入つた。

「おい、グリルロ！ お前何處にゐる？ さ、手をよこせ！ それとも、生き埋になつて居るのか、馬鹿な奴だなア。」

と言はれても、グリルロは聲が出ないものゝやうに、挫いた手を事ともせず、引摺るやうに歩みながら、甚だ奇妙な風に足掻いたり蕩揺いたりして、最後に魂消たやうな聲を出した。

「神體ぢや！ 神體ぢや！ 早く、チブリアノ様！ 見事な神體ぢやで！」

「間抜け奴！ 今度も馬の頭に定まつてらあ」とストロッコは罵つた。

「んにや決して！ 手が一本ないだけぢや。其の他の處は皆んなちやんとしてゐるぞ——足も、首も、肩も！」と狂氣のやうになつてグリルロは喚いた。

そこで數名の男は用心して煉瓦の崩れを押し分けて穴に降りて行つた。チーヴァンは地面の上に俯して容の中を覗いたが、墓に特有な冷氣と長い間蔵はれてあつた濕氣の微びたやうな臭氣が上つて來た。

チブリアノが穴の中の人々を側に避けさせたので、チーヴァンは底の方を見ると、古代の赤煉瓦で築いてある壁と壁との間の深い處に、裸體の白い姿が棺臺の上に置かれてある死骸のやうになつて横になつてゐる、併し松明の揺れる光りに當つてゐるので、それが薔薇色に染まつて生命の温みが通つてゐるやうであつた。

「これあヴィーナスぢやぞ！」とチオルデオが叫んだ、「正にブラクシテレスの刻んだヴィーナスに相違ない！」

チブリアノ殿、お祝ひを申し上げませう！ ミランやデノアの國々を得るよりも、これがお手に這入つた方があなたに取つて仕合せぢやわい！」

人々はグリルロを穴から引き上げた。彼の顔に血が膠り着いて、片手は腫れ上つて利かぬやうになつたが、其の老いた雙眼には勝利者の誇りが閃いてゐる。

と、チオルデオは、「おいグリルロ！ 其方は私の友人ぢや！ 愛人ぢや！ 恩人ぢや！ 私が其方を輕しめて頓馬ぢやと言つたが、何の其方は——其方は人間の中で、一等惻愍な者ぢや！」と言ひながら、グリルロの腕に抱かれて深い情を以て接吻した。

そして「昔、フィリップ・ブルネルスキも自宅の斯んな窖の中でヘルメスを見つけたのぢや」と老人は依然饒舌を續けた。「全くのところ異教徒の者共が彫像の眞價を知つてゐて、基督教徒の憤怒に觸れさせてはならぬと隠して置いたのぢや、何故と云ふに奴らは昔の信仰を剿絶しようとしてゐたからぢや。」

グリルロは満足氣に微笑を含んで老學者の言ふ事を傾聴してゐて、羊飼ひの笛の音も、羊の鳴き聲も彼の心を引きはしなかつた。丁度白々と明けて水氣を帯びた光りの照り初めた空も見ねば、フロレンスの鐘樓が互に朝の挨拶を交してゐるのも知らなかつた。

「靜かに！ 靜かに！ 其の右の方へ寄つたり！ 然う、然うするのぢや！ そして壁から離して！ さ、さ、少しも傷けずに持ち出すと一人宛に銀貨五枚やるぞ！」チブリアノは左様叫んで居た。

此の時星は悉く消え去つて、白晝尙ほダイヤモンドのやうに輝く金星が唯つた一つ残つてゐるのみであつた。女神（ヴィーナス）は不斷の笑みを見せながら徐々に又徐々に上つて來た——昔、泡沫の玉と飛び散る海原から上つたやうに、今や時節到來して暗い土中の千年を経たる墳墓から上つて來た。

「爾に榮光あれ、黄金の四肢を有ち給ふアフロヂテの神よ。」

爾は神と人との喜びなり……」

メルラは此の句を朗唱した。

併しヴィナスの顔が、朝日の白い光線に照らされて蒼白くなつたのが、ディーヴァンニに見えたので、少年の顔色も恐怖のため眞青になつて、思はず「白夜 又！」と呟いた。

彼は起つて逃げようと思つたが、併し驚異の情が恐怖の感を壓倒してしまつた。自分は永劫の熱火を以て罰せらるべき大罪を犯してゐるのだと承知しながら、然かも貞潔な裸體と奕々たる美の輝いてゐる顔面とを凝視しない譯には行かなかつた。嘗てアフロヂテが世界の女王であつた時代に於てさへ、何人と雖も此のディーヴァンニ位敬虔の籠もつた戦慄を以てそれを禮拜した者はなかつた。

六

サン・ヂェルヴァソの小寺に鳴る鐘の音が不意に一行の耳を破つたので、一同は思はずその方に向けて仕事の手を止めた。それは朝の静けさに響く音の事として、ブリくして威嚇するやうに聞えたからである。

「神様、私らの心に恵みを垂れて下さりませ！」と小聲で言つたのはグリルロで、絶望した容子で頭を抱へながら、「それドン・ファウスチノ様が來ました。大勢の者も連れ立つてをります！ 私らが目に這入つたのぢや！ あれ御覽なされ、あんなに手を鳴らして叫んで居ります。あれ御覽なされ、此處へ押寄せて來ますぞ！ ア、

私はもう助からない！」

丁度此の時チブリアノの友人の一行が此處へ到着した。彼等は發掘の模様を見る目的であつたのに道を失つたのであつた。ポルトラフィオは彼等を一瞥した瞬間、新に發見された女神に依然心を奪はれながら、彼等の一人に注意した。其の人は早やヴィナスを眺めてゐるが、冷々として泰然自若たるその態度は自分の心の動搖と甚だ異つてゐるので、少年は驚嘆の感に打たれざるを得なかつたのである。少年の目は依然彫像を見てゐるが、心は全然自分の傍にゐる人の方へ行つてゐた。

チブリアノは暫らく思案してから言つた。「別荘迄は二足と掛らないし、扉は丈夫ぢやから包圍されたつて安全ぢやないか。」

「左様、其の通りでございます。さ、兄弟、神像を救うて上げよう」と叫んだグリルロは、自分が骨を折つて掘り出した像に一心になつてゐるので、自ら指圖をして、易々と水ケ窪を渡つて運ぶ事の出来る工夫を考へた。そして女神の像を家に運んで入口の闕を越すか越さぬに、山嶺にドン・ファウスチノの姿が現れ、满面火のやうに赫となつて兩手を打振つて嚇かしてゐた。

山莊の下の間には此の時人はゐなかつた。そして大廣間は物置きのやうになつて、農具や阿列布油の大甕が澤山入れてあり、一隅には黄金色の葉が山のやうに積んであつて、アフロヂテは靜かに此の上に寝かされた。何の事はない葉は女神に取つて粗末な鄙の寢牀となつたのである。併し此の事を果して、扉に門を差すより早く、打つやら高聲に罵り騒ぐやらして扉に押寄せて來たものがあつた。

『開ける！開ける！』と濁聲を揚げたのはドン・ファウスチノであつた。『現に此の世に在ます誠の神の御名によつて私は開けさせるぞ！』

チプリアノは屋内にある石の階段を昇つて、廣間の上の格子窓から群集を覗いた。そして押寄せて来た者の少數である事が分つたので、例の微笑を面に見せながら談判を始めに掛つたが、僧は指で耳を塞いで、地中から掘り出した偶像（彼は女神を左様呼んだのである）を渡せと罵り騒いだ。

そこでカリマラの長は策略を用ゐた。

『御用心召され』と落着き拂つて彼は言つた。『町の衛戍長を呼び寄せて置いたから、もう二時間経てば馬に乗つた兵士共は貴殿の相手となるでござらう。何人たりとも暴力を用ゐて我が家へ這入る事は許しませぬ。』

『此の扉を叩き壊せ。神様が私りに附いてゐらつしやるのぢやぞ。何も恐がる事はない！ それ攻めろ！』と僧は喚き叫ぶと共に、側にある溫和しさうな老農の手斧を奪ひ取つて、満身の力を籠めて大扉に打ち込んだ。

『ドン・ファウスチノ様！ これさファウスチノ様！』と老農は怒り狂ふ僧をおづく制しながら、『私らは貧乏人でござるぞ。野良を掘つて金銭が出るではなし、斯んな事をしてゐましては皆んなの破滅の基、引つ搦めて牢へ打ち込まれる事でござりませう！』

恐ろしい町の衛戍兵の名を耳にしたので狼藉者共は恐怖に打たれたのか、多數の者は既に後ろを見せてゐた。

『これが寺の地内であつた事柄なら、又兎角うの事もあるけれど』と二三の者は呟く。

『掟の定めた境界では——』

『へッ掟？ それやお前さん蜘蛛の網ぢや、蠅を捕るためにこそ張つた物、それで熊蜂は捕れませぬ。掟なんて大頭の方々のためにあるものぢやござんせぬわい。』

『誠お主の言はつしやる通りぢや。誰にしたところで、自分所有の地所は自分が主人なのぢやからの。』

此の間も始終デューヴァンニは地から引き上げられたヴィーナスを眺めてゐた。横の窓から流れ入る日光は、冷めたい容の暗黒の中に久しく幽閉されてゐた優婉な軀に、再び温氣と優しみを與へてゐるやうに見えた。像の周囲の金色の薬は宛然後光のやうに輝いてゐる。

デューヴァンニは再び彼の未識の人を注意した。彼は像の前で膝を着いて、コンバスと定規と銅製の半圓弧とを使つて、それを測つてゐるのであつた。依然として動じない平靜な顔で、其の青色した冷めたい眼は依然深い興味を帯びてゐる。

『何をしてゐるのだらう？ 何ういふ人だらう？』とデューヴァンニは心の中で尋ねながら、指を大膽に迅く使つて、女神の四肢や、其の美の存する深奥な處や、又餘りに繊細なため肉眼では認め難い此の大理石のありとあらゆる精巧な點を調査してゐるのを見た時、彼は殆ど恐怖の感に打たれる程であつた。

山莊の表扉で次第に散り行く群集を罵つてゐる僧の聲がまだ聞えて居る。

『残つてゐる、此の畜生共！ 基督様を賣つた謀叛人共！ 町の兵隊が恐さに宗門に弓を彎く奴を打遣つて置くとは何事ぢや！ 名打ての説教者カントベリーのアンセルム様が言はつしやつた通り、まことに Ipse vero Anti-

christus opes malorum effodiet et exponet (此句の意は次の基督教に反對する云々の語である)ぢやわい。分るが

い effodiet (掘り出す) が分るかい? 基督教に反対する奴が昔の偶像を地中から掘り出して、最一度此の世へ持ち出さうとするのぢやぞ。』

併し僧の言葉に注意を拂ふ者は一人もなかつた。

『實に厄介な人ぢや、此のドン・ファウスチノ様と云つたら!』と首を振りながら注意の細かい水車場の持主が言つた。『生命が風前の燈ぢやのに此の荒れ廻りやうは何うぢや。俺あ兎に角寶の見付かつたのが嬉しいわい。』

『何でも銀の彫像ぢやさうな。』

『銀? 否然うぢやない、俺ら此の目で見たのぢや。大理石で出来て、素裸の怪しからぬ物ぢやて。』

『お、神様、御免して下さいませ! 俺達の手をそんな俄羅俱多で汚して堪るもんか。』

『お主は何ちらへ、ツラケルロ?』

『野良へさ、行つて仕事をすのぢや。』

『お主と共に神様も行かつしやれ! ぢや俺も葡萄酒へ行くべい。』

此の始末に僧の憤怒は此の度は檀家の者に注がれた。

『實に不信心な犬畜生ぢや! カインから生まれた出来損ひ奴! 貴様ら此の住持を捨て、行く積りか? ち

え、サタンの小僧子共、晝夜共に私が貴様達の冥利を祈つて、此の胸を打ち叩いて泣いてやつたり断食してやつたりするのに、それがなげりや何時の昔に此の罪業深い村中がすつほり大地の中へ埋もれてゐる事を貴様らは知らんかい? え、最う駄目ぢや! どれ、足の埃を拂いて私は貴様の勝手にさせるとしよう。此の村に碌な事は

ないぞ! 穀類にも、水にも、羊にも碌な事はないぞ。それから貴様らの倅や倅の倅にも、ちえッ此の私は貴様らの父ぢやのに。羊の貴様らを保護する飼ひ主は最うなくなつたのぢやぞ。貴様らを捨て、しまふぞ! 破門ぢやわい!』

七

金色の寢臺に女神の寝てゐる山莊では再び舊の静けさに復つたので、ヂョルヂオ・メルラは彼の外來人の方へ歩み寄つた。彼は未だ寸法を取つて居る。

『神像の比例を研究してゐらしやるな? 斯う長上振つてメルラは言つた。』あなたは美を貶して數學にする御料簡と見える?』

相手は一寸目を舉げて見た切り、斯んな質問が聞えないものゝやうに、沈黙の儘で相變らず手を働かしてゐた。コンパスは開いたり窄んだりして、幾何學上のいろくゝな形を示してゐた。彼の人は靜かに併し睨と角度尺をアフロヂテの美しい唇(あゝ其の唇の湛へてゐる微笑はデューヴァンニの心を恐怖せしめたのであつた)に當て、其の結果を知つてから、それを手帳に書き入れた。

『斯んなに問ひたがる好奇心を宥して下されい』とメルラは尙も尋ね掛けた。『それには區分けが幾つありますか?』

不承々々一方の人は口を開いた。『此の尺は粗雑に出来てゐるのです。毎時も私は人體の顔面を度、分、秒、三

分一と斯う分けて量ります。そして分は度の十二分の一、秒は分の十二分の一、と云つたやうに下の區分は夫々上の區分の十二分の一に當るので。』

『左様で？ では其の最後の三分一といふのは、細い事此の上もない髪の毛よりか未だ幅が狭いと思ひますがな。』

相手の人は矢張り不承々々答へた。『三分一は顔面全體の四萬八千八百二十三分の一に當ります。』

メルラは信じ兼ねるやうな微笑を見せて眉を釣り上げた。『成程、生命あれば學問が出来るものぢや。そんな精密な事が分らうとは遂今迄思ひませんでしたわい。』

『もつと精密に行ければ尙ほ好いのですが。』

『實際それは然うでせう。然うでせうが、あなたも御存じの通り美術でも美でも總じて數學の計算といへば……熱奮して、烈々たる神來の興に乗じて白熱した、神の呼吸を受けた美術家は……』

『左様、左様』と明かに倦怠の色を見せながら、彼の人は肯いて『その通りですか、私は切に知りたいのですから……』

左様云つて屈んで、髪の毛の生え際から脛に至る間を量つた。

『知りたいつて？』とジョーヴァンニは心に思つた。『そんな事柄が知り得られるものか？ 馬鹿な！ 彼の人には感じがないのか知ら？ 了解力がないのか知ら？』

飽く迄相手に探りを入れて見ようと思つてメルラは古代人の事、並びに彼等を模範とせざるべからざる所以を

説き立てた。彼の人はメルラが言ひ終る迄待つてゐてから、莞爾として金色の長髯を微動させながら言つた。

『泉から飲み得られる人なら、茶碗からは飲まないでせうな。』

『お待ち下されい！』と學者は叫んだ。『古代の人を茶碗と仰有るのなら、泉は何でござらうな？』

『自然です』と相手は靜かに答へた。

そして怒氣を含んで無遠慮に喋り續けるメルラに對して最早反駁を試みようともせず、巧に外しながら鄭重に首肯してゐるが、其の冷めたい眼に倦怠と抑制の色が益々明に現れて來た。其のうちジョルヂオの議論は到頭終結して口を噤むに至つた。そこで相手の人は大理石にある幾つかの凹みを指したが、それは如何な光の中でも肉眼に認められるものではなく、單り滑かな表面に手を置いて動かす時にのみ明かに感觸できるものであつた。そして『實に美妙な』と呼んで石像の上に目を走らせた。宛ら一目で以て其の總計を知らうとするかのやうに。『感じのない人だと私は思つたが！』とジョーヴァンニは腹の中で考へた。『併し感じがあるにしたところで神像を量つて細かく數に分ける事が出来るものかしら？』そしてメルラの耳に口を寄せて、『先生、あれは誰です？』

あの人の名を聞かして下さいませんか？』

『ほう、若道心か！ 其方ぢやつたか？』とメルラはクルリと振り向いた。『其方のゐる事を失念してゐた。誰

でもない、あれが其方の偶像ぢやものを、それが分らんといふ法があるものか？ あれがレオナルド・ダ・ヴィンチ

『おや』

と語つて史家はジョーヴァンニをレオナルドに紹介した。

八

初春の朝まだき、草は、橄欖樹の黒い根の間に緑玉のやうに光り、藍色した花菖蒲はその細い莖にそよとも動かぬ、静けさの充ち満ちた中を、ディーヴァンニは徒歩、レオナルドは馬に乗つて、共にフロレンスへの歸途に就いた。

『これが實際其の人か知ら？』とディーヴァンニは獨りで考へながら、まじく見守つて、其の細かい舉動にさへ興味の發するのを覺えたのである。

年齢は四十以上、黙して考へに耽つてゐる時、其の鋭い、青い、小さな目は、金色に垂れてゐる眉毛の下で冷として人を射るやうに見えるが、話をしてゐる時はそれが非常に善良な性質たる事を示すのである。それから長い美髯と縮れて總々とした頭髮は威容を具へしめ、身體は高くして強さうであるが、併し其の顔には女にして欲しい美妙な魅力があり、細く、調子の高い其の聲は、耳に快く響きながらも男性のものではなかつた。現に荒馬の手綱を握つてゐる手は頗る力強くあつたが、これも又優しく、すらりとした指は女其の儘であつた。

段々フロレンスの城壁に近づいて來た。霧を含んだ朝日は伽藍の丸屋根と舊御殿の怪塔の上を照してゐた。

『今が好い機だ。』ボルトラフィオは斯う考へた。『先生の弟子になつて畫室へ這入りたい事を話さなくちや。』

と、其の時レオナルドは馬を停めて鷹の子を吃と見た。鷹は緩かにそして無造作に空に圓を描いて、ムニョーネの河岸の葦間にゐる鴨でなければ驚の獲物を睨み下ろしてゐるのであつた。程もあらせず鳥は一聲叫んで、頭を

下に勢よく石のやうに落ちた。そして上から飛び掛つて、やがて林の後ろに没してしまつた。此の間始終レオナルドの目は鳥を追つて、其の廻轉、其の動き方、強い雙翼の羽搏きを一つとして見逃さなかつた。そして手帳を帯の間から取り出して觀察した結果を記入した。

ボルトラフィオは見ると、其の鉛筆を運んでゐる手は左の方なので、兼て聞き及んでゐる奇妙な話の事を思ひ起した。それは彼が不思議にも左ぎつちよで書くため、其の字は丁度東洋の人のやうに右から左へ行つて、鏡に寫して初めて讀めるといふのであつた。あれも詰りは自然に關し神に關する自分の異端の邪説を誤魔化すためなのだ——中には斯んな事を言ふ者もあつた。

『今を外しては又とないぞ！』とディーヴァンニは獨語したが、併し其の後から直ぐアントニオの『君の魂を亡くしたければ彼處へ行くが好い、彼奴は無神論者で罪人なのだから』と言つたあの棘々しい言葉が心に閃いた。莞爾としてレオナルドは一本の巴旦杏に注意を寄せた。風當りの強い小さな禿山の頂に其の木があつて、非常に小さな、非常に軟弱な、全く獨りほつちの木ながら、希望に満ち喜びに溢れて、白い花を着けて、太陽の輝いてゐる紺青の天空に對してきら／＼光つてゐる。

ボルトラフィオは其の木を感じて眺める事が出来なかつた。彼の心は重苦しくなつて混亂して來たのである。其の不安を推察してか、レオナルドは靜かに次ぎの事を言つたが、後々まで長くこれが少年の記憶に残つてゐた。

『美術家になりたいのなら、美術に關する以外の心配や懸念を心から皆んな棄てなくては可けない。心を凡て

の事物、凡ての色、凡ての運動の映る鏡にしなさい。併し心其のものは毎時も曇りのないやうに動搖のないやうになつてゐなくては可けない。』

二人はフロレンスの城門を潜つて町へ這入つた。

九

ポルトラファイオは此の朝フラ・チロラモ・サヴォナロオラの説教があるといふ御堂へ出掛けた。中へ這入つた時丁度オルガンの最後の音がサンタ・マリア・デル・フィオレのアーチからアーチに反響しながら消え去つた所であつた。堂内に人が満ちてゐるため、息の根が止まるやうな人熱れがして、絶えず些やかな身動きから發する低いバサバサした音がする。男女、子供の席には夫々カーテンを張つて劃つてあつた。鏡のやうに細く狭い其のアーチの下には薄暗い神秘的な気が、眠れる森のやうに深く漂うてゐた。花やかな色硝子に屈折された太陽の光線は、虹の色を成して、會衆と灰色の大理石の柱との上に落ちた。神壇の周圍の、半ば暗黒なるを明るく染めてゐるのは、蠟燭のちら／＼燃え立つ光りであつた。祈禱は濟んで、説教者を待つ群集の顔は悉く木製の説教壇の方に向いてゐた。

デヨーヴァンニは群集の間に一席を見付けて、隣人等の囁いてゐるのに聞き耳を立てた。

『お坊様は直ぐに這入らつしやるぢやらうかの？』と性急に訊いたのは背の低い、蒼い顔に汗を掻いて、疎らな髪を紐で結んでゐる大工であつた。

『さ、何うだかなア』斯う答へたのは鍛冶屋で、大きな緒ら顔の、喘息持ちであつた。『サン・マルコのお坊様は僂で吃りなざる弟御のマルフィと云ふ方と一つにゐらつしやるので、其の弟御がお兄様の此處に這入らつしやる時間をお定めなるとの事ぢや。何時かなぞは四時間も待つて、今朝はもうお説教がないのぢやと思つてゐたら、それでも到頭お出でになつたのぢやからな。』

『お、ところが、いやはや此の私は昨晚真夜中から待つてゐるのぢや！ 眠いのと、それに麵麩の片なりと口の中へ入れたいのとで、もう／＼堪らなくなつたわい。宛で刃物の上に坐つてゐるやうなものぢや！』

『そこぢやダミアノ、忍耐が肝腎ぢやとお主に言つて聞かしたぢやないか？ それほど早く來てもかう説教壇はあんなに遠くて何も聞えんぢや。』

『んにや、能つく聞えるとも！ お坊様があの大聲を出しなかつて雷のやうに喚かつしやる時には、聲は無論のこと、死人の耳にさへそれが吃度聞えるに相違ないのぢや。』

『今も皆んなで言つてゐるが、お坊様は未來の預言をなさるさうぢや。』

『否未だぢやらう！ ノアの箱船を拵へなさらぬ内にそんな事はあるまいて。』

『箱船は出來上つたのぢや、もう全然成就したのぢや。然うだ、お主、お坊様は喩へを用ゐて其の説明をなされたぞ。其の長さは信仰、幅は慈愛、高さは希望ぢやとよ。そして斯う仰有つたわい——急いで、戸の明いてゐる間に急いで救ひの箱船に乗りなされ、やがて戸の締まる日が來る程に、何故丁度良い時、後悔して船中へ這入らなかつたらうて、其の時になれば大勢の者が泣かう、と斯う仰有つたのぢや。で、今日は創世記六章十七節の

大洪水に就いての御説教だによ。」

「何でもお坊様は、飢饉、戦争、疫癘が来る示現を得さつしやつたさうぢや。」

「ヴァルロンプロザの伯樂の話では、一兩日前の晩、此の市の天空で多勢の軍が戦ひ合つて、劍の渡り合ふ音、甲冑の鳴る音がありくと聞えたけな。」

「そしてお主、これも確とした事ぢやがなう——キエザ・デイ・セルヴィの節度使館に血が一雫落ちてゐるとやら。」

「成程！ それからルバコンテ橋のマドンナの御目から夜なく涙が出るさうぢや。私の叔母のルチアが現に見たさうな！」

「受け合ふが、其のマドンナ様の事は吉兆ぢやないぞ。お、神様、此の憐れな罪人にお慈悲を垂れて下さりませ！」

一方、婦人側の方にも騒ぎがあつた。老婆が一人卒倒して、身體を起してやつても未だ正氣には復らなかつた。誰も彼も久しく待つてゐるので最早や待ち疲れた。顔の蒼い大工は此の上我慢がしきれなくなつた様子。

併し突如として頭が一齊に海の波のやうに動いて、堂内に囁きの聲が傳はつた。

「お出でになつたぞ！」

「然うぢやない、お坊様ではない、彼はフラド・ドメニコ・ダ・ベシア様ぢやわい。」

「いや確にお坊様ぢや！ お坊様がお出でになつたのぢや。」

チーヴァンニは見ると、それは黒衣と白衣とのドミニカン派の法衣を纏うて、腰に紐を締めてゐる人で、徐々に説教壇の階段を上つて頭巾を脱いだ。顔色憔悴して蠟の如く黄ばみ、厚い唇に、驚の嘴のやうに彎曲した鼻、そして前額は低く凹んでゐる。左手を元氣なく机の上に載せ、十字架を持つた右手を空に舉げて、沈黙の儘爛々たる目を聴衆の上に向けた。彼等は今かくと待ちながら戦慄してゐるのである。深い沈黙の氣が漲つて、各自の心臓の鼓動が聞える程であつた。次第に僧の目の輝きが強まつて、遂に眞赤な炭火のやうになつたが、依然口を閉ぢた儘なので、待ちに待つて張り詰めた心は此の上堪へられなくなつた。今一瞬で群衆は騒ぎ立つかと思はれた。

併し静けさは一層深く、一層恐ろしくなつて行つた。其のうち突然沈黙を破つて、僧の恐ろしい搔裂くやうな超人間的の叫びが聞えた。

「Ecce ego adduco aquas suger terram, 見よ、私は地上に洪水を齎したぞ！」

群衆は颯と戦慄に打たれて、髪の毛が逆立つた。チーヴァンニは蒼くなつて、大地が揺れて御堂のアーチが今や落ちるかと思つた。彼の側にある頑丈な鍛冶屋さへ木の葉のやうにブルブル震うて、齒をガチ／＼鳴らしてゐる。弱い大工は毆打されたやうに首を縮め、顔に皺を寄せて、眼瞼を塞いでゐた。

尋いで起つたものは説教ではなく人事不省であつた。数千の聴衆は宛ら此の人事不省に襲はれたやうになつて、暴風に對する枯葉のやうに吹き捲かれてしまつた。チーヴァンニは耳を澄まして聞いてはゐるが、殆ど了解は出来なかつた。斷々の句が耳に達した。

「これ皆んな御覽なさい、天は既に暗くなつて、日輪は血の凝つたやうな紫色をしてゐる。逃げなさい！ 隠れなさい！ 今といふ今硫黄の雨、火の雨が降つてゐるのぢや、火に熱した石、雷霆が霰のやうに降つてゐるのぢや！

バビロンの娘と共に棲めるシオンの子よ脱れよ。

お、伊太利、折檻に次いで折檻が来るぞよ。疫癘の後には戦争、戦争の後が飢饉ぢや！ 此處にも審判！ 彼處にも審判、到る處悉く審判ぢや。お前さん方の中で生命ある人は、澤山の死人を運ぶに足らんぢや。お前さん達の家々に死人が多い故、墓掘者は、死骸を戶外へ投りなさいと呼んで、それを悉く荷車に着けて、いや、馬の頸へも着けて、積み重ねて茶毘に附するのぢや。それから又往來を歩いて、死人がないか？ 死人がないか？ と呼ぶのぢや。するとお前さん方は、私は伴をお前に渡さう、私は兄弟をお前に渡さう、私は夫をお前に渡さうと言つて應ずるぢやらう！ そこで墓掘りは向ふの方へ進んで行つて、死人を出しなさい！ 死人を出しなさい！ と常住呼ぶのぢや。お、フロレンス！ お、羅馬！ お、伊太利！ 絃歌饗宴の時代は過ぎてしまつたぞ、お前さん方は死病に罹つてゐる。お、神様、あなたは御存じでございませう。私は口を開きましたなら此の災害を防ぎ得た事を御存じでございませう！ 併し今となつては最う私の力に及びませぬ。最う私の言ふべき言葉はありませぬ。私は唯泣いて涙を灑ぐだけでございます。お慈悲を！ お慈悲を！ お慈悲深い神様！ 傷ましいのは此の憐れな人々でございます！ 傷ましいのは此のフロレンスでございまする！』

と、僧は兩腕を開いた。そして此の最後の語は囁きのやうに沈んで、殆ど耳に聞えない位であつた。それは群集の上を通つて、風に鳴る木の葉の音のやうに、無限な愛憐の歎息となつて消え失せてしまつた。そして血の氣のない白い唇を十字架に押し付け、僧は跪いて啜り泣いた。説教は終りを告げた。重たげな音のオルガンは徐々と鳴り始めた。人の心を誘ひ入れるやうな、大洋のそののやうに廣々とした音は絶えず崇殿と恐怖との度を増して行つた。

一人の女の聲は『御慈悲でござります！』と叫んだ。すると數千の聲が互にそれに和した。そして玉蜀黍の莖が風に吹かれて首を曲げるやうに、聴衆が一齊に上半身を膝に着けて、互に群り、互に擦れ合つた様子は、丁度暴風雨の襲來に驚き騒ぐ羊の群のやう。そして世がすぐにも寂滅するてふ恐怖に驅られた懺悔者等の悶絶するやうな長歎は、寺院の牀や、大理石の柱や、穹窿を轟々と揺する音楽と相纏はつて天に上るのである。

『御慈悲でござります！ 御慈悲でござります！』
デューヴァンニも身體を膝の上に曲けて咽び泣いた。背の高い鍛冶屋は息を荒くしてデューヴァンニに倒れるやうに寄り掛つた。顔の蒼白い大工は息を凝らして小兒のやうに泣きながら、『御慈悲でござります！』と呻つた。
ポルトラフィオは此の時自分の慢心、生命に對する愛好、又フラ・ベネデットの許を逃けて神の敵たるレオナルドの危険極まる美術に投じたい希望などを思ひ出した。それから水車場の山の恐ろしい夜の事、發掘されたヴィーナスの事、『白夜又』の外道的な美しさを罪深くも熱愛した事などを回想した時、兩手を天の方に舉げて、喪心したやうになつてゐる群集の聲に和して叫んだ。

「神様！ 神様！ 私に憫れみを垂れて下さりませ！ 私はあるの前で罪を犯したのでございます！ 宥し

て慈悲を垂れて下さりませ！」
 其の瞬間、涙に濡れた顔を擧げた時、自分の側にあるレオナルド・ダ・ヴィンチの高い、端正な姿が目にとまつた。美術家は無造作に柱に倚り掛つて、例の寫生帳を右の手に持ち、左の手で繪を描きながら、更に説教師の首を見んと欲する如く、折々説教壇の方を眺めてゐる。
 恐怖に満ちた人々が前後左右にゐる中であつて、レオナルドは堂内の光景を少しも知らぬ人のやうに此の上も沈靜な態度を保つてゐた。彼の冷々たる青い目、微細な觀察をする人のそのやうに固く結んだ薄唇——其の目と唇とに彼がアフロデテの神體を數學的に量つた冷淡と好奇心とがあつた。此の人を見るなり、レオナルドの目の涙は乾いて、祈りは唇の上で止んでしまつた。

そして寺を出て畫家に伴つた少年は、件の寫生帳を見る許可を乞うた。レオナルドは拒んだが、併し直きにそれを少年の手に渡してやつた。デューヴァンニは見るとそれは恐ろしい諷刺畫で、サヴォナロオラではないが、サヴォナロオラに似た僧衣を着た憎々し氣な老惡魔の圖で、其の慢心と欲念とを未だ壓服する事が出来ず、自分から求めた苦しい難行に相好が變じたやうになつてゐた。其の下唇は突き出て、皺は頬一面に爬つてゐるし、首は木乃伊のやうに曲つて且つ黒く、蓬々として長く伸びた眉毛と恐水病のやうな目付きとは殆ど人間らしい點を止めてはゐない。あらゆる黒いもの、恐ろしいもの、迷心的なもの、又サヴォナロオラをして、不具な、舌を結へたやうな吃りの、夢想家マルフィの力に左右されしめたやうな趣を、レオナルドは此の寫生に表してゐたのである。

怒りもせず、憐れみもせず、沈靜無私な觀察を以て彼はそれを描き出したのである。

で、デューヴァンニは、「畫の天才たらん者は一箇の鏡でなければならぬ。あらゆる事象、色彩、運動を映じながら、それ自身は常に透明且つ平靜たるを要する」と言つた此の人の言葉を思ひ出した。

ベネデットの弟子は目を上げて此の畫家の顔を見た。そして永遠の墮罪でふ感じにびくつきながら、又レオナルドに於いて眞乎反基督教徒の僕を見てゐると思ひながら、然かも此の人を残して立去る事は出来なかつた。何か抗し難い力がこの少年をレオナルドの方に引き寄せた。此の人物、此の技能の眞底が、少年に洞察されないのなら、如何にそれは彼に取つて悲しむべき事であらうぞ。

+

それから二日後の事、グリルロは最も不吉な報道を齎してチブリアノの家へ飛び込んで來た。蓋しチブリアノは用務に支へられてフロレンスを出る事が出来ず、ウィナスの運搬は未だ片付いてゐないのであつた。グリルロの言に據ると、ドン・ファウスチノは何でもサン・チェルヴァソを去つて、隣村サン・マウリチオへ行つた。そして其處で天の懲罰の話をして村民を恐怖させた上、夜になつてから其の一隊を率ゐて、山莊を圍んで、石像の見張りに残して置いた園丁のストロッコを袋叩きにして、手足を縛り上げた。それから僧は女神に對して或る古代の祈禱文を頌讀したが、それは地中から掘り上げた彫像や容器と其の他の物を淨めて、基督教徒の靈の利益になるやう、又三位一體の光榮に轉化するやう、教會の僕が神に願ふものであつた——庶幾は諸の汚穢を消滅し去り、信

仰の力に由りて我等の主たる基督の忠僕となる事を得せしめ給へ——といふ。そして一隊の者は像を散々に破壊した上それを爐に入れてセメントにしてから、それを村の墓地、新に築いた壁に塗つたのである。

此の話をした時老人は悲しみに暮れて泣いた。併しデューヴァンニ・ボルトラフィオを決心せしめるに此の事件は與かつて力あるものであつた。即日彼はレオナルドに會つて弟子入りを乞うた。レオナルドはそれを承諾した。

それから暫らく後、唯ならぬ報道がフロレンスへ傳はつて來た。それは基督教に最も誠實な佛蘭西王シャルル八世が無数の軍勢を引連れて兩シシリーを初めとして、恐らくは羅馬、フロレンスをも征服するため戦ひに來るといふのである。恐慌が市民の間に擴がつた。彼等はサヴォナロオラの預言が實現されさうになつてゐると思つた。あゝ罰は家の入口に下つた！ 神の劍は抜かれて伊太利の上にかざされた！

二の卷 此の神を見よ——此の人を見よ——一四九四年

「此の人を見よ！——約翰傳第十九章第五節。

「此の神を見よ！——(フランチェスコ・フォルツァの碑銘)

「鷲が空氣の最も稀薄な處で體を支へ、大船が帆に依つて波濤を蹴つて浮揚し得るなら、何故人類も同様に強い翼を用ゐて、自ら風伯の主人となり、且つ進んで空間の征服者となられなからうぞ？」

レオナルドは五年前、欣然たる希望を抱いて手帳の一冊の中に書いて置いた上の語を見付けた。そしてこれと隣り合つてゐる頁に、或る機械の下圖があつたが、それは一本の梁に數多の鐵の棒を結へて翼となして、絲と滑車で動く仕掛けになつてゐたが、今となつては此の機械も彼には不手際で滑稽なものしか見られなかつた。

彼の新しい機械は大蝙蝠に似て、翼は骸骨の掌のやうに、木製の五指から成つて、接目や軟韌な關節が澤山あつた。それから指と指との間を連結してゐる腱や筋は靱皮を細く切つたのや生絹の組紐で出來てゐるし、翼は曲腕と自在に動く唧子との作用で上昇するのであるが、一面に水の浸透しない琥珀織を張り詰めてあるので、丁度鷲鳥の蹠の足に似てゐた。翼の數は都合四枚で、交るゝ馬の脚のやうに動き、長さ四十ブラッチオ、幅は

八ブランチオあり、且つ推進に利なるため後方に曲がつて、機を上昇せしめるに都合の良いやうに下に垂れてゐた。搭乗者はこれに跨つて坐して足を鑑に入れ、細引、木材、挺から成つてゐる機械で翼を動かすのである。又鳥の尾の形をして羽毛を植ゑてある一つの大舵は搭乗者の頭に依つて廻轉するやうになつてゐた。

併し凡て鳥は一度羽を打ち上げて地上を離れる前に、先づ自分の兩脚で身體を上へに揚げるのに相違ない。其の證據に、あの脚の短かい鵜鴉を地上に放つと、翔たうと焦りながら翔てないのである。されば發明者レオナルドは外觀の美の損ぜられる事を甚だ氣にしたに拘らず、何うしても二本の脚棍を機械に取付けねばならないのであつた。美を缺いて、完全なるものゝ存する理がない。レオナルドは錯誤のある點を仔細に調べようと思つて計算に没頭した。併し依然甘く行かないので、彼は數字を一杯に書いてある全紙の上に性急に鉛筆で線を引きつまつて、其の縁の方に、『駄目』と書き、直ちに又『畜生！』と書いた。彼は疝癩を起したのである。

そして計算を再び始めたが益々無茶苦茶になる計り、ちら／＼と搖れて目を害する蠟燭の光りで手を進ませるに従つて、殆ど氣付かない程の誤算が愈々はつきりと目に付いて來た。

其の時猫が不意に目を覺まして仕事の机の上に躍り上つた。そして四肢を伸ばして背を曲けながら、止まり木から落ちさうになつてゐる剝製の、蠹魚の喰つた鳥を相手にして戯れようとした——此の鳥は飛翔の際に於ける重力の中心を研究するため工夫されたものであつた。其の猫をレオナルドは怒つて押し除け、毆らん計りにして牀へ下ろした。猫は哀れ氣な鳴聲を立てた。

「我慢しろ！ 何處へなりと好きな處へ行け。その代り私の邪魔をしちや不可い」とレオナルドは辯解らしく

言つて、猫の滑かな黒い毛を撫で、やると、其處に電氣の火花が出た。猫はゴロ／＼喉を鳴らして、天鵞絨のやうな四足を折つて、満足と神秘との満ちた綠色の目を確と主人の方に付けて、さも嚴し氣に坐した。

數字、分數、括弧、二次方程式、立方根式、平方根などが再び紙に書かれた。彼は此で二晩眠らないのであるが、フロレンスから歸つて最早や満一ヶ月になるのに、其の間は滅多に外に出ずに、絶えず此の飛行機の事に従事してゐたのである。

白いアカシヤの枝が明いてゐる窓から這入つて、時々其の響りの高い優しい花を机の上に落した。霞のやうな雲に柔けられて眞珠の色を帯びてゐる月光は室内に流れ這入つて、獸脂の蠟燭の陰暗な輝きと相纏れた。部屋は天文、物理、化學、工學、解剖などの諸機械、諸道具で詰まつてゐた。車輪、槓杆、發條、螺旋、啣子、弧、吸込管、眞鍮、鐵、鋼鐵、硝子は姿の麗らかな化物の手足の如く、又巨大な昆蟲の如く、暗い中から顔を出してゐた。潜水器の側には大きな目の形をしてゐる視官の機械の、稍曇つた水晶體があるし、馬の骸骨、剝製の鰐、それからアルコールに漬けてあるのは流産した人間の胎兒、又水上を歩むに用ゐるボート形の靴、最後にあるのは此の彫刻家の製作室から此處へ迷ひ込んだ石膏の首で、それは小兒か又は天使のやうに見えるが、狡るさうな又悲しさうな笑方をして四周の物を見てゐるのである。後ろにあるのは坩堝と鍛冶の鞴で、爐の灰の上には石炭が赤く熾つてゐた。二枚の巨大な翼の中、一枚は既に膜が張つてあつて、他の一枚には未だ張つてないが、それが部屋一杯に擴がつて、牀から天井までを全然占領してゐた。其の牀の上に轉ろがつてコクリをしてゐるのはレオナルドの助手のゾロアストロで、黒ずんだ眞鍮の柄杓を手に持った儘、中の油を零しつゝ、仕事をしながら眠つてゐる。

た。翼の一枚が此の眠つてゐる男の胸に觸れてゐるので、息をする度、翼は柔かに震搖いで、宛ら生命が宿つてゐるやうに見え、其の尖つた上端は天井の極に當つてさらくくと鳴つてゐた。
臙ろな明りの内にあつて、其の擴がつて動いてゐる翼の間に此の男を置いてゐる機械は、將に身を揚げて飛ばんとしてゐる途方もない大蝙蝠に似てゐた。

一一

こゝミランの郊外にあるレオナルドの家（城とサンタ・マリア・デルレ・グラチエと名くる修道院との間にある）を圍んでゐる園からは菓實、草、百里香、佛手柑、茴香などの快い香氣が漂うて來た。月は這入つてしまつて、窓下の燕は囀りながら翔ち掛つてゐるし、近くの池では家鴨が水を飛ばせて鳴き、蠟燭臺の蠟燭は將に消えなんとしてゐる。此の時、つい側の製作室に弟子達の聲がした。

弟子は二人で、デョーヴァンニ・ボルトラフィオとアンドレア・サライノとであつた。デョーヴァンニは解剖圖を寫しながら、遠近法を研究するために一個の機械を前にして坐してゐたが、それは網が張つてある木製の框で、畫用紙に描いてある線は其の網の形に現れてゐた。サライノは雪花石膏の板を一枚持つて木の鏡板に當てがつてゐたが、これは罪のない目をして、髪美しく縮れ上がった美少年で、先生はこれを愛して、天使を書く場合此の少年をモデルにしてゐた。

『アンドレア、君は何う思ふ？』とボルトラフィオは尋ねた。『先生のあの機械は直き完成するか知ら？』

『何うだか』と口笛を吹きながらサライノは答へて、刺繍のしてある自分の新しいスリッパを片付けた。『昨年二月の間先生はあれに著手してゐられたが、其の結果といへば唯笑ひに終つた計りさ。それはね、ゾロアストロー——あの旋毛曲りの熊奴が何でも構はず飛ばうといふので、先生は止められたけれど、それでも奴試みたのだ。あの馬鹿、例令落ちても負傷をしないやうにと牛の膀胱を幾つも首の周圍へ吊るして、屋根に上つて機械の翼を羽搏きさせたのだ。成程身體は上つたが、併しそれは風が上げて呉れたのだから、直ぐ様眞逆様になつて肥料貯めの上にズドンと落ちたのだ。お陰と貯めは柔かであつたのだから身體の骨は折れなかつたが、膀胱は大砲のやうな音を發して破裂したため、鐘樓の鴉は恐れて飛び去つたし、あの蠟の翼が太陽の熱に溶けてクリートの海中に落ちたといふイカルスやうに、此の先生、肥料の中に頭を埋めながら、足でバタ／＼空氣を蹴つてゐたのだ。』

丁度此の時三番目に這入つて來た弟子があつた。チエサレ・ダ・セストといふ名で、最う若くもない年頃、病氣持ちに疝癪持ちで、其の意地惡い目付きの何處かに恰恠さうなところがある。片手にサンドウィッチ、片手に酒を持つてゐた。

『チエー此奴あ酸っぱいな！』と彼は顔を蹙めて唾を吐きながら、『全くだ、此のハムは靴の皮のやうだぜ——斯んな御馳走のために毎年二千ツカット（一ツカットは邦貨四圓五十九錢）の金を出すのだから——』

『それでは食器部屋の階段の下にある別の樽のを試て見給へ。』
『それは試たよ。ところが兩方の中であれは一段と惡いのだ。』そしてサライノが被つてゐる小豆色の、けば

けばしい羽の着いてゐる新らしい帽子を指しながら、チエサレは言葉を續けた。「あれ！あれ！僕らの仲間で新しい品を貰つた奴があるらしいぞ。けども最う二月になるが臺所へは一向新らしいハムも来ない。マルコは老體のお母さんに縋つて、先生の財布には一ソルドも這入つてゐませんと言つたつけ。實際先生はあんな碌でもない翼のために何も彼も拂つてしまつたので、これから儉約をして僕らを餓死させようとしてゐらつしやるのだ。併し先生の金は未だ外に引け道があるのだ、言つて聞かさうか。それはね、先生の氣に入りの人達が貰ふのだよ、鎗牌や天鷲絨の帽子などをね。アンドレア、君はそんな頂戴物をして恥ぢとは思はないのか？レオナルド先生は君のお父さんか兄弟にでも當るのかい？それとも君は未だ嬰兒なのか。」

チーヴァンニは話頭を一轉させようと思つて遮つた。「チエサレ、君は遠近法の法則を私に説明して呉れる約束だつたね。先生はあの通り機械に凝つてゐらつしやるから、待つてゐても時間を無駄にする計りだし……」

「然う、然う、君。僕らも何日かあの機械に崇られるのだけ、畜生！縦しんば今の飛行機でないにしても、他の機械にね。僕覺えてゐるよ、それあの食堂で食つてゐる最中、先生は腸詰を刻む機械を發明しようとして、突然食を止さざるを得なかつた事があらアネ。で、其の切れ物の刃が先生の意に満たなかつたものだから、聖徒、雅各の首が兩肩の間に接着かすにあつた譯さ。それから豕の子を炙る焼串を工夫してゐた間は、先生の製作したマドンナの中で最上の奴が隅に押遣られて待ち呆しを喰つてゐたしね。今一つの大發明、リンネルを洗濯する時に使ふのだと言つて、鶏の糞を灰水に浸したなどは君は何う考へてゐる？先生は繪筆から遠かつてさへるれば、何んな馬鹿な眞似でもして時間を空費するのだからね。」斯う言つてからチエサレは顔中に皺をよせ、唇を歪めて

意地悪る氣な笑ひを洩らした。

そして「何故、ね君、何故神はあんな種類の人達に天才を賦與するのだらう？」と彼は低い聲を震はして言ひ足した。

三

レオナルドは寫字檯に倚つて仕事を續けてゐる。其の時燕が一羽、窓から飛び込んで、室内をぐる／＼廻りながら、天井や壁を掠めてゐるが、到頭大蝙蝠に捕まり、その生きて居る小翼を細工をした。臚の網におさへ付けられてしまつた。レオナルドは用心して起つて、手柔らかに外してやつた鳥を手の中に持つて、絹のやうに光つてゐる其の黒い頭に接吻してから放してやつた。燕は飛んで、喜びの聲を發しながら、青空の中に没してしまつた。

「何といふ簡単な、何といふ容易な飛行だらう」と思ひながら、レオナルドは羨し氣に失望の目を放つて燕を見送つてゐるが、やがて巨大な蝙蝠の暗い骸骨たる自分の機械を蔑むやうに眺めた。

牀の上で眠つてゐた男は不意に目を覺ました。これはフロレンス生れの者で、名はゾロアストロ、更に縮めてアストロ・ダ・パレトラといふので、技倆の優れた機械師であり又鍛工である。顔は小兒のやうに無邪氣ながら、不恰好な大男で、宛ら一ツ目入道のやうに見られた。蓋し明いてゐる目は一つしかないからで、片方のは眞赤に熱した金の火花のため、ずつと昔に明を失したのである。

アストロは一つしかない目を擦つて、髪の毛のモジャくした頭を掻きながら叫んだ。「何といふ馬鹿だらう、此の私は！ 先生、何故先生は私を寝させないやうにして下さいませんか？ 私はあるに熱心に心を傾倒してゐましたのに、夜が早く経つて、朝になつて飛行したいと計り思つてゐましたのに！」

『いや眠つてゐたのは慟巧だつた。翼はうまく行かなかつたのだから』とレオナルドは言つた。

『えッ今度のもですか？ まあ先生、私は二度と再び先生の機械は作りませんよ。まあ風に飛ばしてしまつた労力や金の事を考へて下さい。併し先生これ以上に出來ないではありませんか？ 斯れ位の翼に乗つて飛行できなんて、そんな事はある譯がございません！ 象が乗つても機械は揚る筈です。何うか先生、私に試めしをさせて下さい！ 私は水の上で試験して見ませう、縦しんば落ちたところで水に漬かるが關の山ですから。私は魚のやうに泳げるのですよ、決して溺死するやうには出來てゐない人間なんです。』

と言つて歎願するやうに手を合はせたが、レオナルドは首を振つた。

『待つてゐる給へ、君、もう少し待つてゐる給へ。今に其の時節が來るから。そして其の時には……』

『其の時にはですつて？』と涙を流さんばかりになつて鍛工は叫んだ。「何故今でないのです？ 確かに先生、神様が天にゐらつしやるやうに確に飛行して見せますよ、私は。』

『否や、アストロ、君は飛べまい。或る數學の法則によつて……』

『然う仰有るだらうと思つてゐました！ 數學の法則なんか何の役に立ちます。其奴のために何も彼も滅茶に

なるのです。ま、私等が幾年間働いたか、それを考へて下さい！ そんな事を思ひ出して下さい私は胸が悪くなるのです。』

ります！ 何んな蚋だつて飛ぶんです、蚊だつて飛ぶんです。尾籠な事を申すやうですが、何んな肥料蟬だつても、何んな蠶だつても翅を持つてゐるんです。それなのに人間は蟲のやうに爬つて歩く、實に此の上もない不公平な事です！ ですから私等は疑ふ譯がないではありませんか？ 先生、彼處に先生の翼がございます、ちやんと準備の整つた、美しい翼がございます。ちやんと神様の御加護を受けて、擴げて、飛行する計りになつてゐるのです！ で、何んな事になるものか演つて見ようといふのです！』

アストロの言葉は途切れたが、何か思ひ出すやうな様子をして、さらに落着いて續けて言つた。「先生、私、先生にお話したい事があるのですが。それは今晚夢を見たのです、然う、私夢を見たのです……』

『君の夢は分つてゐる！ 君は飛行したのだ。』

『然うです。併し何うして、すか分りますか？ ま、私の話を聞いて下さいまし。何處か知りませんが私は兎有る部屋の中にあるたのです、然かも人込みの中にあるたのです。で、奴等私を見て指して笑ふんでせう。私思はず獨語を言ひましたよ。『飛行ができないとは實に残念だ』つてね。そして私は起きて、兩腕を振るつて立ち上りました。實に辛らかつたです、宛然背中に山でも負つて立つやうでございました。併し直きに軽くなりまして飛び上つたんです。丁度私の頭が屋根に届きました。すると皆んなで以て大聲を揚げるんです——御覽よ、飛行したつて。え、そして私、彼處の鳥のやうに窓を越して、高く、圓形を描いて、到頭天に達したのです。風は耳の端でヒュウ／＼鳴るし、餘りの嬉し紛れに大聲を揚げて笑ひました。で、私斯う思つたのです。「何故私は今まで飛ばなかつたのだらう？ 斯んな事は非常に容易しい事だ、機械の手なんか些つとも借りなくて宜いのだ。』

四

叫ぶ聲、怒罵の聲、階段を踏み鳴らす躁急な足音、兩人の話はこれのために途切れてしまった。そして戸を廣く押し開いて部屋の中へ躍り入つたのは、猪毛の頭に雀斑の顔をしてゐる男で、十歳になる少年の耳を掴みながら、此處へ曳き摺つて來たのである。この男はレオナルドの弟子なるマルコ・ドッヂョネであつた。

「此の罰當り奴！」とマルコは叫んだ。「此の野郎、貴様の喉を土足に掛けて呉れる！」

「マルコ、何をそんなに騒いでゐる？」とレオナルドは尋ねた。

「先生何うぞ聞いて下さい。此の畜生、子供の癖に、私の持つてゐた銀の扣金を二つとも盗んだのです。あれは一つ十フロリン宛の金が掛かつてゐるのです！　ところが此の小僧、一つは賭博で亡くしたし、今一つの方は靴下の中へ入れてゐたのを私が見付けたのです。で、私此奴の頭の毛を掴んで引つ張りましたら、此の悪魔の小僧は私の指を喰ひついたので、骨まで這入る位深く喰ひついたので。」

と言ひ様、再び少年の髪の毛を掴まうとしたが、レオナルドは逸早く少年を救つてやつた。するとマルコは革囊から一聯の鍵を取り出して牀の上に叩き付けた。蓋し此の家の鍵を保管してゐるのは此の男なので。

「先生、鍵を受取つて下さい！　此の家の番は私には最う出来ません。悪漢や盜賊と一緒になつて此の家に居る事は此の上私に出来ないのです！」

『落着いて、マルコ、落着いてさ。此の子を私に預けて置いて呉れ。』

三人の弟子も、製作室から此處へ來たし、肥つちよの女料理人マッリナも買ひ出しの籠を抱へながら直ぐに此の仲間の中へ割り込んだ。そして此の小さな罪人が目に入つたので、マッリナは兩手を擴げて、囊の破れ目から乾した豆の零れ落ちるやうな單調な聲音をして喋り出した。チェサレはチェサレで滔々と辯を揮つて、此の異教のヤコボはありとあらゆる悪計、邪謀を考へ出して、或る時は番犬を不具にしたり、或る時は燕の巢に石を投げ、蝶の翅を撈り取つたりして悪戯をするのに、何故家の中に留めて置くのかと其の理由を訊ねた。

ヤコボは主人の蔭に隠れながら、其の青白い美しい顔に至極平氣な色を見せ、目を悪くくしく光らして、無言の儘レオナルドの方を歎願するやうに顧みた。

レオナルドは此の喧騒を取り鎮めようと思つたが、當惑氣な、弱つたやうな奇妙な様子が其の面に顯はれ、それが蔑んだ色を見せてゐるチェサレの目に止まつた。

併し騒ぎは程なく獨りで鎮まつた。そしてレオナルドは平生の沈着に復つて、ヂョーヴァンニを呼んだ。それは彼の最大の傑作たる『最後の聖餐』を見に行くために招いだのであつた。ヂョーヴァンニは顔を紅くして喜んだ、そして兩人は一緒に出て行つた。

五

併し兩人は中庭の泉の前で留まつたが、それは徹夜をしたレオナルドが顔を洗つて、心氣を回復するためであつた。日は曇りながらも風は無く、物皆の上を流れてゐる銀色の光線は水の下から發するやうに見える。斯様な

日は晝を描くに畫家の最も喜ぶ日であつた。そして二人が未だ泉の縁を離れないでゐると、少年のヤコボが竊然姿を現した。其の手に樹皮で作つてある小篋を携へて。

『レオナルド先生、私これを持って来ました——先生にお目に掛けようと思つて』と少年は低い聲で言つて、用心して其の蓋を揚げながら、中に入れてある大きな蜘蛛を見せた。そして熱心に、『私、三日間此の蜘蛛を見てゐました。此奴に毒があるのですよ。蠅を喰ふ様子を見てゐますと恐ろしくなります、先生！』

少年は今顔を活々と光らせながら、蠅を一匹捕へてそれを蜘蛛に宛行つた。蜘蛛の毛むくじやらかな脚が蠅を掴むと等しく格闘が起つて、翅の音がブン／＼と高く鳴つた。

『ほら、蜘蛛が食つてゐますよ！ 蠅を食つてゐますよ！』と少年は恍惚となつて叫ぶし、レオナルドはのしかつて、争つてゐる動物を見詰めた。

此の二人の顔は非常に異つてゐるのに、恐ろしい事を甚だ樂しむといふ同じ表情が現はれてゐる——とジョーヴァンニには思はれた。

蜘蛛が蠅を殺して喰ひ盡してしまつた時、少年は小篋の蓋を閉めた。『先生、これをあなたの机の上に置きますから、他の蜘蛛と喧嘩をさせて見て下さい。』

そして歎願するやうに目を擧げて、唇を顫はしながら言葉を續けた。『先生、私の事を御立腹なさらぬやうに願ひます。私は先生のお宅を出たいのです。先生もお分りでせうが私は先生に御迷惑をかけます。先生は御親切にして下さいますけれど、他の人は可けません、そして實際のところ私も其の可けない方なのです——他の人

のやうに私には胡魔化して行く事が出来ません。それは兎に角私はずつと遠くの方へ行つてしまつて、自分一人である積りです。其の方が餘つ程可いかと思ひます。只何うか先生私を宥して下さい、後生です、お願ひです。先生、私を宥して下さい。』斯う話してゐる少年の長い睫毛に大きい涙の玉が宿つた。『レオナルド先生、私を宥して下さい。私の形見に此の蜘蛛を先生に差上げて行きます。蜘蛛は長壽をするものですから、私アストロに餌をやつて呉れるやうに頼んで置きます。』

『何處へ行かうと思つてゐる？ 否それには及ばん、マルコはお前の罪を宥すだらうし、私はお前に何も怒つては居ない。それから其の蜘蛛は本統に貰つて置かう。此の後は温良しくして居るやうに下さい。』

ヤコボが先生の方に向けた目の中には感謝ではなく、單に無限の驚異があつた。レオナルドはヤコボを見て莞爾とした。其の有様は丁度自分の大智で此の少年を了解して、此の少年は天性が悪に作られてゐるのだから、悪い事をして罪がないのだと認めたやうであつた。

『さ、ジョーヴァンニ、遅くなるから出掛けよう』とレオナルドは言つて、兩人は共に沈黙たる市街を歩いた。市街は庭園、葡萄畑、菓樹園の塀の間から、サンタ・マリア・デルレ・グラジエの僧庵に通じてゐる。

六

先生に納める事に決めてある六フロリンの月謝が最早や納められなくなつてゐるので、ボルトファイオは此の間中から其の事で心を悩ましてゐた。叔父と喧嘩をしたため、今後の助力を撥ね付けられるし、二月の間金を貸し

て呉れたフラ・ベネデットもこれ以上そんな事は出来なかつた。

そこで此の朝ジョーヴァンニは事の始末を先生に話さうと決心した。哀願するやうに先生の方に向いて、髪の毛の根元まで根らめながら、彼は咽るやうに言つた。

「先生、今日は月の十四日でございますが、私は十日の日にお金を差出す事に決めて置きました。實は斯んな事を打明けけるのは私として苦しいのですが、唯今は三フロリンしかないのです。で、何卒先生にお待ちを御承諾して戴けないものでせうか？ 金は直きに這入つて来る望みがあるのでございます。メルラが寫字を私にさせると約束したのですから。」

レオナルドは吃驚してジョーヴァンニの顔を見た。

「何です、そんな話は、ジョーヴァンニ？ 君は恥辱だと思はないか？」

ジョーヴァンニが顔を根らめて、當惑相にしてゐる體や、其の補綴してある靴、毛の脱けた着物を見て、レオナルドは此の弟子の甚だ貧しい事を推察した。で、眉根を蹙めて話を他の事に轉じたが、やがて折を見付けて一枚の金貨を少年に手渡しながら、何気なしに言つた。

「あゝ君、私の畫に使ふのだから、これで藍色の紙を二十枚に、赤いチヨークを一束と、それに狸のブラシを一本買つて来て呉れ給へ、さ、此の金を取つて。」

「これは一ツカットの貨幣でございますが？ 十ソルチ位の買物をこれで支拂つて？ では釣を取つて参りませう。」

「いゝえ決して、そんな瑣細な事は私は念頭に置かん。折があれば何時か君は返済できやうから。そして今後、金の話は私にしてはなりません。分つたらうな？」

と言つて直ちに、大船てふ名のある眞直な堀割の兩岸に霧に鎖されてゐる落葉松の恰好の説明に言葉を移した。松は長い列を作つてゐるので、眼はずつと遠くまで引かれた。

「ジョーヴァンニ、霧が薄ければ木は青く見えるし、濃ければ灰色に見えるのだが、君はそれに氣が附きましたか？」

それから進んで、岡の上に雪が懸かつて作る陰影——即ち岡の樹木に葉のある夏時の陰影の調子と、葉が脱ちて樹木が裸になつてゐる冬の陰影の調子とを話した。それを話してから突然斯う言つた。

「君は始めて私の處へ弟子入りをした時、私が契約の細目を一々帳簿に記入してゐたのを見たので、定めて君は私を吝しい男だと思つたでせう。併し實際あれは父のピエロから得た私の癖で、父は公證人であつたが、處世の法を非常によく知つてゐたのです。私に取つてはあんな事をする習慣は下らないもので、例へばサライノの帽子の羽根の價のやうな詰らない物をまで記して置く位極端にやつてゐるが、それで一方には私の手から何千ツカットといふ金が出て行つて、それが何に支出されるのか私には分らない始末。だからこれからは、あの癖を氣に留めないやうに、金の入用な時があれば持つて行きなさい、屹度私は父が息子に與へるやうに君に與へるから。」

そしてレオナルドは非常に深切に微笑を含んでジョーヴァンニの顔を見遣つたので、弟子の心は晴れ々しくなつて、喜悅で溢れる程であつた。と、先生は再び木の話に戻つて、不恰好な白桑の木を指しながら、獨り一々の

樹木のみならず、一々の葉に至るまで、其の他の樹木とは形態を異にしてゐること、猶ほ一切の人が各々異なる容貌を有つてゐると同じい事實を弟子に觀察せしめた。で、デューヴァンニは思つた、先生は私が貧乏な弟子である事を看破して其の積りで言葉を掛けて下さつた事は話の中にも現れてゐるが、それにも劣らぬ看破力を以て樹木の事をお話しなすつた。先生はありとあらゆる生物に對して親愛な觀察を下されるので、先生の目は鋭くなつて、宛ら先見者、千里眼の穿眼を具へたやうになつてゐると――

二人の目にサンタ・マリア・デルレ・グラジエが見えて來た。此の寺はドミニカン派の修道院に附屬して、天幕の形をした廣い丸屋根のある煉瓦の建物で、名匠ブラマンテの初期の工作であつた。寺は黒ずんだ桑林の後ろに方る原に聳えて、白い雲の背景に對して薔薇色に又灰色に見えた。

兩人は直ちに僧院の食堂の中へ通つた。

七

食堂は無裝飾の、長い、白塗りの室で、屋根裏には極が見え、濕潤の氣、薰香の聲、精進日に攝る食物の匂が室内にあつた。僧院の住職の食卓は室の入口の壁龕にあるし、僧達の坐する長く狭い食卓は左右の側に並んでゐる。其の静けさは窓々に囁く蠅の聲が耳に聞える程で、窓には黄色い、埃のかゝつた、小さい硝子板が嵌めてあり、室は蜂巢の房のやうに洞然としてゐる。併し時折、鐵の揚鍋のガチャ／＼鳴る音と一しよに、人の聲が臺所から聞えて來る。

住職の食卓と向ひ合つた室の端に木の足場が組んであつて、粗雑な灰色の中のでそれを蔽うてあつた。デューヴァンニは此足場の後ろには、先生が既に十二年來苦心してゐる最後の聖餐の大作があるのだと判斷した。

レオナルドは足場の上に昇つて、下圖、模様形、繪具などの入れてある木の箱を開いてから、澤山な書き入れのある、痛く損じた拉典文の小さな聖書を取り出して、デューヴァンニに渡しその約翰傳の第十三章を讀ませた。それから壁畫を蔽うてゐる掛物を外した。

デューヴァンニが第一に得た印象は、自分が今見てゐる物は繪ではなく、此の食堂を引き伸ばしたもので、然かも天空を背景としてゐるものだといふ感じであつた。幕の揚がつてゐる奥には別の室があるやうに見えて、天井の梁が其處へまで延びて行き、その遠くなるに従つて間隔を縮め、日の光りは畫面の三重窓から照り込むシオンの岡の上の静寂たる夕陽に混じてゐる。此の食堂の森嚴と、無裝飾とは此處僧院の食堂に比して差して劣つてはゐなかつた。盃、皿、ナイフ、細口壺などの載つてゐる聖卓は、縦し一段の尊嚴の感はありこそすれ、僧達が毎夜會食する食糧に似てゐるし、これに細い縞模様や、隅々の結び目や、滑かならぬ襷のある食卓巾は、僧院の巾地類を入れてある室から唯つた今取り出したやうで、未だ濕り氣があるやうに思はれた。

デューヴァンニは約翰傳を開いて讀んだ――

逾越の節の前にイエス此世を去りて父に歸るべき時いたれるを知り……時に彼等晩飯の席につく惡魔はかね

てイエスを賣んとする事をシモンの子イスカリオテのユダといふ者の心に發さしめたり……

イエス此事を言ひて心に憂へ證して曰ひけるは誠に實に爾曹に告ん一人なんぢらの中に我を賣者あり。弟子

たち互に面を觀あはせ誰を指て言へるなる乎と疑ふ。イエスの愛する一人の弟子イエスの胸に倚てありし。

ジョーヴァンニは壁畫の方に再び目を舉げた、使徒達の顔は活々と生動して、從來生起したあらゆる大破裂中、最も神秘的な且つ最も恐ろしいもの——神を死に致す罪の發生——のため周章の状は見えながらも、然もジョーヴァンニ自身が宛ら彼等の語を聞き、彼等の魂の奥底を眺めてゐるやうであつた。

就中ジョーヴァンニは猶太、聖彼得及び聖約翰から感銘を受けた。ユダの首は未だ描けてゐないし、それに後ろの方に曲けてゐる身體は薄く輪廓が取れてゐるのみで、其の痙攣的な指は荒々しく金囊を掴み、鹽皿を顛覆して鹽を零してゐる。彼得は憤然として後ろから立ち上つて、右手にまだナイフを持つた儘、左手を約翰の肩に掛けて、此の愛弟子に、『此は誰を指て言るなる乎』と問うてゐるかのやう。そして銀髪と雄々しい憤怒とを合せて、彼の全身は炎々たる熱心と偉業に對する渴望とを示しながら、師の避くる能はざる苦痛を知解して、『主よ何故に今なんぢに從ふこと能はざるか、我は爾のために我命を捐ん』と叫ばうとしてゐる。それに反して長い絹の如き髪を有せる約翰は平和に眠つてゐるやうで、瞼を伏せて兩手を組んだ容子といひ、長味を帯びた瓜實顔といひ、天國のやうに平安な澄心の理想とも見られるのであつた。弟子中、獨り彼ののみは苦痛、恐怖、憤怒を知らなかつた。

ジョーヴァンニはこれを見て心の中で思つた。『これがレオナルド先生の先生たる處だ！ 私は先生に疑ひを抱いて諸種の悪言を殆く信じようとしてゐた。斯様いふものを創作した人が不信心と云へやうか。否、凡そ人類中此の人くらゐる基督に接近してゐる者がゐるだらうか？』

一方レオナルドは巧みに畫筆を揮つて約翰の顔を仕上げてから、今度は木炭で耶穌の首の輪廓を取りに掛つた。併しそれは出来なかつた。此の首に思ひを凝らして以來既に十年、然かも未だに基礎の下圖さへ了へ得ないのである。聖い顔を表現さるべき空虚に打衝かる毎に、レオナルドは死ぬ程の懊惱と自己の無力の意識とを覺えて戦慄するのである。で、今も彼は木炭を傍に投げ捨て、軽く描いた僅少の線を巾で拭き消して夢みるやうな状態に陥つたが、それは何うかすると數時間も續く事があつた。それを見たジョーヴァンニは強ひて師に近いて其の顔を窺ふと、年を取つて峻厳相に見え、間斷なき緊張と沈黙たる失望の印跡を帯びてゐるやうであつた。

併しレオナルドの目が弟子の目の上に落ちた時、彼は深切氣に言つた——

『あ、君、此の畫に關する君の意見は？』

『私なんか何と言へませう！ 先生、美しい畫です。此の畫の美は世界のあらゆる物を超絶してゐます。外に誰あつて斯んな場面をこれほどに了解したものはありませんでした！ 否併し私は言ひますまい——言へないのです。』

と言つた聲は顫へて涙に濡れた。併し直ぐに低い聲で言ひ加へた。『先生にお尋ねしたい事が一つあります。斯んなに幾つも顔がありますが、猶太の顔は何んなになるのでせう？』

師は返事をせず下圖の紙を取つてジョーヴァンニに渡した。それに描いてある顔は恐ろしくはあるが、忌まはしくもなければ悪相でもなく、却て無限の憂愁と大『知』の深い苦味とに満ちた顔であつた。

「ジョーヴァンニはそれを約翰の顔に比べて、恐怖に打たれて叫んだ。『左様、これこそは猶太だ！』（悪魔彼に入り）とある猶太だ。恐らく猶太には弟子の誰よりも『知』があつて、かの（一切の者は一たらん）てふ叫びを受け取る事を肯じなかつた。何故なら猶太は自分自身で以て唯一の者たらん事を欲したのだから。」

此の時チエサレ・ダ・セストが宮廷服を着た男と一しよに食堂へ躍り込んだので、ジョーヴァンニの言葉は途切らされた。

『到頭見付かつた！ 到頭！』とチエサレは叫んだ。『先生、私等は残る限なく先生を捜し廻つたのです。お妃様が先生に御用があるとの事でした——重大な用件とかで。』

『何卒私に連れ立つて御殿へ御出で下さるやうに』と雑色は言つた。

『して其の譯は？』

『いやはや飛んだ災難が起りましたな、先生、實は水管が使へないやうになつたのでござります。今朝方の事、お妃様が風呂を取らうと思召されました、お付きの女が襦衣を取りに次ぎの間へ行つてゐる間に、栓の口が壊れまして、玉體既んでのことに湯傷をなさるところでござりました。お妃様には強いお怒り、大夫のアンブロヂオ・フェルラリ様に大そうに苦情を並べられて、此の管に就いては一度ならず先生に御注意を申してあるとの仰有る始末。』

『何といふ子供らしい事だ』とレオナルドは答へた。『私の仕事をしてゐるのがあなたの目に這入りませんか。ゾロアストロの處へ行つて下さい。三十分あればあの男が何も彼も修繕しませうから。』

『先生とでなければ御殿へ歸るなど仰せ付かつたのでござります。』

それに頓着せずレオナルドは畫の方へ行つたが、救世主の首を描く場所と定めてある無地の空處の上に目が落ちた時、眉は氣落ちしたやうに蹙まつた。そして又新な失敗を重ねてから、足場を下りた。

『宜し、行くとしよう。ジョーヴァンニ、君は私に會ひに城中の外庭へ來て下さい、其處へ行く道はチエサレが知つてゐるから。私は（騎士）のある所で君に會ひます。』

此の（騎士）とはフランチェスコ・スフォルツァの馬上の立像の事である。

かく言ひ捨て、レオナルドは最後の聖餐には一瞥をも與へずに、雑色を従へて宮殿の浴場の管を修繕しに行つたので、ジョーヴァンニは呆氣に取られた。

『そんなに君は其の畫から目を離されないのか？』とチエサレは蔑み顔にボルトラフィオに言つた。『確かにこれは名作だ——少くとも熱視しない間は名作だ。』

『それは如何いふ意味なのか？』

『それを僕に問ふ事かい。僕は君の信念を穢したくないからね。多分しまひには君は獨りで發見するやうになるだらう。それは兎も角として賞讃して眺め給へ。』

『チエサレ、君の考へを聞かして呉れ給へ。』

『ちや宜しい。唯、僕の言ふ眞理を聞いても君は怒らんやうにね。君が何んな事を言ふか皆んな僕には分つてゐるさ。僕は唯君と争ひなんかしたくないのだ。實際此の畫は立派さ。何んな大家だつてこれ位澤山な解剖は知

らなからうね、斯んな遠近法、斯んな明暗の學問を有ちはせんのだ。僕はそれを兎や角は言はん。一事一物は直接に自然から來てゐる——顔の皺も、着物の皺も、何も彼もさ。それは然うだが生動する精神——そんな物が何處にあるのだ？ 第一、神様がお留守になつてゐるぢやないか。否、今ばかりぢやない、何時まで行つても此の畫面にはお留守をしてゐらつしやるのだぜ。詰まり心底は、その精神に於ては、皆んな氷と死なのだ！ 見給へ、デューヴァンニ！ 君の目を開いて見給へ！ 此の幾何學をそつくりの規矩整然たる所をお目に入れていね——三人組が四つあつて、思案最中のが二組、動いてゐるのが二組、そして其の中央が即ち基督だ。ま、細かく見て見給へ。先づ右の方から言ふと、約翰が點の打ち處のない善、猶太が申分なき惡で、彼得は善惡の判別さ（それが公平といふものだ）側にゐるのは活動組のアンデレとヤコブとバルトロマイの三人なんだ。今度は左の方を見給へ。此處にも三幅對が考へに沈んでゐるだらう、詰まりピリポの愛、ヤコブの信、トマスの智なのだね。それから今一つ三つ組が活潑さうにしてゐるぢやないか。ところで、デューヴァンニ、此の畫にはインスピレーションが絶無で、あるのは幾何學ばかりさ、美の坐すべき席に數學があるのだぜ。一切合切が珠盤づくめ、嘔吐を催すほどの理責、厭になるほど吟味に掛けられ、天秤に懸かつて、コンバスで測つたのだ。ねえ君、神聖な物の裏に——輕蔑すべき物があるのだぜ。」

「デューヴァンニ、デューヴァンニは穩かに窘めて言つた。「君は殆ど先生を了解してはゐませんね！ 何故先生が憎いのです？」

「では君は多分あの人の眞價が分つてゐると思つて居るので、従つてあの人を敬愛するのだね？」とデューヴァンは友を顧みて苦い微笑を浮べながら迅速に言ひ返した。其の目には消え難い惡意が燃えてゐたので、デューヴァンニは我れ知らず目を反けた。

「君は誤つてゐる、デューヴァンニ」と間を置いてから、彼は言葉を繼いだ。「此の畫は未完で、基督は未だゐらないのだ。」

「さ、それがゐるやうになるかね？ 君は然う思ふのかい？ まあ宜いから試めして見てゐるやう。それは兎も角、君は僕の言葉に注意して呉れ給へ。僕は、先生は決して最後の聖餐を完成しない、猶太も基督も決して描きはしないと云ふのだ！ 何故つて君、考へて見給へ、科學の事なら數學と實驗とでいろ／＼の事が出來ようさ、併しそれで何もかも出來るわけのものではない。それ以上更に必要なものがあるのだ。あの學識を備へてゐる先生を以てしても到底通過する事の出來ない或る境目があるのだから。」

兩人は僧院を出て王城なるボルタ・デューヴァア城の方へと進んだ。ボルトラフィオは長い沈黙の後に斯う言つた——

「デューヴァンニ、此の一點は確に君の誤りだ。猶太は最う出來てゐる。私は見て知つてゐる。」

「何時？ 何處で？」

「唯つた今——僧院でさ。先生は其の下圖を私に見せて下さつた。」

「君が？」

デューヴァンニは凝と見守つてから、努めて言ふやうに遅い語調で、「何んな風だつた？ 善い？」

チオーヴァンニは點頭いて見せた。それ以來チエサレは沈黙を守つた。

八

兩人は宮城の門に達して吊橋を渡つた。此の橋はフィラレテ塔に通ずるもので、塔は南の方に向つて深い濠を周してあつた。此處は晝尙ほ暗く、加ふるに兵營から發する名狀しがたい匂——例令は厩舎、藥、饅えたパンなどの香が空氣の中に混じてゐた。響き渡る拱廊の下からは外國の傭兵の笑ひ罵る聲が反響して來た。

チエサレは通行券を持つて居たが、チオーヴァンニは疑念の目を以て見られて守衛簿に其の名を記された。二の橋で再び取調べを受けてから、橋を渡つて武器の廣場でふ名のある城内の荒れた内庭に達した。正面にあるのは峻し氣なボナ塔で、右の方には君公の御殿の車寄、左には捲糸の竿と呼ばれて居る處があつて、これは正しく鷲の巢のやうな處で、城内でも一番行くに困難な部分である。廣場の中央を圍める粗雑な木の垣には早や苔が生えて風雨に曝された跡が見えるが、其處に聳えてゐるのは、緑色の膏土で作つて未だ完成になつてゐない馬上の巨像、即ち伴の騎士で、高さ二十ブラッチオを下らず、レオナルド・ダ・ヴィンチの思ひ切つた仕事であつた。巨大なる馬は後脚で立つて、水氣ある大空と對して黒く見え、傷いて倒れた一人の武士が蹄の下になつてゐる。そして馬上の人は即ち大首魁のフランチエスコ・スフォルツァで、彼は半分は兵士、半分は強盜、これを引つ括めていへばヤマ師であり、己れの劍と己れの血とを他人に提供して以て金錢を得る底の人物であつた。素と一農民の子で、強きこと獅子の如く、狡黠なること狐の如く、伶俐と罪惡と大手柄とによつて權勢の絶頂に到達して、臨終の息

はミランの君公といふ玉座の上で引き取つたのであつた。青白い日光は此の巨像の上に一杯に落ちて、莫迦に大きい其の二重顎と、勢ひ猛に見張つた食りの目とに於いて、チオーヴァンニは飽食したる野獸の平靜を見たのである。レオナルドは志銘として次の雙聯を像に刻んだ。

諸人の待ち設けたる大作成る。

銅は型に入り、聲は叫ぶ、曰く、此の神を見よ。

最後の「此の神を見よ」てふ二語はチオーヴァンニを驚かした。

「神だつて？と彼は言ひながら、巨像を眺め、又猛き勝利者に蹂躪されてゐる犠牲を眺めた。そしてサンタ・マリヤ・デルレ・グラチエの僧院の靜寂たる食堂や、シオンの岡や、聖約翰の天童のやうな美しさや、最後の聖餐の静けさや、並びに「此の神を見よ」と言はれて居る基督を思ひ出した。

と、丁度此の時レオナルドの姿が現れた。

「さ、急がう。何うやら庖厨の烟突が烟を出してゐるらしい。今の間に早く逃げないと私は又呼び戻されて直しを頼まれるから。」

チオーヴァンニはこれに答へ得なかつた。俯首いた儘立つたが、其の顔は青白い。

そして程なく「先生」と言つた。「失禮ではございますが先生にお尋ねしたい事があるのです。ずつと以前から考へてゐまして未だに了解できないのですが、何故先生は騎士と最後の聖餐の製作とを同時に著手なされたのでせうか？」

レオナルドは驚きながらも靜かに弟子を見守つた。

『何故了解できないか知ら？』

『お、レオナルド先生！先生はあの二つを同時にやるのは不可能だとお感じになりませんか？』

『然うは感じない、チョーヴァンニ。私の考へではあの兩作は互に補益するものだと思ふ。最後の聖餐に對する私の最も善い概念は、巨像を製作してゐる時に生じたのだし、それに私は彼處のあの僧院の食堂にゐる時でも、此のフランチェスコ公の記念像の事を好んで考へる。詰り此の二つの仕事は雙見だね。同時に始まつたから矢張り同時に仕上がるであらう。』

『同時に！基督と此の人とがですか？それは不可能です！』

そして自分の考へを何う表白して好いか分らぬながらも心に火が附いてゐるやうに感じて、再び『それは不可能です！』と烈しく繰り返した。

『では何故ですか？』と靜かな微笑を含んで先生は訊ねた。

チョーヴァンニは其の返答をしたかつたが、平靜な、不可解な先生の目に逢つたため、語は唇の上で消えてしまつた。多分レオナルドは其の消えた言葉の意味を了解しまいと思つたからであつた。それで、少年は黙して只考へた。

『實に不思議だ！一時間前にあの畫を見た時、自分は先生が了解されたと思つたのに、今は又全然分らなくなつた。一體先生は心の中で雙見の孰れに就て（此の神を見よ）と言つてゐらつしやるのだらう？』

九

其の夜、人は皆眠つてゐるのに、チョーヴァンニは不眠症に苦められる餘り、起き上つて庭の葡萄の枝の天幕のやうになつて居る其下にある石の腰掛けのある處へ行つた。庭は方形で、中央に井戸があり、その石の腰掛けの後ろは直ぐ家の壁になつて厩舎と向ひ合ひ、左手の石垣にはヴェルチェリナ門のある街路に通ずる耳門が設けてあり、右手に見えるのは小園の壁で、それには一枚の戸があつて毎時も錠が降りてゐる。其の戸を潜ると離れ屋があつて、其處の出入は獨りアストロに許されてゐるだけ、レオナルドは此の離れ家に閉ぢ籠もつて製作する習慣であつた。

夜は靜かに暖かく、濃霧四邊を罩めて、月光は臙に其の中を貫いてゐる。不圖此の時、往來に出る門を叩く音が低く響いた。と、下の窓の錠戸が開いて顔を出して尋ねた男がある。

『カッサンドラさん？』

『え、私。明けて下さい！』

家から出て来たのはアストロで、女を門の中へ入れた。女の白衣は月光と露とのため異しく綠色に變つてゐる。兩人は門の處で何か談し合つてから、チョーヴァンニの居るとも知らず其の傍を過ぎて行つた。蓋しチョーヴァンニは葡萄の枝の深い陰の中に坐つてゐるのである。

女は井戸の低い垣の上に腰を下ろした。其の顔の奇妙なこと、彼の古代の彫像に見る顔のやうに沈着き切つて

動的な所がない。額は平、眉は濃い一文字、髯は並外れて小さく、目は澄んだ琥珀のやう。併し就中ジョーヴァンニが驚いたのはその髪の毛で、色がうすくて柔かく、縮れてゐる具合は、宛らそれに生命が宿つてゐるかと思はれた。そしてメヅサの蛇髪じやがみのやうに、其の漆黒は女の顔を粹まに入れたやうに見せ、その白い處は愈々白くし、唇は益々朱くし、琥珀の目には一段の清明を加へてゐる。

『ではアストロ様、あなたも坊様のアンヂェロの話をお聞きになりましたか？』と娘は言つた。

『聞きました。法王はあの人を派遣して異宗や魔法を剿絶させるとのこと。あなたに糺問の僧達に關する話をすると屹度身の毛が戦つてせう！ 併し神様は彼等の爪牙に掛らないやうに私を守つて下さいませう！ カッサンドラさん、用心なさい、取り分けあなたの叔母様に氣を付けないと可けません。』

『でもあの方は私の好い叔母様です！』

『そんな事は何でも好い。それからあなたと一つにゐるシドニアさんに用心してゐなくちや。』

『では鍛冶屋さん、あなたは私達を魔法使の女と思つてゐなされるの？』

『そんな事は決して、兼々レオナルド先生から、魔術なんかあるものぢやない、自然の法則から云つてもそんな物のある譯がないと教へられてゐます。あのレオナルドといふ方はありとあらゆる事を心得てゐられますが、何一つ信じはなさいません。』

『何一つ信じはなさらぬ？ では悪魔も？ 神様も？』

『冗談ぢやない！ レオナルド先生は聖徒ですよ。』

『ではあなたの飛行機は？ あれは最う出来ましたか？』と女は輕蔑の語調で言つた。

『鍛工は失望的に手を振つた。』

『出来ましたか？ そこそ所が最う一度すつかり拵へ直すのです！』

『アストロ様！ アストロ様！ あなたはあんな謙けた物を未だ本統だと思つてゐらつしやるの？ あんな機械は目の中へ這入る塵でございませよ。レオナルド先生はこれまで數回飛行なさいましたよ。屹度然うですよ。』

『飛びなされた？ 何うして？』

『飛びなさいませよ——丁度私のやうにね。』

男は熟々女を見守つた。

『あなたの飛行は夢の中でせう、カッサンドラさん。』

『あなたは然う取り取りますか？ 然うぢやございませぬ、私の飛んだのを見た人が幾人もございませぬ。多分あなたは未だ彼の話を御承知ないのでせう？』

鍛工は躊躇の氣味で頭を掻いた。

『併し私は飛ぶのを忘れませんでした』と女は嘲り氣味、『此處の御方は皆んな學者揃ひ、奇蹟を信じないで機械を信じなされるのだから。』

『然ういへば機械の畜生！ 彼奴あ私の首枷だ。眞實にあなたが知つて下されば……』と歎願するやうに兩手を擴げて、『カッサンドラさん、あなたは私の誠意を知つてゐらつしやる。それにアンヂェロ師の耳に這入つては好

くないのだから、うつかり他にも洩らす様な事はありません。だから極く内證で私に請して下さいませんか、私を可哀さうだと思つて詳しく話して下さいませんか。』

『何のお話をするのです？』

『何うしてあなたが飛ぶのか——』

『それは可けません、あなた、それは可けません。餘り能く分り過ぎると直ぐに年をお取んなさるから。』
そして間を置いて、長い間男の目の中を凝と見詰めてから優しく言つた。

『唯話だけでは何の効がありますか？ 實行なさらなければいけません。』

『飛ぶのに必要な物は何ですか？』とアストロは音調を震はせ青くなつた。

『或る言葉が要ります。それから肌へ或る膏藥を塗らなければなりません。』

『其の膏藥は爰に持つてゐますか？』

『持つてゐます。』

『それから其の言葉を知つてゐる？』

女は點頭いた。

『そして誰でも飛べますか？』

『ま、試めて御覽なさい。あなたの機械よりか私の方が簡易なことが分りませうから。』
鍛工の獨眼は熱望の狂氣を以て燃えた。

『カッサンドラさん、其の膏藥を私に下さい。』

女は笑ひを嚙み殺した。

『あなた馬鹿ね、アストロ様。五分前に魔術を馬鹿呼ばりした辭に、今では最うそれを信じてゐらつしやるやうだ。』

アストロは成程と思つて首を傾けたが、併し自分の請求を悔いはしなかつた。

『私は飛びたいのだ。機械だつて奇蹟だつて構ふもんか、飛べさへすれば好いのだ。唯待つことだけは最うも
う堪へ切れない。』

娘はアストロの肩に手を掛けた。

『分りました、分りました。本統にあなたは可哀相です。飛べなければあなたの腦が破裂するに決まつてゐます。では宜しい、藥を差上げて言葉を教へませう。教へませうが併しアストロ様、あなたも私の頼む事をして呉れなければ可けません。』

『それはしますとも、カッサンドラさん。何でもしますから言つて御覽なさい。』

娘は園の垣の中にある濡れた屋根を指した。

『私を彼處へ入れて下さい。』

アストロは眉を蹙めて首を振つた。

『其奴あ可けない。其の他の頼みなら何でもしますが。』

「何故それが可けないのです？」

「誰も中へ入れないやうに先生と約束してありますから。」

「だつてあなたは這入るぢやありませんか？」

「それは然うですが。」

「何があります、彼處の中に？」

「不思議な物は何もありません、カッサンドラさん。別に大切な物もないのです。あるのは機械類に器具類に書物や書き物。それから若干の奇観植物や動物、爬虫類もありますが、これは皆んな遠い地方から旅行家が持つて来て呉れたのです。それから毒の木が一本あります。」

「え？ あの毒の木でございますか？」

「然うです。先生が試験用に持つてゐらつしやるのです。毒の植物に於ける効果を見るために。」

「アストロ様、頼むからその木に就て知つて居る丈の事を話して下さい。」

「別に御話するほどの事もありません。先生は初春になると、其の幹へもつて行つて髓に達する位の孔を明けて、細長い針で少しばかり毒をおさしになります。」

「まあ稀代な試験ね！ そして其の木は何の木でございますの？」

「桃の木です。」

「そしてそれから何うなります？ 矢張り果實にも毒がございますか？」

「然うだらうと思ひます、熱すればね。」

「で、あなたは其の桃の實に毒のあることが御覽になつた計りで御解りになりますか？」

「それは解りません。それだから先生は人をお入れにならないのです、知らずに桃を食つて命を捐てちや大變ですからつてね。」

「あなた鍵をお持ち？」

「持つてゐます。」

「アストロ様、其の鍵をどうか私に下さいまし！」

「カッサンドラさん！ 先生に私は誓つたのぢやありませんか？」

「ね、其の鍵を下さいましな、今夜の中にあなたが飛べるやうにして上げますから——ね、今夜の中にね。さ、これが今言ひました薬なのです。」

女は重い液体の入れてある壺を取り出して、自分の顔を男の顔に摺り寄せ、巧みに取り込むやうに啾いた。

「あなた何をそんなに恐がつてゐらつしやるの、お馬鹿さんネ。彼處に不思議な物も何もないと言つたぢやありませんか。二人で行つて確かませうよ。鍵をさ、アストロ様、鍵を！」

「可けない！ あなたを入れはしません。其の秘密なんかも聞きたかありません。お歸んなさい。」

「此の臆病者が！」と女は顔にこまやかな侮蔑を見せて叫んだ。「秘密を知る事が出来るのに聞かないつて——これで能つく分りました。レオナルドは魔法使です。子供を騙すやうにあなたを騙してゐるのだ！」

併し此の侮蔑も男を動かすに足らなかつた。アストロは首を後ろの方へ向けて、不機嫌らしく女の言葉を聞いてゐる。カッサンドラは再び側に寄つて、

「ぢや宜うござんす、アストロ様。それでは左様として私は中へは這入りますまい。中へ這入りませんから唯戸を少し明けて私に覗かして下さい……」

「ぢや這入らない？」

「え、這入りません、戸を明けて一寸覗かして貰ふだけで好いのです。」

と聞いてアストロは鍵を取り出して戸の錠を外した。

デョーヴァンニは密つと身を起して近く寄つた。垣を周らした小園のすつと向ふの端に普通の桃の木のあるのが見える。緑色の月光の朧に霞む下で、木は氣味悪く不祥な物のやうに思はれた。

娘は戸口に立つて熱心な好奇の目を大きく開いて、周囲を見廻してゐるうち、足を一歩前に踏み出した。鍛工は慌て、引き戻した。併し女は身を交して蛇のやうにするりと男の両手を抜けた。男は再び女を押し出して殆く

轉ばしやうにした。女は直ぐ立ち直つて男の目を凝と見詰めた。其の青白い、鉛色をして、憤怒のため間の縮まつた顔は實に凄かつた。其の瞬間、女は誠に巫女のやうであつた。

鍛工は礎と戸を締めて、一語をも發せず家の方へ戻つた。女は金色の目をして男の後に跟いて來たが、直ぐ様そゝくさとデョーヴァンニの傍を過ぎて、例の耳門からヴニルチエルリナ門の往來へと抜けた。

園は再び森々として霧は益々濃くなつた。物皆は霧の中に消失した。

一人になつたデョーヴァンニは苦し氣に目を瞑ると、彼の恐ろしい木が幻影のやうに眼中に浮かんだ。其の打ち濕つた葉、其の毒ある果實の上に宿る重い露は青白く輝いて見える。彼は行くりなく次ぎの辭句を思つた。

「園の各種の樹の實は汝意のまゝに食ふことを得然れど善惡を知るの樹は汝その果を食ふべからず汝之を食ふ日には必ず死ぬべければなり。」

三の卷 毒ある果實 一四九四年

蛇婦に言ひけるは汝等必ず死ぬる事あらじ神汝等が之を食ふ日には汝等の目開け汝等神の如くなりて善悪を知るに至るを知りたまふなりと——創世記第三章第四、第五節。
若木の心に孔を明けて、これに砒素と試薬と酒精で稀薄にしたる猛毒とを注入すれば毒は其の果實に迄及ぶのである——レオナルド・ダ・ヴィンチ。

一

公妃ベアトリチエは金曜日毎に髪を洗つて金を塗り、塗つた後を天日で乾かすことに決めてゐた。そして乾燥に利便ならしめるがため、スフォルツェスカの宏麗な別殿の屋根に欄干付きの臺を建てさせた。此の君公の別殿はチチノ河の右岸に聳えて、ヴィチヴァノ城に近く、ロメルリナ州の肥沃な畑地と、四季の眺め緑なる水邊の牧場との間にあつた。公妃は此處に坐して烈しい暑さに氣根よく耐へるのであるが、これをする時刻には農夫や犁牛さへ日蔭を選んで其の中に潜む習ひの時であつた。公妃はスキアヴィネッタと云つて袖のない寛やかな白絹の襦袢やうのものを着て、薬製の日避け即ち帽子を頭上に戴き、其の先端の開いてゐる所からは金を捺して廣やかに漣立つ髪が流れるやうに食み出でゐた。そして肌の橄欖色せるチルカシアの侍女は紡ぎ棒の先端に附けてある海綿

で公妃の髪を濡してゐるし、藪脱みで、剩へ偏儀の鞆紐女は象牙の櫛で髪を梳いてゐた。
髪染料は五月の候を選んで調製されるもので、胡桃の根、洎美蘭、牛膽、燕が作る石灰分、龍涎香、熊の爪、蜥蜴の脂の合劑であつた。公妃の直ぐ傍にあつて公妃自身で其の加減を見ているのは麝香、薔薇と高價な諸香料との煎劑で、それは目に見えぬ程の焔に當つて、三徳の上に懸けてある長い頸の蒸溜器の中で沸々と激つてゐる。
兩侍女とも全身汗浸しになつてゐるし、公妃の狎さへ此の燃えるやうな高臺の上で、不安氣に喘ぎながら舌をダラリと垂れ、主人を怨するやうに眺めて、毎時のやうに猿の挑戯に應じようともしない。猿と、それに珠玉を鑲めた眞珠母の鏡を持ち支へてゐる黒人の侍童だけは、却て此の暑さに得意然としてゐるらしい。
公妃ベアトリチエは己が自分の位の嚴なるに相應しくしようとして、極端に容貌と動作とを作つてゐるけれど、これが三年前に入内して、今は二人の子持となつてゐる當年十九歳の女とは受け取り難くかつた。其の黒味を帯びた頬の少女に見るやうな丸味、小兒らしい鬢、細そりとした喉、ダブ／＼した唇——そして唇を屹と固く塞いでゐる様子は、始終然うしてゐないと動もすれば矢り勝ちになるを氣遣ふかのやう、それから瘦せぎすな肩と平らな胸、兎もすれば小童のやうな荒々しい舉動——凡そこれらのものに徴して見ると此の婦人は未だ學校通ひの少女のやうで、氣隨氣儘、落着のない、自分勝手な點さへあつた。とは云ふもの、確固たる黒い目からは細心と恰憫とが輝いてゐて、ヴェニスより此處に駐割せる使臣で、兼て最も狡智ある政治家たるアリノ・サストは、政府に秘信を發して、『此の婦人は燧石の如く頑固にして、夫イル・モロ公に比し本官を手古指らす事遙に大なり。公は一に妃に柔順にして以て賢明を致し居れり』と書き送つた程であつた。

此の時神は腹立たしく吠え出した。見ると此の臺に通ずる螺旋狀の梯子を登つて来る一人の老婆がある。寡婦の服装をして、片手には撞木杖、片手には珠數を持つてゐるが、若し夫れ皺の寄つた口を強ひて偽善らしく笑はせず、又目の輝きに恐ろしい狡猾が見えなければ、其の顔の皺に奪い面影がちら／＼する筈であつた。

「やれ、やれ！ 年を取るの何とした厭やなものでござりませう！ 私、此所へ來ることが六づかしい程でございました。神様には何卒お妃様の若さと健康を保存遊ばすやうに」と、襦袢の縁に接吻しつゝ、件の老婆は言つた。

「お、シドニアか。彼れは出來ましたか？」

老婆は用心堅固に上包みして、腕と栓のしてある瓶を取り出した。瓶の中のは白く濁つた液で、赤山羊と驢馬との乳の中に野茴香、獨活、及び白百合を入れて、それをらんびきに掛けた物であつた。

「成るべくならば今二日ばかり馬の上等な敷薬の中に入れて置いて下さいませ。但し御入用でありますれば直ぐにも御使用になりました宜しうござりますが、其の代り先づ濾道具でお濾になりましたから、餘えたパンの切れに薬をお濕しなされて、彼の三信條を御誦讀に相成る時間だけ、お顔をお擦りなされませ。しますると五週間の後にお色の黒いのは消えまして、吹出物も亡くなつてしまふのでござりまする。』

「あ、一寸シドニア。彼の魔法に用ゐる厭な物が幾らか此の薬の中に這入つてゐるらしいが——蛇の脂とか、千鳥の血とか、フライ盤であけた蜥蜴の粉とか、何時か私の頬の黒子に生えてゐた毛を枯らすため持つて來た膏薬の中にあつたあんな種類の物が這入つてゐるらしいが。それに相違なければ此處で直ぐ然うと明してお呉れ。』

「ま、お妃様としたことが。悪人の讒言にお耳を假されぬやうに願ひ上げます。此の婆は良心の命するが儘、極く正直に致しましたのでござります。とは申せ、時と場合によりましては汚物の入用なこともないではござりませぬ。例へばあの御立派なアンチエリカ様は髪は髪、抜毛を防ぐため昨年一杯犬の小用でお頭をお洗ひになりました。そして首尾好く抜毛が止まつたと神様と私にお禮を申された程で——」と言つてから、公妃の耳際を身を寄せて、最近の噂話を語つた。それは鹽組合の長の未だ若い愛くるしい妻フィリベルタが夫を欺いて西班牙の騎士と通じ、放埒を極めてゐるとの事であつた。

「ベアトリチエは戯れに指で嚇すやうにして、『そして可愛さうにそんな事をさせたのは的きり此處にゐる女衞婆らしい！』

「これはしたりお妃様にはあの婦人を可愛さうと仰有りますか？ どう致してそれどころか歌でも唄ふやうに始終私に禮を言つて居ります。此の頃では夫の接吻と情人の接吻との差異が分るやうになりました。』

「が、併しそれにしてもその罪はさ？ 良心に身を咬まればせぬかえ？」

「へ、良心？ お妃様、此の婆は戀の罪をば大自然の作用と見てをります。聖いお水をタラ／＼と數滴注げますれば不義の罪はそれで洗ひ落されませう。角と飛車との取りかへこ、五分五分でござりますはい。』

「では其方の考へでは其夫とやらも矢張り……」

「さ、腕と然うとは申し上げられませぬが——併しお妃様、女房持ちの男は誰でも皆んな同じ事ばかり言つて居ります。一本の腕をなくしても一人の女房丈けでは承知が出來かねるのでござりまする。』

公妃はからくと笑つた。「まあシドニア、其方を負かすのは仲々難しいこと！一體然ういふ事を何處で聞き出しました？」

「年寄りの言葉は信實と思召されませ。婆の申し上げる事は御經のやうに本統でござりまするぞ。良心の事ならば梁のやうに大きな物と微塵のやうに小さな物との間にあるやうな相違を憚りながら婆は知つてをりまする。時節到来しますれば果物は皆熟します。女は若い間に能く戀をして置きませぬと年を取りましてから強う戀を望むやうになりました、慈地に惡魔の爪牙にかゝるのでござりまする。」

「其方の話口は神學博士見たやうな。」

「何う仕りました、婆は無學者でござりまする。ぢやが婆の言葉は皆んな心底から出まする。何とお妃様 吳も申し上げて置きますが、若い時は一生に唯つた一度しか來ませぬぞ。御同様な身柄、やがて年を取りますれば——ま、御免遊ばせ——女が何の役に立ちませう。大方、火鉢に炭を繼いだり、臺所の鍋釜を數へるのが落ちでござりませう。諺にも（若い女は食ひ年寄りの女は嘸む）イタリヤ語の嘸むは侮辱をもおとなく忍ぶといふ意と同文字なれば此の諺がある）とありますのが何よりの實證、如何に美しくても戀がありませんねば、朝のお禱にあの（天に在ます我儕の父よ……）を誦せぬと同じ事でござりませう。」

「何を言ふのやら、最う一度言つて御覽！」と公妃は笑つた。

すつかり茶化してしまつたと見て取つた老婆は再び耳元に身を寄せて、何事か知ら囁いた。ベアトリチェの笑ひは止んで、顔に見るく曇りが來た。そして伊太利語を知らぬ黒人だけを殘して侍女二人を退かせた。周圍は

靜寂として熾熱せる空があるだけ。空は激しい暑氣の下に青ざめたやうに見える。

「馬鹿々々しい！ そんな噂なら何も氣にかけるほどな事でもないのに」と公妃が答へた。

「お妃様、婆は此の目で見ましたし、又此の耳で聞いたのでござりまする。他の人達も矢張り斯うした事を申し上げるでござりませう。」

「大勢の人がゐるて？」

「一萬人でござりまする。バヴィア城の前の廣場は人で埋まりました。」

「して、其方が聞いた事は？」

「イサベルが彼の小つちやなフランチェスコを抱いて出て來た時は、手を拍つ、帽子を振る——涙を流した者も多勢ござりました。アラゴンのイサベル様萬歳！ チアン・ガレアツォ様萬歳！ 真正統の君たる皇太子萬歳！ と斯う叫ぶのでござりまする。それから、君位の僭奪者は殺してしまへとも叫びました。」

ベアトリチェは眉を蹙めた。「實際そんな事を言つたの？」

「左様でござりまする。最つと非道い事を言ひました。」

「言つてお了ひ——何も氣遣ひをするには及びません。」

「斯やうに申しました……何うもお妃様、私の舌は仲々言はうとは致しませぬが……ま、斯んな事を奴鳴りしました。泥棒死んぢまへつて！」

ベアトリチェは身を顫はしたが、強ひて己れを制して平氣で尋ねた。「未だ何か言はなかつたかえ？」

『ま本統に、お妃様に何と申し上げて好いやら私には分りませぬ。』

『さ、さ、早く。何も彼も聞きたいから。』
『斯うでございます、お妃様。デアン・ガレアツツオに取つては保護者であらせられ又恩人であらせられます我が君ルドヴィコ・イル・モロ様は、甥をバヴァア城に押し籠め、刺客、密偵で押つ取り巻かしてあると申しました。そして皆でガレアツツオ公の出御を強みましたが、イサベルラが公には御不例であるからと答へたのでござります。』

と言ひ終つて、シドニアは再び公妃の耳に囁いた。

『婆、其方は亂心してゐる』と公妃が叫んだ。『用心せぬと此の屋根から突き落して、其方の骨を烏でさへ拾ひ集められないやうにしてやるから。』

此の威嚇もシドニアを恐れしめなかつた。がベアトリチエの方でも直ぐに氣を鎮めた。

『其方の言ふ事は一つも信じられぬぞ』と公妃は密かに老婆を見ながら言つた。

『それは御勝手に』と相手は瘦せた肩を聳やかして、『ではござりまするが、私の言分の正しい事を妨げるものはござりませぬ。まあ御覽じろ』と唆かすやうに言葉をついで、『蠟の小人形をお拵へになつて、右の脇腹に燕の心臓を入れ、左の脇腹に其の肝臓を入れまして、呪文を唱へながら針を人形に通しになりますと、あの人は段々死ぬやうになるのでござります、そしてこれを助ける醫者とてもござりませぬ。』

『お黙りッ』と公妃は命じた。

と、悪婆は襦袢の縁に恭しく二度目の接吻をして、『お妃様は私の太陽であるらしやりまする。斯うして餘りにお慕ひ奉るのが何より悪い私の過失でござります』と言つてから、暫く間を置いて一寸附加した。『尤も魔法でなくともそれは出来るのでござりまするが。』

公妃は黙つた儘、何か聞きた氣に老婆を見てゐる。

シドニアは更に、『唯今御苑の傍を過ぎました時、園丁が見事に熟した桃を振いで籠に入れてをりましたが、定めしデアン・ガレアツツオ様への贈物であらうと見當を付けました』と言つて口を噤んで、又言ひ續けた。『フロレンスの人でレオナルド・ダ・ヴィンチと申しまする者の園にも矢張り見事に熟した桃がござります。が、それには毒があり。』

『え、毒が？』

『左様でござります。姪のカッサンドラが見まして……』と又々囁いた。

其の返答を公妃は何とも與へなかつた。髪が最早や乾き上つたので、立つて襦袢を脱ぎ捨て、衣裳部屋に降りて行つた。衣裳部屋には大長持が三つあつた。一番目の長持の大きさは寺院の聖器收納所にあるやうな物と等しく、當のミラン公に嫁して以來三年間に調へた八十四枚の衣類が中に入れてあつて、其の或る物は黄金と寶石とで鹹張つてゐるため疊の上に棒立ちになるし、又中には蜘蛛の網のやうに透き徹つて軽い物もあつた。二番目の長持には乗馬服と鷹狩に用ゐる器具の類、三番目には香料、液體、化粧水、膏藥、それに白珊瑚と小眞珠との齒に使用する歯みがき、無数の瓶類、精溜濾過器、らんびき、坩堝——これは取りも直さず婦人練金術の缺くる處なき

實驗器具、及び畫と刺繡もて蔽はれた高價な杉箱を幾つか入れてあつた。其の箱の一つから侍女は純白の襦袢を一枚取り出した。刺賢埤爾や、東洋の菖蒲や、ダマスカスの乾した薔薇の香氣が部屋中に漂つてゐる。

ベアトリチエは着物を着けながら、自分の妹でマンツア侯妃たるイサベルラ・デステがつい今し方飛脚で送り届けて呉れた新衣の折目、皺などを直すやうに言つた。此の姉妹達は兼て各自派手を競つてゐるのでベアトリチエの如きは宮廷の密偵に金を與へて、マンツア宮中の衣裳室にある珍奇な種類を残らず自分に密告させたのである。

やがて公妃は氣に入りの着物を着用した。それは金色の縞珍と緑色の天鵞絨で筋を取つてあるもので、自分の背丈を大きく見せる着物であつた。覗き模様のある袖は鼠色の絹紐で括つてあり、佛蘭西風に開口がついて居て、下着の白い膨らみが其處から顔を出してゐる。組んだ髪は金の網と綺麗な金の紐との間に納まつて、ルビーの蠟で留めてあつた。

一一

公妃は朝の化粧に長時間を費すのが習はしとなつてゐるので、公は其の化粧の間に予は印度行き商船を艤装することが出来ようと言つた程であつた。然かも今朝は彼方に聞ゆる角笛の音と獵犬の吠聲とを耳にしたので、公妃は兼て出獵を命じて置いた事を思ひ出して、従つて化粧を急いだ。そして着物を附けてから通りすがりに矮人のゐる室を訪れたが、これはイサベルラ・デステが宮中の遊戯室と命名したのに模して「大男部屋」てふ名の

ある室で、此處に備へ付けてある椅子の如き、寢牀の如き、家具や梯子、又玩具のやうな神壇のある寺院の如き、凡て侏儒即ち矮人に適するやうに作られてあつて、右の寺院といふのは、侏儒中の物知りなるヤナキといふのが大僧正の衣と帽子とを附けて、日々これに向つて讀經するのであつた。此の「大男」共は常に騒々しく、笑聲、泣聲を初めとして、各種各様の奇怪な聲が、個倭や、猿や、鸚鵡や、馬鹿や、韃靼人や、道化師や、其の他の常並ならぬ者共から發するのである。年少の公妃は時偶これらの者を相手にして一日中遊び暮らす事もあるが、今は唯、近頃ヴェニスから送られて來たナンニノといふ小黒奴の身體の様子を見るためにのみ一寸立ち寄つた。そして此の黒人の皮膚はそれはく黒いので、これを抱へてゐた前の女主人の言によれば、「これ程見事なる者は到底望まれ間敷候」とあつたのと、病氣に罹つてからはそれが然うでなくなつて、漆のやうに黒く光つてゐた皮膚は追々に剥けて白くなるので、ベアトリチエは痛く心を悩ましながらも、これに目を掛けてゐたのであるが、今や瀕死の重態にあることを聞いて非常に悲んで、至急基督教の洗禮を施すやうに命じた。

そして階段を降らうとすると氣に入りの道化女モルガンチナに逢つた。未だ年少く、加ふるに美人で、其の可笑し味のあることは「死人をすら起つて笑はしむる」底の女で、自分の盗んだ品物をば、鵲の如く巧妙に匿しはするが、深切な言葉を掛けてやれば直ちに罪を白状に及ぶといふ、誠に小兒のやうに素直な罪のない者であつた。それにも拘らず時々氣鬱症に襲はれて、未だ曾て生んだ事もない自分の倅が果敢なくなつたと言つて號泣するのである。今も丁度それで、階段に坐つて膝小僧を抱いて懊惱して噎んでゐるので、ベアトリチエは頭を撫で、やつて、「お廢し、これさ、お廢し。大人しくしてゐるのですよ」と制した。

すると道化女は涙のはふり落つる子供染みた青い目を舉げて、『まあ！ まあ！ まあ！ 皆んなで私の赤らやんを浚つて行きました！ お、神様、何故でございます？ 赤らやんは何んな悪事を致しました？』と喚く。公妃はそれから何も言はずに其の儘庭へ降りて行つた。庭には獵の人達が自分を待つてゐたのである。

三

馬車の先乗者や、鷹匠や、勢子や、主馬や、扈從や官女に取り巻かれて、ベアトリチエは熟練なる騎手のやうに濃い栗毛のすらりとした姿勢のよい亞刺比亞馬に騎つた——これはゴンヅガの厩から出た逸物であつた。妃の出立を見るため宮殿の垣根道から出て來たミラン公は此の體を見て、『まこと彼のアマゾン女族の女王其の儘だわい』と誇りに思つた。

公妃に續く馬上の人は金の刺繡あるけばくしい服を着た鷹匠であつた。鷹匠の左の手に止まつてゐるのは土耳古王から寄贈されたサイブラス産の白きこと雪の如き鷹で、頭に載せてゐる金色の頭巾は綠玉できらきらと輝いて、爪には小さな鈴が附けてある。

ベアトリチエは上機嫌、微笑を含んで公の顔を見たが、公から『氣を注げないと、其の馬は疳が強いぞ』との注意を受けると其の儘矢庭に馳驅の合圖を一行に與へた。初めは道路に添ひ、後には廣い畑を越え、溝渠、小丘、堀割を飛んで行つた。公妃の供奉の人は皆後れてしまつて、續く者としては一頭の大きな狼犬と、それにカスチリアの牝馬の上のルクレチア・クリヴェルリだけであつた。ルクレチアは公妃の侍女で、數多の同輩中最も快活な、

そして最も勇ましい女で、公は兼てからこれに虚心平氣ではなかつた。で、今や懸想の女と妃のベアトリチエが狂氣でもしたかのやうな速力で相並んで驅け行く姿を見た公は、孰れを孰れと團扇を揚げ難くかつた。それでありながら正しく若い妃に對して正しく深い懸念の情が起つて、深い穴をひらり飛び越えた時などは、思はず目を瞑つて氣息を止めた程であつた。幾度かこんな無鐵砲を吐責しながらも、それを止める氣にもなれなかつた。體質虚弱な公に取つて妃の男々しいのが却て一種の誇りとも見られたのである。

妃の一行は谷合を下つて、チチノ河の低岸にこんもり繁つてゐる絹柳の中に隠れた。其處は鴨、山鶉、狐の數多居る處であつた。

やがて公は宮殿に這入つて書院に戻つた。書院には公の秘書で且つ外國使臣の接待掛たるバルトロメオ・カルコが君命を聽くべく公を待ち受けてゐた。

四

公はやをら背の高い肘懸椅子に腰を下ろしてから、刺つて滑かになつてゐる頬を白い綺麗な手で靜かに撫でた。彼の美はしい顔には往々政治の術策に通曉せる老大家にして、始めて得られる圓滿な正直らしい表情を持つてゐた。筋の通つた鷹鼻と狡猾氣に歪める癖のある唇とは大首魁たる父君フランチェスコを偲ばしめるものがあるが、併し詩人達が言つたやうに、フランチェスコは獅子と狐とを兼ねてゐたに反して、子のルドヴィコは單に狐たるに過ぎなかつた。公の御衣は刺繡のある水淺黄色のふつくりとした絹物で、滑かなる髪は耳と額を繋ぐやう

に蔽ひ、胸には金鎖が下がつてゐる。言語動作共にいつもむらがなく禮に適つて、都びやかな人物であつた。

「リヨンから佛蘭西軍の出發するといふ消息は未だ來ないかな、バルトロメオ？」

「何もござりませぬ。皆の者は夜になれば消息は必ず明日には來ると申しまするし、朝になれば今夜のうちに來るに相違ないと言ひ合つてをりまする。佛蘭西の王陛下は大方武張らぬ戯れ事に耽つてゐるものと見えまする。」

「王の一番の氣に入りは誰か知ら？」

「それは澤山の人の名前が擧がつてをります。王の好みが様々に變ると見えまして。」

「其方ベルヂョイオソ伯に手紙をやつて呉れないか。予は三萬——いや四萬乃至五萬ゾカット位を送るから新に又進物を撒いて呉れ、聊かたりとも吝んではならぬと書くのだ。斯うしてリヨンから金銭の鎖で王を引つ張り出してもしなくては仲々乗り出すまいからな。それからバルトロメオ、これは手紙に書くのではないが、此處に尤物の姿繪を佛蘭西王に贈ると好いな。それは然うと今の手紙は出來てゐるのか？」

「出來てをりまする、陛下。」

「一寸見せて呉れ。」

イル・モロ公は嬉し氣に白い兩手を擦つた。恰も蜘蛛の大網の如き「權謀」を思ひ浮かぶる毎に、彼の心は快さを以て咬り立つやうに感ずるのである。元來彼は危険な輸贏を好愛する性質であつた。彼は又夷狄たる北方蠻族を伊太利に招いた事を過失とは認めなかつた。然うして極端な手段を取つたのは自分ではなく、自分の讐敵等

がこれを行ふべく自分に強ひたからである。就中デアン・ガレアツォの配たるアラゴンのイサベルラの如きは、その隨一で、此の婦人は公が其の甥の君位を篡奪したと稱して居るのである。併しイサベルラの父たるネーブルスのアルフォンソが此の事に參加して、戦争と廢位とを以て公を威嚇するに至つたので、始めてルドヴィコは佛蘭西王シャルル八世に絶つた次第である。

「お、神様、あなたの御業は人智を以て測り知る事は出來ませぬ！」と秘書が紙を重ねてある中から手紙を捜し出してゐる間に公は信心深く考へた。「予の國の伊太利の救濟——否、全歐羅巴の救濟は、彼の大自然から生れた畸形兒、彼の蕩兒、彼の無思慮な小兒——然かも最も基督教徒らしい王と稱せられる彼の佛蘭西王の掌中にあるのだ。光榮ある此のスフォルツァ家の繼嗣も彼の前では踳踳して、腹這ひとなつて、馬鹿氣た事をせねばならない。けれども政略であつて見ればこれも致し方のない話、狼と共に狩する者は狼と共に吠えねばならぬ譯だからな。」

斯んな感慨の後、公は書翰を熟讀した。自分の言つた趣意は遺憾なく出てゐると公は思つた。

「基督教徒たるに最も適はせ給ふ大王よ、願はくは陛下の救濟軍に上帝の冥助あらむ事を。伊太利の諸門は開かれて大王を待てり。我が新ハンニバル、仰ぎ願はくは揚々として來り臨むを躊躇し給ふ勿れ、仰ぎ願はくは上帝の淨油を灌がれ給ひたる聖子よ、伊太利の庶民は鶴首して陛下の温平たる軛の下に恭敬するを待てるなり……」と書翰を此處まで讀んだ時、禿頭の老僮が戸を開けて室内を覗いた。公は莞爾としたが、待てといふ意を容子で示して見せた。すると其の首は引つ込んで戸は靜かに締まつたが、秘書は主君の注意が既に彼の男のために散

じ掛つてゐる事を見て取つて、書翰を収めて室外へ出て行つた。公は用心深く爪先を立て、戸際へ行つて靜かに呼んだ。

「ベルナルド！ これ！ ベルナルド！」

「陛下、某は此處に」と言つて宮廷詩人ベルナルド・ベルリンチオニは神祕な、又卑屈な容子をして歩んで来て、膝を落して公の手に接吻しようとしたが、公はそれを押し止めた。

「好いかな？ 好いかな？」

「へえ、萬事順當に運びまして、陛下。」

「何うぢや、彼女は産褥に就いたか？」

「昨夜重荷の責をお下ろしになりました。」

「ほ、う、無事か？ それとも予の侍醫を遣らねばならぬか？」

「母上様には至極御壯健にござりまする。」

「それは重疊、これも神明のお蔭ぢや！ して産兒は？」

「お子様も至極健かござりまする。」

「男か女か？」

「御男子であらせられました。聲さへお揚げになりました！ 産毛の美しさは母御に似させられますし、又黒目の敏捷なこと、燃えるが如き光あることは陛下に似させられます。いや、誠に君家の御血統たることが

見えまして慶賀至極、立派な小ヘラクレスであらせられます！ 御母上チエチリア様はお氣も狂ふばかりの御喜び、陛下に御思召の名を伺つて呉れと私に仰せられました。

「それは予も考へてはゐたが。ま、カエザルと命名することにしよう。何うだな、此の名前は？」

「誠に御立派な御名でござりまする。口に滑かに昔様の奥床しさ。え、と、チエサレ・スフォルツァ！（カエザルの伊太利名はチエサレ）天晴れ英雄に適はしい御名でござりまする。」

「それからと——夫の方は？」

「ベルガミニ伯の善良と禮節は依然常とは異りませぬ。」

「見上げた男だ！」と公は叫んだ。

「寧ろ陛下の御許しを得まして稀に見る徳人と申しませうか。實際のところ伯の如きお方は當今搜り廻りませねば容易に見付かるまいかと存じまする。御持病の痛風さへ宜しければ今夕の御宴に列して、尊敬を陛下に呈したいとの御説でござりました。」

此の話題に上つてゐるチエチリア伯の夫人といふのは長い間此のルドヴィコ公の寵愛を受けてゐた女であつた。ところがフェルララ公エルコレ・デステの息女ベアトリチエが公に嫁して来てから一人に情交ある事を感じて非

常に嫉妬し、生家に歸ると言つて騒ぎ出した。此の威しは見事に功を奏して、公は爾來大婚の際に誓つた忠實を一層嚴守し、且つチエチリアを婚姻さす事を妃に約した。そして公が白羽の矢を立てた夫といふのは禮節に富める老伯ベルガミニであつた。

ベルリンチオニは衣兜から小さな紙を取り出して公に示した。それは産兒を頌したるソネットであつた――

「御身泣き給ふよ、フエプスの神、此の銀雨は何の故ぞ、
そは蓋し驚動せる天界に今日こそは、

あゝら見よや、第二の太陽の起てるを我れは見たりしが、
此の太陽の光輝の前に我があらゆる光榮は消ゆればなり」

「そは笑ひ話にこそ」

「否とよ、そは苦痛の話なれ、

眞理は賢者の悔りを受けじ」

「さらば更に聞かせかし、我が大驚愕を

其の新王は何處より來りて御世知召すに至りしかを聞かんと欲するなれ」

「ムール人の苗裔たる新王は

美はしきチエチリアの腕に集ひぬ――我れは見たりき、

彼の女の撫愛の翼より彼の光りの輝けるを――

あゝ今こそは我れ西の雲の中に隠れざらめやは、

フエプスよりも大にしてやがて神たるべき者、其の我れに優れる光輝もて我れを蝕するなれば」

公は銀貨一個を詩人に與へた。

「それからベルナルド、此の土曜日はベアトリチエの誕生日だからそれを忘れてはならないぞ。」

と聞いたベルリンチオニは毛の脱ちた宮廷服の褶の間を慌しくさぐり廻した後、凹んでゐる處から皺くちや

な一束の紙を引き出して、所要の詩を記してある紙を抜き取つた。外に未だアンヂェリナの鷹の死の哀悼と、

又バラヴィチの所有の匈牙利から來た斑の牝馬の疾病とを、共に誇張的に詠じた賦が一しよにあつた。

「これに三首ござりまするで、陛下の御選擇を仰ぎたうござります。陛下の御満足あるべきことは、拙者ベガ

サスの聖い足迹によりて誓ひまする。」

當時の君主達は宮廷詩人に樂器の代用をなさしめて、單に愛幸の女のみならず又妃の事をも歌に詠はせた。そ

は蓋し流行として夫婦の間に少くとも至純の愛があるらしく見せ掛ける必要があつたからである。

公は仔細らしく詩に目を通したが、然かも公然二行の詩も綴れはしないのであつたが第一の詩では夫が妻に向

つて、

御身の輕き唾の落つる土にぞ花は咲くなる、

春の露に莖の生まるゝ如く。

と言ふ二行が氣に入つた。

第二の詩はベアトリチエを女神ダイアナに比して、猪や鹿は斯くも美はしき女獵夫の手にかゝつて果てる事をさぞ幸福と感ずるであらうと歌つてあつた。併し公は以上二首よりも第三の詩を満足に思つた。それはダンテの口を假らしめたもので、ダンテはミランの公妃に於いて今一度己が愛人ベアトリチエを見んため神の許しを得て地上に還らん事を祈るのである。

『あはれ大神デヨヴ！』と詩中のダンテ・アリギエリは絶叫する。『神は愛の光りをもて地を歡ばしめんと思召してベアトリチエを再び地に與へ給ひたるにより、願はくは我れをも彼の女と共にあらしめ、又其の夫君にも見えしめ給へ。ベアトリチエこそは夫君の福祥と云ふべけれ。ベアトリチエこそは夫君の生涯を最も誇りあるものとなし且つ歡喜あらしむるなれ。』

此の時イル・モロ公は懇切に詩人の脊を叩いて、冬の外套として一ブラッチオの代價十ソルヂするフロレンス産の赤地の織物を其方にやらうと約束した。併しベルナルドも去る者これにて足れりとはしなかつたが數多たび低頭し平身した結果、狐の皮の裏ある外套を貰ふ約束を得たのであつた。——自分の毛皮は長く着てゐるため毛が抜けて天日に乾く索麪のやうに毛がなくなり透々になつてゐると説明した。

そして、『此の冬、寒さが強う身に應へましたので、家の梯子段ばかりか聖フランシス様の木履をさへ燃やさうとした程でござりました』と言つた。

公は笑つて薪を與へる事をも約束した。と、ベルリンチオニは即座に奉頌の四行詩を賦した。

陛下は臣僚にパンを絞し給ふ時

神の如く天のマナを與へ給ふ、

されば大フェーバスと九人のミューズとは

尊きムールの君なる陛下にホザンナを唄ふなれ。

『ベルナルド、其方の血の循環は今日は餘程好いと見える。今一つ其方の詩が入用だが。』

『戀のでござりまするか？』

『然うだそして熱烈なのをな。』

『お妃様に？』

『ではない。したが決して此の事を口にしてはならんぞ。』

『これはしたり！ それでは陛下此のベルナルドを侮辱遊ばすといふもの。ベルナルドは未だ曾て……』

『それは未だないよ。』

『ベルナルドは魚のやうに無口になつてござりまするぞ』と輕薄らしく又神祕らしく目を瞬いて、『成程、熱烈なので？ 宜しうござります。が、併し如何なる種類のものでござりませうか喜悅を表すのか、或はお口説きの？』

「其の後の方だ。」

と聞いた詩人は鹿爪らしく懸念な容子をして眉を寄せた。

「結婚済みの人でござりまするか？」

「處女だ。」

「宜しうござります。だがお名前が入用でござりまするが。」

「名前などは何うでも宜しいではないか？」

「然うは参りませぬ。名なして戀の口説きは出来ませぬ。」

「ルクレチアだ——何か持ち合はせがないか？」

「あるにはありますが新作の方が餘計お氣に召しませうから、何卒暫らく次ぎの間に控へさして下さるやう、僅か一分が程の仕事でござりまする。早や頭の中には詩がムヅ／＼爬うてるやうな氣がして参りました。」

丁度此の時扈從が、「レオナルド・ダ・ヴィンチ様の参内」と報じた。ベルリンチオニはレオナルドの這入つて来る戸と違つた戸から出て行つた。

五

先づ挨拶が済んでから、公とレオナルドとは新に開鑿すべき堀割の話を始めた。此の堀割といふのはセシア、チチノの兩河を連結するもので、それから網の目のやうに溝渠を通じて、以てロメルリナの牧場や畑地の間に灌

漑の用に供する目的であつた。レオナルドは此の堀割開鑿工事の監督でありながら、公家建築師の稱號を有つてもなかつた。レオナルドは又宮廷畫家の名があるのでもない。單にベルリンチオニの如き宮廷詩人より格の善い「琴の詩人」てふ稱號を帯びてゐるに過ぎなかつた。そして此の稱號を得た所以は、彼が當ミランに移つて來た時、手づから銀の豎琴を馬の首の形に作つてスフォルツァ公に献上したからである。

レオナルドは堀割の設計を説明した後、工事遂行に要する金を更に得たいと公に要求した。

「如何程？」

「一里が五百六ツカットに當りますから、總體で一萬五千百八十七ツカットになります。」

ルドヴィコは思はず顔を蹙めた。唯つた今、佛蘭西の貴族連を買収させるために振り宛てた五萬ツカットの金の事が思ひ出たのであつた。

「それは多過ぎる、全く多過ぎるよ、レオナルド。それでは其方のためには予は破産せねばならない。そんな事は予の出来ない事だ。又そんな巨額の工費は未だ聞いた事もない。何故其方は途徹もない設計をしたのか？ 予は一つブラマンテに相談を掛けて見よう。彼れも斯んな工事の事には熟練してゐるから、其方のやうな工費を掛けずにするかも知れない。」

レオナルドは肩を聳やかした。

「何うなりと御意のまゝに。それではブラマンテにお任せして下さい。」

「いや、そんなにムキにならなくも可い。敢て其方を輕蔑する心で言つたのではないから。」

そして兩人は再び相談を始めた。

遂に公は、『ま、好いさ！ ま、好いさ！』と言つて協約の締結を猶豫しながら、レオナルドの携へてゐる下
圖帳を手を取つて、未完の圖を一枚々々めくつて行つた。それは主として建築乃至は機械に關するものであつた
が、それが爲めレオナルドは稍急ぎ氣味に説明と解説とを與へざるを得なかつた。

其の一枚に巨大な靈廟と築山の圖があつて、山上には柱廊付きの寺院があり、寺院の丸屋根はパンテオンのそ
れのやうに突き立つてゐる。そして其の建築に關する正確なる計算と第一階全部の圖取、並に階段、窓、廊下の
排列等の細分の點が次ぎの頁に詳しく記してあつて、全體で五百名の骨髄を納める豫定になつてゐる。

『これは何だ？ 何時誰のために斯んな設計をしたのか？』

『別に誰のためといふ事はありません。眞の好事でやつたのでございます。』

『奇妙な好事だ！』と公は首を振りながら、自分で注を入れて、『察するところこれは神々か、でなければタイ
タンを葬る墓場だ。宛で夢の都にでもありさうな建物だ。』

其の次ぎの下圖は都會の形で、市街は段々上りになつてゐて、上の方は富人の棲處、下の方は貧民、動物、塵
埃に宛てゝある。此の都會の建設は自然の法則に準じたものではあるが、良心の缺けてゐる人間は、其の上下の
懸隔が餘り明白に平衡を失せるを見て、自ら憤怒の念を發する底のものであつた。

『これは悪くはない！ が其方はこれが實行できると思ふか？』

『無論です』とレオナルドは顔を活々させて言つた。『私は餘程以前から陛下が何處か郊外にこれをお試みに

なるお心になつて下されば好いと希望してゐました。五千の家屋で以て三萬人を收容できる筈ですが、今こそ
彼等は塵埃や病氣の中にうち／＼して疾病の種子を撒いてゐますけれど、此の都會ではきちんと區分けされるの
でございませう。陛下、私の計畫が其の儘行へますれば、恐らく世界切つての最も美麗な市府となる事ではござい
ませう。』

ミラン公は呵々と笑ひ出した。それでレオナルドの熱心は挫かれてしまつた。

『其方は立派に狂氣してゐるぞ、レオナルド。其方の言ふが儘にしてゐれば、予の國は轉つくりかへつて了ふ
だらう。奴隷中の此の上もない柔順な者でも、其方の其の二段市街を怨むに違ひない。其方が誇りにしようとい
ふ其の清潔——樋や水道、詰り世界切つての最も美麗な市府とやらに唾を吐き掛けて、虱だらけな元の古町へ
逃げ歸る事であらう。成程其方の言ふ通り其の古町は些つとばかり垢と病氣はあらうが、斯程まで自尊心を傷け
る物はないからな。え、とそれからこれは？』と公は別の圖を指して言つた。

これは所謂『便利家屋』の繪圖で、隠れ間、隠れ戸、隠れ廊下がある故、來客が同時に幾人あつても互に顔を
合はせないで濟む仕組みであつた。

『成程これは見事だ！ 此の邊の強盜や殺人には弱つてしまふ、此なら萬事順序が立つて安泰に違ひない。直
ぐに其方の設計通りに建てる事にしよう』と微笑して、更に加へて言つた。『見事！ 實に見事だ！ 其方は實
に器用人だから何一つ出来ない物はあるまい。あ、然う、何時か（チオニシウスの耳）の事を讀んだのが今
丁度思ひ出たが、其の耳といふのはシラキユースにある建物の事で、シラキユースの僭主が宮殿の中に入ら

石伐場にある囚人共の話が聞けるといふ處なのだ。何うだらう、其方の手で予の宮殿にも其の(耳)を建てられな
いか知ら？」

王の言葉は吃々として、顔に少し赧らみを帯びたが、直きに普通のやうになつてしまつた。此の藝術家の如き
人物の前では毫も恥ぢ入る要はなかつた。レオナルドは道義の問題を論ずる事なく熱心に思念から得られる音響
の事を論じ立てた。

此のときベルリンチオニが再び姿を現して、ソネットは見事麗はしく出来上りましたと言つたので、レオナ
ルドは公から晚餐の請待をお受けして、さつさとお暇した。

ルドヴィゴは詩人に其の作を読ませた。火蛇は火の中に住むと云ふが、氷の如き純無垢なる氷の如き處女なる
此の婦人の棲家は、情人の熾熱せるハートの中にある——と詩に書いてあつた。

次の結末の四句は恐ろしく可憐だと公は思つた——

憐れなる白鳥よ、我れは消盡したる歳月を歌ふなり、

されど歌は我れの苦痛に慰めを與へはせじ、

愛は笑つて悲哀の骸を打ち、

嘲りて叫ぶなり、「涙もてそを消せ」と。

六

妃の獵より歸り來るまでの待つ間を銷さんとて、ミラン公は後園を散歩することにした。先づ厩舎を覗いたが、
それは希臘の殿堂風の建て方で、圓柱、玄關、並びに二重に明りを取つた窓がある。次いで立派な酪農場で乳餅
と新製の乾酪とを風味してから、無數の糧秣納屋と物置きとを過ぎて、農場と牛部屋に來て見ると、一つとして
自分の心を歡ばさぬ物とてはない。兼てから氣に入つてゐるランゲドック産の牝牛の乳房から出る乳の音、新に
仔を生んだ豚の母らしい唸り、巢立ちせる蜂房から來る蜜の匂、満足氣な微笑は公の黒ずんだ顔に輝いた。まこ
とミラン公の竹の園生は充てる、盃にも喩へらるべきものであつた！ 公は踵を旋して宮殿に這入つて、渡殿の
下に佇んで妃を待つてゐた。最早や夕は迫つてゐるけれど日没までは未だ間がある。チチノの水の浸む牧場から
は草のびり／＼する新鮮な薫が漂うて來る。公は目を徐ろに領地の上に投げた。畑、牧場、畠には網のやうな溝
渠の水が通つて、林檎、梨、桑などが長い列をなして栽培してあるし、葡萄樹の花環が格子形をしてこれらの木
に懸かつてゐる。見渡す限り涯知らぬロンバルチの原——モルタラからアッピアテグラッソまで、又それよりも遙
か地平線にかけて百花燎爛と咲き亂れてゐる様は、宛然神の樂園のやう、それにロサ山の雪が地平線に爬ふ薄光
の中にキラ／＼と輝く様は、此の世の景色とは思はれなかつた。

「神様、あなたに感謝致します」と敬虔なる公は目を天の方に舉げた。

「一切のものを與へ給うたるあなたに感謝致します。此の上あなたにお願いすべき物がございませうか。以

前には何處も皆荒れて荒れて青葉とは見られない一面の野原でありましたが、予とレオナルドとで彼のやうに溝渠を穿ちまして、此處の土地に水を引いたのでございます。今ではあらゆる草葉、あらゆる穀物の穂は、予があなたを祝し奉るやうに、此の予を祝福して呉れます。お、神様！」

此の時獵犬の聲、獵夫の叫びが聞えて、赤い呼返しが葡萄樹の上に掲げられた。呼返しとは鷓鴣の翼を附けた形の定かならぬもので、鷹を空から下りさす用をなすのであつた。公と大膳職とは既に晚餐の準備が整へてあるかを見るため食卓の檢分に行つた。間もなく公妃も這入つて來、續いて賓客もぞろ／＼と這入つて來た。その中にはレオナルドもゐた。食前の祈禱が捧げられてから一同は食卓に着いた。

一の膳にはデノアから速達で取り寄せた朝鮮鮮、イサベルラ・デステから送られたマンツアの池の太い鰻と鯉、それと立派な去勢鶏の胸の肉をチェリーとした物が並べてあつた。フォークの使用は盛儀の場合に限られてゐるので、客は皆指とナイフとを用ゐて口に入れたが、併し後に果物の出た時は婦人等にフォークの使用が許された。其のフォークは金で出来てゐて、又が水晶であつた。寛裕な饗宴人は賓客に無理に食する事を勧めるし、賓客の方では顔を根らめて遠慮して空腹を忍んで居るものは一人もなかつたので、酒と肴は澤山に長時間のあひだ周つた。

例のルクレチアは妃の傍に坐してゐたので、君公の賞讃の目は此の兩人に向けられた。自分が思ひを掛けてゐる乙女を妃は勞つて、御馳走を自分の皿からルクレチアの皿の中へ移してやつたり、往々年端行かぬ女達の間に見る溢れるやうなそして戯れるやうな愛情をこめて、ルクレチアの手を握つたりしてゐるのが目に這入つた時、

公は満足氣に感じたのであつた。

談話は自から獵が中心となつて、ベアトリチエは不意に茂みから現れた一頭の鹿のため自分は殆く馬から落ちさうになつた事を話すと、それに續いて自慢屋の道化師デオダが口を開いて、兎ても人間業とは思はれぬ程の大膽と巧妙とを以て、自分の手一つで猪を打ち止めた手柄話を語つた時は夥しい笑ひが起つた。併し其の猪といふのは實は豚で、態と道化師の通る道に投げ出したもの、それで其の死骸が此の席に運ばれて賓客の一覽に供された時、道化師は眞つ赤になつて此の誹議を怒つたが、固より其の憤怒も又平生の馬鹿と共に伴つてゐるので、人の同じ愚弄に就てもその善し悪しの區別はちやんと心得てゐるのである。

次第に歡喜の聲は高くなつて、多量の酒は孰れの顔をも赤く染めた。密つと胸衣を留めるレースを緩める婦人達もあつた。酒藏の男は白と赤との極めて明るいサイプレス酒を持つて來たが、それは火に懸けてフスダシウの實、肉桂、丁子の香味を附けたものであつた。公が酒を呼ぶ時、其の命令は寺院の祭典の時のやうに壯嚴な歌の調子で給仕から給仕へと傳へられた。給仕長は戸棚から盃を一つ出して、金の鎖で繋いである一角獸のお守を其の盃の酒に浸けた。若し酒に毒があれば角は黒くなつて血色の滴りを落すからである。他に未だ蝦蟇の罫丸、蛇の舌と云つたやうな同じお守の種類が鹽藏の中に納れてあつた。チェチリアの夫のベルガミニには一の席を賜はつた。老齡の上に痛風を病みながら此の夜の伯は目立つて心地よけに見えた。伯は一角を指して、

「私は考へまするに佛蘭西王すら陛下の此のやうな角をお持ちにはなりませんまい」と言つた。

と、僂儂のヤナキは「ヒ、ヒ、ヒ！」と叫んで、豆大鼓を打ち振り、上に驢馬の耳の付いて居るんだらまだ

らの帽子の鈴を鳴らしながら、『尤もぢやと思召せ、叔父ぢやま、尤もぢやと思召せ』と公に言つた。

公は機嫌斜めならず、手を以てこの僂僕を打つ真似をした。銀の喇叭が鳴つて焼肉——それは猪の頭と孔雀——が来た事を報じた。最後に出たのは城の形に拵へた硬い肉菓子で、其の城壁から喇叭が鳴り、それから菓子の外皮を切ると鸚鵡の羽毛を着た一寸法師が跳り出て食卓の周圍を跳ね廻つて歩き、遂に捕へられて金箱を押しある籠の中へ入れられた。すると一寸法師は聲をあけて『主の祈り』を稱へた。

公妃は、『陛下、何ういふお慶びがございまして、思ひ掛けぬ此の饗宴の見事な催しがあるものでせうか？』と公に尋ねた。

イル・モロ公はこれには答へずにベルガミニ伯とこつそり目交せをした。チエチリアの夫は此の御宴はチエサレの誕生のためであると了解した。

主客共に一時間以上かゝつて猪の頭を食つた。別に時間を節しようともせず、『人、食膳に在ては老を知らず』てふ諺も思ひ出された。宴果つる頃、僧のタルボネが巫山戯た事をして一同を喜ばした。此の僧は非常の肥大漢、其名健啖を以て藉甚して、争つて諸君主から招聘された。彼は細かく切つて醋に浸した一僧正の法衣の三分の一を食つて、非常に法王親下の機嫌を得たといふ男。さて今公の合圖と同時に椀椀と共に煮た腸をブツブツキオと稱する大盤に盛り上げたのがこのタルボネの前に据ゑられた。僧は溜息を吐いて十字を切つてから袖を挑け、兎ても本統とは思へぬ程の迅さで旨さうにそれを平けてしまつた。

其の拍子にベルリンチオニは

基督様が奇蹟で調へたパンと魚を頒たれた時

汝が基督様と一處にたべたなら

汝が不満足氣に尙ほ飢ゑてゐるに

犬の腹を充すべき食物とても残さざりし

と駄句つたので、笑ひの高鳴りが一座から起つた。獨り寂し氣に默然としてゐるレオナルドのみは退屈を諦らめてゐる面持であつた。

最後の金箱の附いてゐる橙を銀の鉢に盛つて出され、それにマルヴォイジー酒が配られた時、宮廷詩人アーントニオ・カメルラ・ダ・ピスタヤが一詩を賦した。次ぎの一句は、詩中、美術と科學と萬物の原素とが公に呈した言葉であつた。

我等は奴隸の境涯にありしも、御身來りたるが爲、自由の身となりぬ。イル・モロ萬歳。

食後賓客は「樂園」てふ名のある庭園へと移つた。此の園は幾何學の圖形に模して造られたもので、枝頭に鉄を入れたある黄楊や、橄欖や、桃金娘木の小徑、樹蔭の歩道、迷堂、涼み屋、手の込んだ東屋などがあつて、きらりと光る泉のため一段の新鮮が加はつた芝生の上には絨毯や絹の枕が置いてあつた。婦人並びに婦人の保護者を以て任ずる武士達は禮儀の紐を弛るめて、小さな宮廷劇場の前に集まつた。狂言はプロータスの「ミス・グロリオス」中の一幕で、欠伸の出る物ではあるが、古代人に對する尊敬の念から、觀客一同は熱心を粧つて見物してゐた。此の喜劇が終ると若い男女は舞踏、テニス、盲人ごっこ、走り合ひをして、馥郁としてこんもりと茂れる薔薇と橙樹との中を、小兒のやうに笑つたり捉へ合つたりしてゐるし、年寄り連は又骰子や碁や將棋を遊んだ。別の一連は泉の階の上に輪形に打ちかたまつて、『デカメロン』中の青年男女を氣取りながら小話を語つた。

尋いで一同は『ロレンゾ・デイ・メヂチ』てふ流行唄の譜に合せて踊つた――

消え行く美はしの青春よ、

御身は幸福を捕へかし、

明日の吉と凶とは

測り知るべきやは。

踊りが果て、から、愛くるしい青白い顔の性質温順な少女ディアナは、低い琵琶の音に合せて、片戀を哀しむ一

八

曲を唄つた。宛ら魔術にかゝつたやうに一同の騷擾と笑ひはピタリと止んだ。そして沈吟する如く、又其の事の我が身にありし昔を思ひ偲ぶが如く熱心に傾聴した。長い間森として一語も發せられなかつた。そして歌が終つても其の沈靜を破るものは唯泉の靜かな涼々の音のみであつた。併し間もなく聲々や歡笑や音楽は再び起つて、橄欖樹の間に螢が光り、黒い空に新月の照る夜更け時までそれが續いた。『樂園』の空に漂ふ柔かな空氣には橙の花の馨りが満ちて、『メヂチ』の歌の曲がなほ顔へて聞えた――

明日の吉と凶とは

測り知るべきやは。

宮殿にある四塔の一つに明りのちらくするのが公の目に見えた。それは天文長兼秘密會議の一員たるアンブロデオ・ダ・ロサテが點してゐるランプの光りで、彼は寶瓶宮に於ける火星、木星、土星の相合を觀測してゐるのである。當スフォルツァ家に取つて此の事は深い意味のある事件であつた。公は突然思ひ出したやうに、情緒の濃やかな話を交はしてゐたルクレチアに急に別れの挨拶を述べて宮殿に入つた。そして時計を眺めて、兼てアンブロデオが教へた時刻の來るのを待ちながら分秒も違へず、大黃の丸藥

を一粒嚙み下して、曆書を繕いて、次ぎの記事を讀んだ——

八月五日。夜十時八分に跪きて手を組み目を天に舉げて心より祈るべし。

時間に後れて右の記事に見える功驗を無効にしては大變と、公は急いで禮拜堂へ行つた。禮拜堂には一枚の繪の前にランプが一つ供へてあるのみで他は眞暗であつた。此の公は繪が好きで、此はレオナルドの手になつたベルガミニ伯爵夫人のチエチリアが、マドンナの粧ひをして、花瓣の多い薔薇の一輪を祝福してゐる圖であつた。丁度時計が八分になつたので、公は跪いて手を組み祈禱文を誦し、目を繪につけて長い間熱心に祈つた——

「願はくは聖母様、予と予の子息マスシミアノ、及び新に生まれましたるチエサレに御恵みを垂れて下さるやうに。妃のベアトリチエ、又チエチリアをもあなたにお任せ致しまする。同じく又甥のチアン・ガレアツォをもお任せ致したうございます。あなたは予の心中を照覽あらせられて、甥に不幸の出来ませぬやうにと予の念じてをります事は御存じと思ひます。それは無論彼れが死にますれば當に予の領土のみならず伊太利全國は自由を得るのでございますけれど。」

斯う念じながら公はミラン君主の玉座に上るべき權利が、法學者に依つて自分に證明されてゐる事を思ひ出した。それは公の兄（即ちチアン・ガレアツォの父）はフランチェスコ・スフォルツァが未だ大首魁であつた時、即ちミランに君主たる以前に生れた人であるが、それに引き換へて弟のルドウィコは後のフランチェスコ、即ち即位

後の父の腹に宿つた人であるから、兩人の父なる人の其の君主號を嗣ぐべき者は、明白に弟であつて兄ではないとの事であつた。

然かも今の場合の公に取つて、右の決定は正理に基いたといふよりも寧ろ巧を弄したやうに思はれたので、聖母の前でこれを述べる事を躊躇して、以下のやうに言つて甘んずる事にした——

「予は萬一過去又將來に於きましてあなたの前で何か罪を犯しましたも、お天の女王様、それは予一個のためではなく、予の臣民の福祉、又伊太利の福祉のために已むを得ず其の仕儀に出るものである事は、あなたの御存じあらせられる所でございます。願はくは予の爲めに神様に御取りなしを願ひます。しますれば當ミラン府に宏壯な伽藍、バヴィアではチェルトサ、其の他又立派な記念物を寄進しましてあなたを奉頌致しまする。」

祈りを終つてから、寢室の方へ行かうと手に蠟燭を持つて、最早や眠りに入つてゐる宮殿内の部屋々々を通つて行く途中で、彼はばかりとルクレチアに行き逢つた。

「締めた！ 愛の神様は此の通り予のために計つて下さる！」と公は心で思つた。

「陛下！」とルクレチアは叫んだ。そして此の聲を出して、「お慈悲を願ひます、陛下！」と、續けた時は、公の前に膝を落さんばかりであつた。

そして自分の兄で侍従長を奉じてゐるマッテオ・クリヴェルリが多額の公金を賭博で費消した次第を公に語つた。自體不しだらな兄ながら、ルクレチアは深く愛してゐるのである。

「案ずるに及ばん！ 予が救つてやるから好い。」

そして暫時黙してから深く溜息して、『で、其方も……え、と、其方も予に對して今迄のやうなつれない振りを見せないだらうな？』

ルクレチアは晴やかな邪氣のない目で訝し氣に公を見た。

『陛下、何を仰られるのか私には分かりませんが。何ういふ事でございますか？』

斯う言つた内氣な容子に少女は一層の美しさを増した。

『それは斯うだ』と言ふと等しく公は大分荒々しく兩手をルクレチアの身體に廻して、『それは斯うだ——が、ルクレチア、其方に予の戀は分らないか？』

『放して！ ま、放して下さいまし！ これはまあ何事でございます。ベアトリチ様が……』

『いや、分りはしない！』

『可けません、陛下、可けません。お妃様は私に大相善くして下さいますもの。御深切にして下さいますもの。後世でございますから何うぞ放して……』

『其方の兄を予が救つてやるのだぞ……其方の望みは何なりと叶はしてやる……予は其方の奴隷だ。だから唯予を可哀相だと思つて呉れ。』

そして情欲と涙とに半ば眞剣を見せて、震へる聲音でベルリンチオニの詩を囁いた——

憐れなる白鳥よ、我れは消盡したる歲月を歌ふなり。

されど歌は我れの苦痛に慰めを與へはせじ、

愛は笑つて悲哀の焰を打ち、

嘲りて叫ぶなり、『涙もてそれを消せ』と。

『放して！ 放して！』と少女は唯絶望の聲を放つ。

それでも公は女に蔽ひ掛かつて、其の新鮮な息と、堇と麝香との香氣とを感じながら無理やり唇に接吻した。一瞬間ルクレチアは公に抱擁されて萎んだが、矢庭に絶望の叫びと諸共、公の手を振り放して逃げてしまつた。

九

それから寢室に来て見ると、ランプが消えてベアトリチエは既に牀の中に臥せつてゐる。牀は靈廟の形に出来てゐて甚だ大きく、青絹の天蓋が上から垂れて、床の中央の檯の上に載つてゐた。そして白銀色の帳が張つてあつて、金と眞珠を鏤めた蒲團が掛かつてゐた。此の蒲團一枚の價は僧侶の祭服に匹敵するほど高いものであつた。

『ビチエ』と公はあまへるやうに囁いた。『これ、ビチエつたら、最う眠たの？』と言ひながら、接吻しようとする、妃は公を押し遣つた。

『おやビチエ——何故だ？』

『私に構はないで置いて下さい、眠いのですから。』

『だが何故さ、おい、何故つたら予が何れ程あなたを思つてゐるかそれがあなたに分れば……』

『御尤も、御尤も。女とさへ見れば誰でも皆陛下がお思ひになる事は能つく分つてをります。斯く申す陛下の妃や、チエチリア、彼の忌々しい露西亞の側女、それから私の衣裳部屋の一段と暗い隅で陛下が接吻なすつた赤毛の女道化、皆分つてをります！』

『あれは冗談だよ。』

『あんな冗談は私好みません。』

『ま、ビチエ、ずつと此の間中から予に好い顔をした事が無い！では白状する——予が悪るかつた。下劣な冗談だつた——詰り一時の出来心で。』

『陛下の出来心は度々の事でございます。』

そして腹立たしく公の方に向き直つて、『あなたは何故にそんなに恥といふ事が分らないのでせう？何故、何故そんな嘘をお吐き遊ばす？私に陛下は分らないで何としませう。陛下の心まで讀まないで何としませう。あの斯やうな事を申しましても嫉妬とお取りになつては困りますが——ではありますが、陛下、私はネ、御聞き下さいますか——私は陛下の情人と一處にされるのは厭でございます。』

『それは堅く誓ふ、ビチエ、予はあなたの外には誰も愛してはゐないのだ。予の魂の永遠の福祉に賭けて其の事は誓ふ。』

妃は公の言葉よりも言葉の調子に吃驚して口を噤んだ。公の言は丸が丸で嘘でもなかつた。妃を欺くたび妃に對して一段の愛を感じるのであつた。即ち公の情欲は丁度恐怖、良心の煩悶、憐愍、悔恨等に依つて却つて煽られてゐるやうなものであつた。

『宥して呉れ、ビチエ、宥して呉れ。斯んなにあなたを思つてゐる心を少しは酌んで貰はないと……』と公は哀訴した。

で、到頭妃は折れて出た。暗とて目には見えぬ妃を抱いた時、公は晴やかな罪のない目と、新鮮と、董と麝香の香氣とを思ひ出した。二つの愛は美妙な感官の中で混ざつてゐた。

『全く今日だけはあなたは些つとばかり愛人のやうでゐらつしやる！』と妃は内々自慢らしく言つた。

『本統だ、ベアトリチエ。丁度一番初めに二人が一緒になつた時のやうだ！』

『ま、馬鹿な！』とベアトリチエは笑ひながら、『そんな下らん事を投つてしまつて、最つと深重な事をお考へにならないと可くませぬ。あの、聞く様子では彼の方は治るやうでございしますが——』

『そんな事はない。最う助かる見込みはございせん、ルイギ・マルリアニが斷言してから未だ二三日にしかならない。成程少しは快いやうだが到底永くは持つまい。運命が既に全快しない事に定まつてゐるのだもの。』

『それが何うだか分るものですか』とベアトリチエは語を勵ました。『彼の方の手當は餘程行き届くやうですが。實際あなたの御辛抱の強いには呆れる外ございせん。だつて羊のやうになつて種々の悪口をちつと耐へてゐらつしやるのですもの。何大丈夫だ、實權は此方の手にあるから好いと、あなたは仰有るけれど、其の實權を維

持したさに、夜も晝も泥棒見たやうに身顛ひしてゐるよりか、一層のこと投げ出して了方が好くはございませんか？ あの佛蘭西王といふ高慢な私生兒の前で塵を舐つたり、圖々しいアルフォンソに自由にされてあんな者の奴隷になつたり、不忠なアラゴンの巫女の機嫌を取るに汲々としたり——そんな事を廢してしまつて實權をさりと投げ出す方が好くはございませんか？ 噂ではあのアラゴンが又身重になつたさうですが、定めし蛇の子があつた呪はれた巢から這ひ出て来て、私達の生命を取ることとございませう！ あなた、私達の一生の事をお考へ遊ばせ！ 何かと云へば實權は此方の掌中にあると仰有るのですもの！』

『あなたは然う言ふけれど醫者共はあの病氣は治らないと毎々斷言してゐるのだから。遅かれ早かれ……』

『左様、それでは其の遅い方でございませう。死ぬ、死ぬと云つてから最う十年になりますから。』

ひつそりとなつたと思ふと、突然妃の美しい腕が夫の首に絡んで、それを自分の方へ引き寄せ、何事かを耳に囁いた——と、ルドヴィコは戦慄した。

『ま、ピチエー！ あなたは基督と聖母に宥しを乞はねばならぬ！ 最う——予に氣を置きませんか？ ——最

う二度と再び予にそんな事を言つてはなりませんぞ。』

『あなた恐いのですね。多分それでは私にさせたいのでございませうか？』

公はこれには答へずに暫らくしてから、

『で、あなたの考へでは何で？』

『陛下、桃の事を考へてゐるのでございませう。』

『あ、然うだ。極く熟したのをあなたに上げるやうにと園丁に吩咐けて置いたのだつた。』

『いゝえ、其の桃の事ではないのです。私が考へてゐるといふのはレオナルドの處にある桃の事でございます。』

あなたはあの桃の事を何かお聞きになりはしませんか？』

『何を聞くものか。』

『其の桃に毒のある事を。』

『何うして毒が？』

『それは實際の話でございます。實際に供するためとかで、魔術を使つて桃に毒を注入したといふ事でございます。それを私に告げた者はシドニアでございますが、誠に美しい桃ださうでございます。』

そして再び森閑となつた闇の中で二人は抱き合ひながら黙してしまつた。互ひの思ひは結び合ひ、互ひの耳は心臓の激しい鼓動を聞いてゐるので——最早や言語は不要になつたのである。最後にイル・モロは宛ら父のやうな愛情を籠めて若い妻の額に接吻して十字を切つた。

『お寢み、サア、靜かに御寢み』と公は言つた。

此の夜の夢に妃は金の大盤に立派な桃が載せてあるのを見た。試めしに其の一つを食べると水氣がたつぷりとして旨い味であつた。と、突然、ベアトリチエに向つて叫んだ聲がある。

『毒です！ 毒です！』と二度續けて、最う一度『毒です！』と言つた。

公も同じく夢を見た。夢の中で自分は泉の傍のきら／＼光る芝生の上を歩んでゐるのだと思つてゐるうちに、

少し距つた前方に姉妹のやうに相抱いてゐる白衣の三婦人が見えた。近づいて見るとそれは一人はベアトリチェと、二番目がルクレチア、三番目がチエチリアであつた。それでも三人は到頭斯んなに友人になつて呉れたかと公は神に謝したものの、其の實、心では何故最初から友人であつて呉れなかつたかと怨んだのである。

+

城の塔の時計は眞夜中の時刻を報じて、何處も唯眠りの沈黙ならぬはなかつたが、唯一つ公妃が髪に金箔を押しに上る例の臺のみは然うではなかつた。何故なら女道化のモルガンチナは押し籠められてゐた押入れを出て、此處へ逃げて來てゐるからで、此處の暗黒の中で唯一人小兒の死亡を哀しんでゐるのであつた。

『皆で私の赤ちやんを殺しました！ 何故でございます、神様、何故でございます？ あの兒は誰様にも悪い事はしませんでした。私の樂しみは彼れ一人でございましたのに！』

夜は闇として一天清澄に、遙か地平線上に聳ゆるアルプスの氷の如き巔は永遠の結晶とも見える。凶兆を報ずる鳥の聲に似たる狂女の哀哭は長い間、静寂を擾してゐるが、不意に溜息を吐いて、女は目を天に舉げて黙り込んだ。

と、四邊は死の如き静かさとなつた。女道化は此の夏の一夜の涯しなき紺碧の上又上なる星を見て莞爾とした。星は狂女の頭上に輝いてゐる——無垢にそして神秘に燦然として。

四の巻 巫女の安息日 —— 一四九四年

上の天——下の天、
上の星——下の星、

人間頭上の一切は——其の脚下に現するなれ、
謎を解く人は願むべきかな。

——タブラ・スマラゲヤナ。

—

所はミラン府の見響しい町外れ、ヴェルチエルリナ門と稅務署とカンタラナ川てふ堀割とに接近して古びた一軒の家がある。非常にひつそりとしてゐるが、人目に立つのは黒く曲つた大煙突から日夜大きな渦を巻いて立ち上る烟であつた。これは賢女の名あるシドニアの住家で、二階を鍊金士ガレオット・サクロボスコに貸し、自身は姪のカッサンドラと共に下にゐるのである。カッサンドラの父はルイギ・サクロボスコといふ著名なる旅行家で、古代藝術の資料を探るため、希臘、エーヂャン諸島、敘里亞、小亞細亞、埃及を踏破し、希臘の古大理石、琥珀の屑、ホーマーの墓から得たといふ偽の碑銘、新に發見したユウリピデスの悲劇、デモスセネスの演説の結尾——

凡そ手に這入る限りの物は一つも剩さず所有してゐた。これを偉人と思ふ人もあれば、又ベテン師を以て目する者もあるし、狂人視してゐる者さへ尠くはなかつた。彼の心は一から十まで異端なる古代希臘の追憶に囚はれてゐた。何處までも嘉すべき基督教徒でありながら、オリンピヤに在ます學問傳令の神ヘルメス（即ちメルキユリー）に祈りを捧げるのみか、同神の名から得た水曜日を以て商業の取引に甚だ好い日であるとして、此の日を自分の延喜日にしてゐたのである。何等の辛酸、何等の窮乏と雖も、彼の事業を挫くに足らなかつた。一度の如きは既に十里ばかり海上に乗り出してゐるのに、或る機みから其碑銘の事を思ひ出して、それを寫し取るため態船を漕ぎ戻させた事があつた。又難船に遭つて折角の蒐集物を失つた時は愁ひの餘り髪が白くなつてしまつた。何故そんな無駄骨を折つて身體を疲勞させ月日を徒費するのかと訊く人があると、彼は斯う返答するのが常であつた。

『死人を起たしめるのが拙者の希望でござる。』

或る時希臘ラセデーモンの廢墟に近いミストラといふ小邑で、非常に美しい少女に逢つた。これは貧乏な上に飲んだくれなる村の牧師の女であるが、宛ら女神アルテミスの像そっくりなので、ルイギは伴つて伊太利へ歸つて來た。他に未だイリアッドの新寫本、女神ヘケテを詠じたるもの、斷片、土燒きの甕の破片などが此の時の土産であつた。

夫婦は女子を一人設けた。其の時分ルイギはエスキラスの悲劇に夢中になつてゐた頃なので、取り敢へずトロイ王プリアムの公主の名を假りて此の産兒にカッサンドラと命名した。兎角うする中に母は歿するし、父は常に

家を去つて定めぬ旅をしてゐるので、娘はデメトリウス・カルコンデラスの世話を受ける事になつた。此のデメトリウスはコンスタンチノープルの落人たる博學の希臘人で、スフォルツァ家の招聘に應じて當ミラン府に來たのであつた。當年七十歳の老翁ながら、巧みに二面を使つて、性質狡黠、常に腹に一物を貯へてゐる人物で、表面は基督教に對して多大の熱心を裝ふ癖に、内心はカルデナルのベッサリオネを始め同じ落人連の希臘人と同様、ゲミスツス・プレトの門人を以て任じてゐるのである。ゲミスツスは學問癡てふ綽名のある人、古代學藝に精通する巨擘中の殿將であり、又新プラトーン派の哲學者で、ルイギが妻の『アルテミス』に戀をしたかのミストラで當時を去る四十年前に歿した人であつた。彼の弟子達は師を以て高名なるプラトーンの權化であると斷ずるに反して、神學者等は背教者ユリアヌスの非基督教的左道を復活する者であるから辯論を以てするのはまだるつこい、宜しく宗教糾問と杖火の刑とを以て攻むべき學者であると主張した。彼等が主としてゲミスツスに加へた非難の根據は彼が死に先づ三年に門人に告げた次の語にあつた。曰く、「私が瞑目して數年經たぬうちにあらゆる人民、あらゆる國民は、唯一の眞理の支配を受けるのだ。此の單一の信仰によつて人々は相結ばれるのである」と。そして此の預言の意味に就て、基督の信仰か或はマホメットの信仰かと問うた者があつた時、彼は「基督でもなければマホメットでもない、古代の異教と毫厘も異らぬ一個の信仰の意である」と答へた……

カッサンドラを預かつたカルコンデラスは、假令偽りながらも基督教の嚴格な敬虔を以て此の少女を教養した。併しカッサンドラは神秘的色彩に富める新プラトーン説の話を時々洩れ聞いてゐるので、素より其の哲理的方面の精緻は解らぬながら、やがて來るべき諸神復活の怪奇な夢を自分一人で織つてゐた。其の胸に懸れる紫水晶

は父から貰つた熱病除けのお守りで、裸形の若者となつて現れてゐる酒神デオニソスは、杖と葡萄の枝とを携へ、其の傍に一匹の豹がゐて、手にせる葡萄を啜らうと跳り上つてゐる。自分一人切りのとき少女は度々此の寶石を太陽の光線に當て、目がくら／＼となるまで一心に其の紫の奥を見詰めると、幻想が浮かんで来て、酒神は宛然生けるかのやう、依然若々しく惚れ／＼するやうに見えた。

父のルイギは寶物の探索に到頭身を害ねて、自分の發見したフェニシアの殿堂の廢墟に近い牧人の小屋で、腸チブスに罹つて、悲惨な最期を遂げた。すると、古物ではなく鍊金術の所謂哲人石を索めるため多年のあひだ遊歴してゐたルイギの弟のガレオットが、それから間もなくミラン府へ来て、ヴェルチェルリナ門側の矮屋に落着く事となつたので、姪を引き取つて共に住む事にした。

併しカッサンドラは折々カルコンデラスの家を訪ねる。そしてデオヴァンニ・ボルトラフィオもデオルデオ・メラの筆寫をするために此處へ通つてゐるのであつた。

デオヴァンニは二度目にカッサンドラを見たとき、毒の木に就いて此の女とツォロアストロとの間に交はされた話を盗み聞きしてゐた事を思ひ出して我れ知らず慄然とした。此の女が魔法を使ふ事は大勢の人に聞いて知つてゐるが、其の顔の美しさは否むべくもなかつた。デオヴァンニは仕事で済んでから殆ど毎晩のやうにヴェルチェルリナ門側の一つ屋にカッサンドラを尋ねるのであつた。聖ラデゴンダ精舎の附近の水門から餘り遠くない所に堀があつて、其の暗い水が黙々として流れる早瀬に接して小さな丘が見える。カッサンドラとデオヴァンニが共に腰を下ろす處は此の丘であつた。そして接骨木、苦蓬、蕁麻が絡み合つて、人の目にはそれと認め難い小徑が

丘の上に通じてゐた。未だ一人も此の徑を通つた者はなかつた。で、二人は其處で逢つて、彷徨つきながら長い間何くれとなく話をするのであつた。

二

此の夜は蒸し暑く、稀れに時を隔て、疾風が起つて、白塵を揚げ、木の葉を舞はす位のもの、それが通り過ぎると静かさは一段を加へる。聞えるものとは懶氣に遠くの地下で鳴つてゐるやうな雷の音、並びに此の低い莊嚴な威かすやうな唸りに對して、稅務署の吏員連中が近くの酒場で日曜の酒宴を催してゐると見えて、琵琶の調子外れな疍高い音に醉歌とだけ、其の外にはそよとも音がしない。折々雲間を破つて紫電が閃くが、其の閃く一瞬間は、黒暗々たる中にあらゆる物が——煉瓦の煙出しのある矮屋も、鍊金士の竈から昇る黒煙も、河岸に漁る長身瘦軀の寺男も、落葉松と柳の列を成せる眞直な堀割も、伽藍の建築に要する白大理石をマヂョレ湖から運んで来る平船も、そして其の小船は哀れな馬が引つ張つて行くのであるが、其の馬のだらりと弛んだ曳綱も、又馭者の長い鞭も（此の二つは水中に漬かつてゐるのであつた）——峻嚴に且つ／＼と浮き立つてゐる。と、再び一切は闇に包まれて、目に見える物としては鍊金士の竈ばかり。竈の中に依然活潑に燃えてゐる火はチラ／＼とカンタラナ河に映じて、淀み水や、腐れた羊齒の葉や、爹兒や、朽木の惡臭が、河の面から漂つて来るので、ために嘔吐を催す程であつた。

デオヴァンニとカッサンドラの二人は毎時の場所に來てゐた。

「私厭やになつてしまふ、毎日々々詰らない事ばかりですもの」とカッサンドラは氣懶るさうに伸びをして、盆の窪へ廻した白い華奢な指をボキ／＼音させた。「今日は昨日のやうだし、明日は今日と變りません。あの馬鹿な寺男は相も變らず何も漁りやしない。相も變らず叔父さんの仕事場から汚い煙が上つてゐるし、そして決して見付かりつこのない物を叔父さんは何處までも捜してゐらつしやる。あの小船も同じなら、小船を曳いてゐる憎し氣な馬も同じ、破けさうな琵琶も同じです！ 私唯變化が欲しい！ 佛蘭西人が来て私達をミランの手から放して呉れ、ば好いね！ 寺男が魚を一匹漁るか、私の叔父さんが金を發見するかすれば、何んなにか面白いでせう！ ね、チョーヴァンニ、私退屈でしようがない！」

「私も其の覺えがあります」とチョーヴァンニは叫んだ。「時々生きてゐるのが飽き／＼して死にたくなる事があります。併し然ういふ不満の悪魔に大變利き目のある祈りを坊さんのベネデットから教はりました。言つて聞かせませうか？」

「それには及びませんよ、チョーヴァンニ。私があなたの神様にお祈りの出來たのは最う疾うの昔の事なんです。」

「えッ、私の神様？ 私の神様の外に何んな神様がゐるます？ 一體限りの神様ぢやないですか？」

宛然風雨の中を走る稻妻の如き閃光が此の時颯とカッサンドラの顔を照らした。あゝ其の顔——斯んなに美しい、斯んなに神秘的な、こんな下界の風塵を脱離した顔を、チョーヴァンニは未だ此の娘に見なかつたのであつた。

娘は両手を黒髪の後ろの上の方に廻して暫らくの間黙つてゐた。

「ま、お聞き下さいまし。此の話は彼處——私の生れた彼處の國の事で、最う随分古いのです。左様、私が未だ赤ん坊くらゐの時分で、父は或る旅行をした時私を連れて行つたのでした。そして古い社の廢墟を訪ねたのです。社は高い岬の上にあつて、私らの側はぐるりと海になつてゐて鷗が啼いてゐました。縫針のやうに尖つて黒い岩は一面に鹽の泡が被ぶさつて、此の岩に打突かる波は粉微塵に碎ける。そして其の波は沸き立つやうな潮をなして、黒岩の切り立つた尖端を流れて上下してゐます。父は此處で大理石の板の缺片に彫つてあつて半ば消えかゝつた碑銘を發見したのですが、私は一人で長い間社の階に坐つて海の音を聞きながら、海岸の匂ひの混ざつた新鮮な海氣を吸つてゐました。それから棄てられて居る社殿へ行つて見ました。圓柱は黄色くなつてゐるだけで、随分年代が経つてゐるに拘らず、崩れと言つては殆どありませんでした。柱の間から青い空を見上げると曇つたやうに見えるし、石の隙間には罌粟が生えてゐる。薄桃色の罌粟です、希臘の罌粟です！ 實に森として耳へ來るのは蔽ひ包んだやうな波の唸りだけ。然かもそれが御堂の中一杯に聞こえるので宛るで祈りの聲のやうでした。で、私は跪いて、昔此處に祀つてあつた神様——今は擯斥されて誰れ一人知る者のない神様に祈りを捧げました、其の神様の大理石の階に接吻して私は泣きました、そして神様に對して愛を感じました、何故なら最早や神様は地上の人に愛されもせず祈りもされなかつたからです——何故なら神様は死んでゐたからです。——私あの時くらゐ熱心に祈つた事はありませんでした。そして其の社は——其の社はヂオニサスの社でございますました！」

「飛んでもない、あなたは何を言ふのです、カッサンドラ？ あなたが神だといふ其のデオニサスは生きてはるやしません、又生きてゐた事もないのです。」

「え？、生きてゐなかつた？」と娘は男を侮辱するやうに言つた。「ちや伺ひませう、あなたが尊敬してゐらつしやる坊さん方は、耶蘇大繁昌の時代に追拂はれた神々は最も威力ある悪鬼に化したと教へてゐますが、あれは何うしたのでせう？ それから大天文學者のノヴァラのヂョルヂオは正確な觀測に基いて、木星と土星との相合の際にはモセスの教が出来上つた、木星と火星の際にはカルヂヤ人の教、木星と金星の際にはマホメットの教、木星と水星の際には基督の教が出来上つた、そして自分が死んでから木星と太陰の相合する際は、非基督の教と諸神復活が生ずる事を知つたさうですが、あれは一體何うしたのでせう？」

風雨愈々迫つて雷鳴は益々烈しい。紫電に一層の閃光が加はつて密雲は頭上に擴がつてゐる。然かも調子外れな琵琶の音は未だ強情にも此の威嚇的な空へ啜り泣きして行く。

「お、あなた！」とヂョーヴァンニ・ボルトラフイオは自分の両手を握り合はして叫んだ、「あなたは悪魔が分りませんか、悪魔はあなたを贖して深淵に陥らさうと思つてあなたを誘惑してゐるのですが、それが分らないのですか？ 悪魔の畜生、永遠に呪はれて居ろ！」

娘は振り向いて両手をヂョーヴァンニの肩の上に載せた。

「然ういふあなたも悪魔に誘惑されてゐらつしやいませんか？ あなたの先生であつた坊さんのベネデットの處を何故出ました？ 何故あなたは不信仰なレオナルドの塾に入りました？ 何うした譯で此の私の處へいらし

つた？ 私が魔術を使ふ事をあなたは知りませんか？ 此處で斯うしてカッサンドラと話をしてゐる内にも、あなたの魂が亡くならないとも限らぬと、あなたは恐ろしくは思ひませんか？」

「神様の御威力は私等を守つて下さいます！」と彼は身を顛はせつゝ吃つた。

女は何も言はずに男の方に寄り添つて不可思議な目を男に注いだ。其の刹那、紫電一閃雲を劈いて女の青白い顔の上に光つた。お、此の女はあの女神であるのか？ 水車山上の墓を出てヂョーヴァンニの愕然たる凝視の前に立つたあの女神、あの白夜叉であるのか？

「あれだ！」ヂョーヴァンニは恐怖しつゝ心で思つた、「あの白夜叉に再び見付かつたのだ！」

そして起ち上らうとしたが、身體の力が何處かへ抜けて行つたやうであつた。其の時自分の頬に娘の熱い氣息を感じて次ぎのやうに囁くの聞いた——

「あなたは私に何もかも打明けて貰ひたいのでございますか？ あの神様のゐらつしやる處へあなたは私と一緒に飛んで行きたいのですか？ まあ何んて好い處でございませう、彼處は！ 彼處なら退屈もなければ何も恥ぢるに及ばんです。彼處では丁度樂園のやうに何事も思ひの儘なのです！」

ヂョーヴァンニの額には冷汗がにじんだが好奇の念に促されて低い聲で尋ねた、

「何處です、それは？」

「アル・サバト(安息日)ですよ！」と朱唇をヂョーヴァンニの頬に觸れさうにして答へた聲には烈しい氣懶るさが籠もつてゐる。

正に此の時頭の上で霹靂一聲して天地を震動させた、ガラノノ鳴る音は目に見えない巨人の笑聲のやうで、森
殿な反響をして空中に鳴り渡つた。そしてそれが段々消え去つて遂に大沈黙と化した。

それから僧院の鐘——入相の鐘は憂鬱な中にも平和な音をして鳴り出した。デューヴァンニは十字を切つた。
『私最う遅うございますから家へ歸らなきやなりません』と娘は起ち上つて言つた。『あなた、あの松明を御覽
なさい。あの往來を通る松明を御覽なさい。あれは陛下が叔父のガレオットの許へ入らつしやるのです。叔父は鉛
で面白い實驗をして陛下にお目に掛るのださうです。當人は其の鉛が金になるのだと思つてゐるのですから。』
まこと其の言葉に違はずヴェルチェルリナ門の方から馬蹄の憂々たる音の來るのが聞こえた。カッサンドラは暫
らく彷徨いてゐたが、纏り合つた接骨木の茂みの中へ突と這入つて消え去つた。

三

ガレオットは終生を哲人石の探究に費した。彼はボロニヤ大學の醫科を終へてから、秘密學の巨擘として名聲噴
噴たるベルナルド・トレヴィサイニ伯の門に入つて其の助手となつた。後、十五年間、これといふ見込みあるありと
あらゆる物質——例へば揮發鹽類、蒼鉛、砒石、血液、膽汁、毛、動物、植物の中に、變質力を有する水銀を探り
求めた。自分の手に這入つた遺産金六千ヅカトは斯うして煙になつて煙突から消え去つたので、是非とも他人
の財産に倚つて生きざるを得ない境涯になつた。そして債權者連のため獄に投ぜられたが、破獄して八年間に卵
を破ること約二萬個、以て實驗の用に供したのであつた。尋いで法王の書記僧たるエンリコ師に従つて綠礬を研

究したが、其の毒烟のため十有四月間病に臥し、最早人々に見捨てられた體に將に死が臨まうとした。ありとあ
らゆる屈辱、迫害、飢餓、赤貧、侮蔑、そして法律の苦痛にさへ耐へて、佛蘭西、西班牙、羅馬帝領の諸國、和
蘭、希臘、波斯、巴列斯坦、北部アフリカを渡り職人として遍歴した。そして遂に年老い神身疲れて（併し彼の
幻想だけは未だ破れずに）ロンバルチへ歸る事になつた、それはイル・モロ公のために宮廷鍊金士の職に補せられ
たからであつた。

彼れは乃ちミランのヴェルチェルリナ門前の一つ屋を實驗室と定めた。それは大きな室で、中央には仕切り付き
の不器用な耐火竈があつて、それには扉、坩堝、竈などの備付けがあるし、室の一隅に廢物があつた。それから
其の仕事檯はあらゆる種類の複雑な、器械、立方體、延曲器、蒸溜容器、蒸溜器、漏斗、乳鉢、試験管、瓶、液
盤などが入り亂れて堆く、有毒性の亞爾加里及び酸性物から辛辣な臭氣が發してゐる。そして此の室ではオリ
プスの七神、天上界の七惑星、所謂神秘不可思議な全宇宙が、鑛物に配されてあつた。即ち太陽を金、月を銀、
金星を眞鍮、火星を鐵、土星を鉛、木星を錫、水星を水銀に配してあつた。又野蠻な名稱を附した材料が此の檯
の上にあるので、人が此の名を耳にすればこれは神を冒瀆する底のものだと恐怖に打たれるのであつた。其の他、
狼の乳、アキルレスの鐵、積如の實、星石（これは明るく光る石で内部の中央には満月の形があつた）、雌雄兩
性體、大黃、牡鹿草又の名安産草（蓋しこれを用るれば安産するといふので）、無限の價値ある獅子の血の一滴
（これを得るために彼は數星霜を要したのである）、諸病を治して永遠の若やぎを與へるといふルビー様の赤い寶
玉なども檯の上に載つてゐる。

そして此の櫃に向つてゐるのは鍊金士ガレオットで、短身瘦軀、古董のやうな皺があるにも拘らず未だ鑿鑿として倦む事を知らない人、今兩手で頭を支へて、熱心に熟視してゐるのは蒸溜器であつた。レトルトの中で沸々として低い音を立てゝゐる綠色の透明な液はヴィーナスの油であるが、此の學者の傍に點されてゐる蠟燭は、レトルトの中を通過して其の濃緑な光りを、古びた羊皮紙の大版型の書物の上へ送つてゐる。此の書物は亞刺比亞の鍊金士ヂャピラ・アブダラーの著であつた。

階段の上にかや／＼する聲と足音が聞えたので、老鍊金士は起つて室をぐるりと見廻した。そして萬事の準備が成つてゐる事を見届けた後、竈に薪を入れるやうにと啞の助手に手眞似で見せて、貴賓を迎へにとつかは出て行つた。

四

一行は嬉々たる騎士や貴婦人で、晚餐とマルヴオアジー酒の席を起つて来たばかりのところであつた。一行の中にはレオナルド並に鍊金學の精通者たる侍醫のマルリアニもゐる。そして婦人達が此の室に這入ると同時に、學究の密つそりした房が、忽ち香氣、絹の摺れ音、鳥の囀りの如き輕快な談笑で一杯になつた。長い袖でレトルトを顛覆させる婦人があるかと思ふと、鐵滓をいぢつてゐる中に綺麗な手袋を切らす者がゐるし、櫃の上の水銀を零して生命の宿れるが如き銀の玉を見て歡んでキ／＼云つてゐる者もあつた。

「鉛が變質する時に惡魔が實際火中に見えますか？」とフィリベルタは情人たる西班牙の騎士に尋ねた。「斯ん

な實驗の席にゐては罪惡になりはしませんか？」

此の時鍊金士ガレオットは突とレオナルドの耳に口を寄せた。

『實際のところあんたが来て呉れて私は非常に名譽ぢや。』

そして暖く握手して、相手の返答を待たずに、

『ま、ま、分つとる、分つとる！ これは此の一行には秘密ぢやが、あんたと私だけで呑み込んでゐるのぢや

て、ね、然うぢやござらぬかい？』

尋いで非常に愛想のよい微笑を含んで聲高に言つた――

『え、此の某の保護を給はる最とも高名なる名譽あらせらる、陛下を初め奉りまして、御臨場なされました最とも嬋妍たる御女性達のお許しを受けまして、某唯今より貴重なる變質を尊覽に供します。慮外ながら何卒御一同様のお目止めを願ひ上げます。』

そして先づ坩堝を取つて人々に示したが、それは縁の厚い耐火土の塗つてある溶融壺であつた。各自に其の壺を檢めたり叩いたりして何等誤魔化しの伏在してゐない事を御承認になりたいと請ふと共に、彼のいかさま鍊金士連が容器に二重底を拵へて、金を造るのではなくて其の底に入れて置くといふ慣用手段を罵倒した。更に充分の信用を得るため白鐵、薪、鞆、其の他あらゆる物の検査を請うた後、鉛を細かく切つて坩堝に入れて、竈の最も熱してゐる所にそれを置いた。啞で數睨みの助手――此の男は甚だ青白い上に宛るで骸骨のやうに物凄いで、一人の貴婦人はこれこそは待ち設けてゐた惡魔だと思つて殆く氣絶しさうになつたのである――は大きな對の鞆

に風を入れ始めたので、火は早くも焰となつて跳んだ。其の間ガレオットは貴賓に話し掛けて愛想をしてゐた。自分の鍊金學は丁度金銀が目宛ての遊女をつくりでござる。浮かれ男は數多あるが、それが皆騙されてゐるので、容易い勝利は誰彼の嫌ひなく與へるけれども、倅で抱擁の一段になると、頭を振つて誰方様も肘鐵砲でござりませぬ。などと言つて賓客一同の歡笑を買つた。

侍醫ルイギ・マルリアニは肥えて無口で苦蝨を噛み潰したやうな、そして威容と學識が彷彿として顔面に現れてゐる人であるが、この無駄口に我慢し切れなくなつたのか、額を撫で、叫んだ――

「ガレオット殿、今が貴殿の仕事に丁度好い時ぢやと思ふが、鉛が煮え立つてゐますぞ。」

ガレオットは青い小さな包み紙を開いた。中に這入つてゐる物は非常に光澤ある硝子のやうな光を放つて、粘り強いきらくする黄色の粉末で、海鹽を焼いたやうな強い匂ひがした。此の貴重な着色劑こそは多年求めてゐた無限の價値ある鍊金學の寶石で、即ち不可思議な哲學石であつた。

そしてナイフの先きで大き蕪種程の粉末を分け取つて、それを蜜蠟の球に包んでから煮沸せる白鎖の中へ投げ入れた。

「其の溶融の力は幾ら程のお見込みかな？」とマルリアニは訊ねた。

「左様、一に對して變質すべき金屬の二千八百二十に當りまする」とガレオットは答へた。「拙者の溶融が未だ不完全なのは無理もありませんが、近いうちには一に對する百萬の數字を見られる事と信じてをりまする。然うなりました曉、唯つた稷の一粒くらゐの目方を小分けするだけで足りりまする。即ち殺ぎ削つた様を浸してある

八斗の水に其の小分けしたのを溶かして、最後に其の水を貴殿の葡萄酒に注げますれば、それで以て貴殿は五月に葡萄酒の收穫が出来るのでござります。へ、ッ、水銀だにあらば海を染めん哉ぢや。所要の水銀が拙者にありますれば見ん事海を變じて金に致しまするがな。」

マルリアニは此の大言を怒つて肩を聳やかして後を向いた。そしてアリストオトルを引いて論じ立て、此の種の變質の不可能なる事を其の中で諷した。

「ま、お待ち下されい、大官閣下」とガレオットは莞爾として、「貴官の論理で論駁できぬ三段論法を唯今直きに提出致しますから。」

此の言と共に白い粉を一握み火中に投じた。濃烟濛々と室に漲つて、色彩の焰は、音を作して飛び上つた。そして青は緑に、赤は黄に、宛ら虹を見るやうに色が變じたので、見物の人達は呆氣に取られた。フィリベルタは此の焰が紫色を呈した刹那、火中に惡魔の顔が見えたと後に至つて斷言したのであつた。鍊金士は長い曲つた鐵棒で坩堝の蓋を揚げて見た。白熱した鉛はブツ／＼激つて、シュー／＼ゴト／＼と音を立てゝゐる。そして再び蓋をしてから靴を動かす事十分、やがて細い鐵の棒を坩堝の中へ入れるよと見る間に、其の端に黄色い一滴の懸かつてゐるのが一同の目に見えた。

「出来たア」と鍊金士は叫んだ。

そして籠の坩堝を取り出して冷ました。呆氣に取られてゐる見物人の前に、其の坩堝の中から燦然又憂然として土の牀の上に落ちたのは棍狀の黄金であつた。

と、鍊金士は仕草宜しくそれを指して叫んだ。

「此の三段論法を解いて給もれ！」

マルリアニは痲痺したやうに呟いた。「前代未聞ぢや！ 兎ても信じられない事ぢや！ 自然論理の一切の法則に反してゐる！」

ガレオットの顔は白くなつてゐる。靈感の火の輝きある其の目で天を見上げて彼は唸つた。

「おゝ永遠の神を頌め奉る！ あなたの造り給うた物の中で最も卑しい我々にあなたの無限の力の一部をお與へ下された永遠の神を頌め奉りまする！」

そして硫酸を以て新製の黄金を驗めして見ると、それは匈牙利、亞刺比亞から産出する最良の金にも増して純なる物である事が分つた。一同は此の尊むべき學者の周りに押し寄せて、讃辭を與へ且つ握手した。

イル・モロ公は鍊金士を傍に引いて、「ガレオット、其方は忠實に眞實に予に仕へて呉れるか？」

「陛下、拙者は生命が幾つも欲しいでございます、願はくはそれらの生命を悉く陛下に獻じたうござりまする。」

「ではガレオット、他の何れの君主にも仕へないでな……」

「これはく陛下、そんな事を匂はす君主が唯の一人たりともござりますれば、何卒拙者を絞殺なされて軀を犬に與へて下され」と言つて暫らく間を置いてから、極めて恭く敬禮して、「陛下にお願ひがござりまするが……」

「何？ 又か？」

「神様が證人でござります、これが最後でござりまする。」

「幾らか？」

「五千ヅカットでござりまする。」

公は打ち案じた後一千ヅカットに負けさせて、それを與へる約束を結んだ。最早や時間は遅い。ペアトリチエは案じてをらうといふので、各自は新製の金の缺片を鍊金士から貰つて急いで歸りかけた。レオナルドだけは後に居残つた。

五

そして二人限りになつた時ガレオットはレオナルドに言つた。

「諸て先生、拙者の實驗に對するあなたの御所存は如何でござりまするな？」

「あの金は棒の中に入れてありましたな」とレオナルドは冷淡に答へた。

「ハテ何の棒ぢやらう？ それは一體何の事でござる？」

「あなたが溶けた鉛を掻き廻しなすつたあの棒です。私は残らず見てゐました。」

「拙者の使用致した器具を凡てお驗めを願ひましたぞ。」

「併し驗めたのはあの棒ではありませんでした。」

『あの棒ではない！ 先生、これは御免……』

『残らず見て知つてゐますと私は申しましたが』とレオナルドは微笑して言つた。『強情を張つては可くませぬ。金は先端に木の付いて居る空洞の棒の中に隠してありました。それが溶けた鉛に焼けて無くなると同時に中から金が落ちて出たのです。』

と圖星を指されて、老人の足はぶる／＼戦き、顔には下賤な悲愴の色が擴がつた。
レオナルドは其の肩に手を掛けた。

『いや、御老人、心配なさるな。誰にも知れはしないし、私は告口をするやうな人間ではありませんから。』
詐欺師ガレオットは熱心にレオナルドの手を執つて、

『ではあなたは洩らしはなさりませぬな？』

『しません。私はあなたの不利を欲するものではありません。併し何故あんな誤魔化しをなさる？』

相手は、『お、レオナルド殿』と言ふと共に眼中無限の失望は變じて希望の二閃となつた。『レオナルド殿、これは神明に誓つて申すのぢやが、縦しや某が詐欺を行つたやうに見えましても、それは偏にミラン公國の福祉のため、又科學の勝利のためでござるぢや。何故かなら此の詐欺を行ふも、暫らくに過ぎませぬ。何故と仰りませ、レオナルド殿。眞實のところ拙者は實際哲人石を發見したのでござる。と申しても現に所有してゐると斷言するのではありませぬ、既に存在してゐるといふ事實は拙者に分つてをります。即ち此處にあるも同様と申して然るべきで、何故なれば其の方法を拙者は發見したし、そして御承知の通り方法は一切であるからぢや。今後僅

か三四回の實驗を重ねますれば、御覽なされレオナルド殿、然すれば早や成功するのでござる。さて其處で拙者は何事を致すべきでせうぞ、恐らく斯かる大きな眞理を發見するためには斯くも小さな詐欺位は當然是認されないで何とませう？』

『然うではありません』とレオナルドは重々しく答へた。『一體何の目的であなたはさう私を目隠し遊びの相手になさる？ 私も知つてゐるが、あなたも金屬の變質などいふ事は根も葉もない夢であつて、哲人石などの存在する譯がないのは充分能く御承知でせう。鍊金學、口寄せ、魔法、その他數學と確實な實驗とに基かない凡ての學問は、蠱惑でなければ詐欺に外ならないのです。左様、風に膨らんで翻々たる野師の旗にも喩へらるべきものでせうか。只理解のわからぬ人々は何が何だか分らずに喝采しつゝ其の後から走つて跟いて行くのです。』
鍊金士は驚駭の目を圓く光らしてレオナルドの唇を見守つてゐたが、レオナルドの言葉が終つても頼には答へが出来なかつた。が、良あつて慧し氣な首肯きをして目を瞬いた。

『まあ／＼レオナルド殿、其のお説は役に立ちません。拙者は眞の手引きとも云ふべき身分、御自身こそは鍊金士の王でござる。自然界の最も奥妙な幽秘物の所有者でござる。謂はゞヘルメス・トリスメギススの再來、新プロメシウスでござる。あなたが然うでらつしやる事は吾々存じてをりまするぞ。』

『私が？』

『御自身が。』

『それは冗談の積りで言つてゐるのですか？』

『いや決して。冗談は拙者でなうてあなたぢや。あなたの執着心の強い事、又心の奥底の見透かせないのには恐れ入りました！拙者はこれ迄學問の秘奥に到らん事を欲する人達を随分見ましたが、併し貴殿程の人はついで未だ見掛けは致しませぬ。』

レオナルドは探るやうに彼を見た。そして怒らうと努めたが駄目で、思はず微笑をして、

『あなたは眞面目に此の種の術を信じてゐらつしやるのですか？』と訊ねた。

『信ずるか仰有りまするか？ハテ偕てレオナルド殿、唯今此處へ神の出現があつて、ガレオット、哲人石なんてないぞとお告げになつたとして、拙者は斯様に答へます。神様、あなたが、拙者を生んで下さつた事は實證でござる。それと同じく石のあるのも實證なら其の石を拙者が發見致す事も實證でござる。』

これを聞かされてからレオナルドは最早や争はずに興味を以て鍊金士の空言に耳を傾けてゐた。やがて話は一般の秘密學に悪魔の手傳ひがあるといふ話に移つたが、老人は此の説を容れなかつた。そして神の造り給うた物の中で最も弱く最も貧弱且つ無能な者は悪魔で、自分は人の心に信を繋ぐのみにして、一切の事物は科學に依つて可能であるとさう聲言した。

尋いで突然、自身でも意識して唐突に話の途を變へた譯ではあるまいが、鍊金士は愉快にそして氣を紛らすやうに或る追憶をしてゐるが如くレオナルドに、あなたは時々元素の精の出現するのを御覽になりませぬかと訊ねた。そしてこれを問はれたレオナルドは未だ曾て其の種の物を見た事のない旨を答へたが、ガレオットは其のお答へは拙者には眞實とは思はれませぬと言つて、さて楽しさうに話し、世にいふ火蛇は此の中指一本と其の半分く

らるの長さのもので斑があり、一體に瘦せて險のあるものであり、又空氣の精は青空見たやうな色をして身軽く透き徹つてをる、など、語つた。

ガレオットは、其の他河海に住む水精、水神、侏儒、小法師、地中の豆仙人の事、又林中に住む魑魅、魍魎、又稀に寶石を棲處とする精の事をも語つて、『總じてこれらの精の深切な事又美妙な事をあなたに言葉を以て傳へる事は出来ませぬが』と話を結んだ。

『では何故それらは人を限つて出現するのでせう？』とレオナルドは訊ねた。

『貴殿はそれらも萬人に出現させたいのでござるかな？精は下劣な人間、放蕩兒、財物家、醉漢、大食漢を恐怖して、無邪氣な者、子供らしい者、淳樸な者を好みますのぢや。惡意のない處、狡猾の潜まぬ處をのみ住まひと致します。何しろ羚羊のやうに臆病で恐しがる性質であるに依つて、自らの生れた元素の中に居住して人の目を避けてゐる次第で。』

と言ひ終つて、無限の優しきある微笑が老人の顔に閃いた。宛ら長い前の夢を思ひ出したかのやうに——レオナルドは、『これは愛嬌のある馬鹿老人だ』と思つて、最早や輕蔑の念を挾まずに、此の老人の喜びさうな無稽は學者の事に就いて共に跋を合せてやらうと考へて、丁度小兒に對するやうに懇ろな心持を以て待遇した。そして二人は親しい言葉を交はして別れた。鍊金士は自分獨りになるや否やヴィーナス油を用ゐて再び實驗に没頭した。

ガレオットの實驗室に上述の事があつた一方、階下にある此の家の女主人公シドニアは如何と願れば、これは又カッサンドラと二人で切り爐の前に坐してゐたのであつた。夕飯の不味い蔬菜は爐の上で煮えてゐるし、老婆シドニアは皺寄つた指を毎時も同じやうに動かしながら絲卷棒を持つて亞麻絲を紡いでゐる。それをカッサンドラはほんやりと眺めながら心の中で斯んな事を考へてゐた。

「相も變らず同じい事ばかり。今日は昨日のやう、明日は今日のやうと少しも變化がない。蟋蟀はころ／＼鳴くし、二十日鼠はキー／＼言ふし、紡錘はブー／＼唸るし、爐には枯枝がバチ／＼言ひ、蕪菁は胡の匂ひがする。」

間もなく老婆はお定まりのペラ／＼文句を陳列べ出した――

「世間の噂では私が葡萄酒に錢瓶を埋めてゐるやうに言ふけれど、私はそんなお金持ちではないのぢやぞ。それは皆な取るに足らん話さ。そこ所か私は本統にガレオットの爺とお前のために身代限りをしさうだ。これといふのも私が餘り慈悲深いからの事、全く私には慈悲心があり過ぎる。でなければお前達二人の世話は出来ない筈だ。お前達は石臼さ、石臼が二つ私の首にブラ下つてゐるのさ。本統にカッサンドラお前は子供でもあるまいから行末の事を考へるが好い。叔父さんは何うせ一度はお陀佛になる身體、其の後に残るお前は約百のやうに素寒貧といふ有様。そこで結局は御亭主を持たなくちやならんといふ事になる。詰まるところアピアテグラソンのあ

の伯樂へ嫁ぐが好いよ、あんなに馬鹿氣た眞似をしてお前の尻を追つ驅け廻してゐるのだからな。あんまり若い方ではないが、信心家で氣性が確つかりしてゐるし、役にも立たぬ夢のやうな事を考へる人ぢやないし、商賣繁昌の上に水車小屋もあれば阿列布油の壓搾器も一臺はあるのだからな。あれ以上の御亭主なんて兎てもお前あるもんぢやないよ。」

カッサンドラは唯黙つて聞いてゐるうち、夢魔のやうに取り憑いた倦怠のため、喉を攫まれて窒息しさうになつた。此方から反抗的に出てわつと泣いて怒りつけてやりたいと思ふ念が殆ど堪へ切れない。

シドニアは汗氣の多い蕪菁を鍋の中から引き上げて、それに葡萄酒を注ぎ、見掛けばかりはさも旨さうな振をしながらムシヤ／＼長い時間かゝつて嚙んでゐる。併しカッサンドラの方は焦けつばらな心が益々募りながらも表面は溫和しくしながら背伸びをして兩手をば髪の後ろで組み合せた。老婆は夕飯が済むとコックリを始めて、其の度毎に手に持つてゐる糸線棒に首が觸れる。其の様は宛然として彼の運命の絲車を廻はすといふ女神が疲勞れて居眠つてゐるかのやう、そしてその言ふ事は切れ／＼になつて何時しかムニヤ／＼に化してしまつた。其の時カッサンドラは例のお守りを取り出すと、爐の火が其の紫色の奥までをキラ／＼と光らして呉れる。熱々その標神の姿を眺める心に早や希臘の美しい神々に對する愛が漲つた。

カッサンドラは深い溜息を吐いた。そしてお守を隠してから遠慮勝ちに斯う言つた。

「叔母さん！ 今晚ベネヴェントとフェルララのバルコの二ヶ所で會合があるのです。叔母さんあなたは本統に親切な善い叔母さんですから踊らずに唯見に行くだけにして、そして直ぐに歸つて來ませう。ね、私は叔母さん

のお望み通りにしますからさ、思ひきつて伯樂の贈物をせしめる事にしますからさ。今一度だけ私の言ふ事を聽いて下さいな。さ、飛びませうよ！一しよに飛びませうよ……今直ぐにさ！』

然う言つた娘の目には飢ゑたやうな光りがあつた。老婆は訝し氣に娘をキヨロ／＼眺めると共に、其の青味がかつた萎びた唇が微笑のために開いて、黄色い牙のやうなのを一本見せ、顔は怖ろしい喜びで輝いた。

『ま、お前それがお望みなのかえ？ 餘程好きと見えるネ。最うあの味を覺えたのかえ？ 本統に斯んな娘は何處を捜したつてありやしないよ。私は毎晩飛んでも可いのさ。だけどお前考へて御覽、お前の心は罪に落ちるんだよ。ま、飛ぶなんて私今晩そんな事は思ひもしなかつたのだ。でも、お前のためだと思つて飛ぶ事にしようか、これも皆私の心が餘り善過ぎるからだだよ。』

そして老婆は敢て急がうともせず室内を歩き廻つて、窓の錠戸を鎖したり、隙間に襪襦を填めたり、戸といふ戸に錠を降ろしたり、火に水を注けたりしてから、魔法の力ある黒蠟燭に點火して、刺戟性の強い膏藥の這入つてゐる土製の容器を鐵の戸棚から取り出した。シドニアは思慮深いもの、道理の解つて居ると云つた様子をしてゐるにも拘らず、其の手は丁度酒を飲んだ時のやうに顫へて、窪んだ目は時としてはトロリと濁り、時としては石炭のやうにキラキラした。姪のカッサンドラは粉を控る大きな木鉢を一つ、室の中央に持出した。

其の時シドニアは着物を脱ぎ、一つの木鉢に帚の柄を横にして自分は其の柄に跨つた。そして戸棚から出した膏藥を身體に塗抹し始めた。と、恐ろしい臭氣が室一杯にブンとする。此の藥を用ゐれば巫女は過たず飛行できるのであつて、材料は毒高苜に毒人參、犬山椒に蔓陀羅華、罌粟、菲沃斯、蛇の血、それから洗禮を受けない緑

兒の脂肪と、此の八種であつた。

カッサンドラは老婆の身體の醜さを見るのが我慢し切れなくなつたので、しまひには後の方へ退さつてしまつた。

『何をしてゐるのぢや？』と老婆は小言を言つた。『私一人に飛ばせる氣なのかえ？ さつさと着物を脱ぎなさい。』

『脱ぎますよ。だけど叔母さん其の明りを消して下さいな。明りがあつては私出来ませんもの。』
『馬鹿な——何ていふ恥づかしがり屋だらう！ そんな事は氣にしなくて好いよ、山では恥づかしいなんて些つともないのだから。』

然うは言つたものゝフと明りを消して、本尊の惡魔の歡心を得るため左の手で十字を切つた。カッサンドラは手早く着物を脱いで、木鉢の中で膝を折つて、身體中に藥を塗つた。語の聯續しないそして無意味な呪文を唱へる老婆の吐きか暗い中に聞える。

『瀧麵比丹、瀧麵比丹、巴留、婆留比理、亞斯多路得、我等に御力を假し給へ。亞剛囉、亞剛囉、巴塔喇沙、來つて力を假し給へ。』

カッサンドラは強烈な膏藥の匂ひを顔に嗅いだ。ために皮膚は燃えるやうに痛み、頭はグラグラする、快い感じがぞつと背を傳はつた。赤と緑の輪が入り亂れて目の前にクル／＼廻轉した。そしてシドニアのうち任したやうな金切り聲が、何處か遠くの邊から聞えるやうな氣がした。

『ガルルッル！ ガルルッル！ そら上つた、上つた！ それ其處で頭を打つちやならんぞ！ 飛んだ！ 飛んだ。』

七

『カッサンドラは黒山羊の柔かい皮に跨つて煙突の頂きから飛び出した。心は早や縹緲優揚となつて恍乎喘ぎながら初めて青空の中に這入つた、そして

『ガルルッル！ 上つた！ 上つた！ 飛んだ！ 飛んだ！』と若き鵜鶘のやうに叫んだ。

叔母シドニアは萎びて不具な身體を箒の柄に跨らせ、カッサンドラと並んで飛んでゐる。其の薄い髪は疾風のためハラ／＼と靡く。

『北へ！ 北へ！』と老婆は箒の柄を馬扱ひにして喚いた。

カッサンドラは憐むべきレオナルドと彼の厄介な機械の事を思ひ出して呵々と笑つた。

カッサンドラは益々上昇して行く。黒雲相集つて脚下で渦を巻いてゐると思ふと忽ちそれが鋸齒状を爲した電光に青く燃える。併し頭上の空は晴れ渡つて、手を差し伸ばせば届く處に石臼大の満月が皎として圓かに輝いてゐる。

で、急に恐ろしくなつて山羊を下の方へ向けた。と、山羊はカッサンドラを載せたまゝ下界へ逆落しに衝き進むだ。

『此の阿魔つちよ、首骨が折れたら何うするんだ』とシドニアは叫んだ。

そして兩人は極めて地上の近くを飛んでゐるので、さら／＼鳴る牧場の草に觸れさうになる。道を案内する鬼火は朽ちて光る古木の幹のあたりを過ぎた。葦の間では哀れ氣に鳴く梟、五位鷲、夜鷹、の聲が聞える。

間もなくアルプス山頂を横過した、玲瓏として坭石の如き巖は月光に輝いてゐる。それから再び下降して海上に下りた時、カッサンドラは手で水を抄つて空中に撒くと、水球が碧玉のやうに飛散するので嬉々として喜んだ。それから直ぐ兩人は歩を早めて、同じ仲間の矢張り山へ行く連中と近くなつたり遠くなつたりした。長い灰色の髪の魔法使は桶の上に乗つてゐるし、糞肥に乗つてゐる僧侶は赤ら顔の布袋腹でシレヌス其の儘の陽氣者、箒木に跨る金髮碧眼の若い女、それからぐう／＼鳴く豚に乗つてゐるのは赭色の若い吸血鬼、其の他幾百となくなる。

『姐さん達は何處から來たんだえ！』とシドニアは訊ねた。すると其の數約二十ばかりの聲が答へた。

『カンチアから！』

『希臘列島から！』

『ヴァレンツァから！』

『ブロッケン山から！』

『ミランドラから！ ヴエネヴェントから！』

其の他某々の洞窟や北國の海灣の名を指した者もあつた。

『そして何處へ行く積りぢや？』

『ビテルネー！ ビテルネー！ ビテルネの山羊大王の婚禮にぢや。さ、飛んだり！ 飛んだり！ 早く行つて御宴に列らう！』と一齊に叫んで旋風に卷かる、鴉の大群のやうに陰凄たる荒原の上を馳せ過ぎた。月は紫色に輝いて遙か彼處、村の教會堂の屋根にある十字架を照した。それを見た吸血鬼の女は十字架に打突かつて、鐘も共に碎いて遠くの沼に投げ入れた。するとカチンと絶望的な音を立て、それが沈んだので吸血鬼は犬のやうな吠聲を立て、喜んだ。箒の柄に跨つてゆるく翔つて行く亞麻色の髪の若い女も又愉快氣に小さな手を拍つた。

八

月は今雲に隠れた。松明の焰は青や緑にゆらくと燃えて、白聖質の高原に踊つてゐる巫女の黒い影は擴がたり、車輪のやうに進んだり、纏れたり、解けたりしてゐる。

『ガルルッ！ ガルルッ！ 安息日ぢや！ 安息日ぢや！ 右から左へ！ 右から左へ！』

そして枯れ朽ちた秋の木の葉のやうに無慮幾千の魔性の者は踊つた。其の中央の山上の玉座に坐してゐるのが大牡山羊のヒルクス・ノクツルヌス(夜陰の山羊)陛下である。

ガルルッ！ ガルルッ！ 偉大なる夜陰の牡山羊陛下を頌するのぢや！ ビテルネの牡山羊陛下を！ ビテルネの牡山羊陛下を！ 我等の軍は濟んだのぢや！ さ、喜べや、喜べや！』

死人の骨で作つた笛が響いて、絞殺された者の皮膚で張つた太鼓に狼の尾で作つた撥を當て、鳴らしてゐる。

氣味の悪い煮物は大きい鼎の中でゴト／＼煮えてゐるが、鹽は此處の陛下に取つて大禁物なので、煮物の中に入れてはなかつた。

人間の身ながら黒猫に化けてゐる仲間、エメラルド(綠柱玉)の目に歡樂を溢らせて其處に踊つてゐる。細いすらりとした白百合のやうな色の娘達があるかと思へば、人の夢を襲ふといふ魔物、即ち不恰好な丁度蜘蛛のやうな灰色を帯びた奴が跳ねてゐるし、尼の連中に至つては身顛ひしてゐる。それから間抜けてはゐるが好人物らしい顔の自身肥大な巫女は低い河岸で二人の悪魔の嬰兒に乳をやつてゐる。二人とも未だ生れたばかりなのに早くも貪婪と悪心の芽が萌してゐるのであつた。年齢三歳の小兒連は大僧正のやうな服装をしてゐるが、未だ酒宴の席に着かせない事になつてゐるので、饗宴主たる牡山羊陛下と共に澤山ある鬘を爪で抓んで食つてゐる。シドニアとカッサンドラは踊に加はつた。踊は咆哮する風雨のやうに二人を吸ひ込んだりグル／＼放したりする。

『ガルルッ！ 右から左へ！ 右から左へ！』

海象の髯のやうに長い濡れた髯がカッサンドラの首筋に觸れる。瘦せてくねくねした尾が顔を擦つたと思ふと、圖々しく顔を抓つたり嚙んだりする奴がある。中には憎らしくも耳邊に色の言葉を囁くものもある。カッサンドラは敢てこれらの戯れに逆はなかつた。そんな事が烈しくなるに従つて益々面白くなり、愈々無作法になると共に愈々夢中になるのである。

突如會衆は化石したやうになつた。一切の聲は靜まつて一切の運動はビタリ止んだ。と、地震の唸りのやうな

氣懶い嘎れた吼聲が黒塗りの玉座から起つた。此の玉座に坐してゐるのは大「不可知」王で、傍の者は戦々兢々としてゐる。

「一同は予の賜物を受けい！ 弱き者には予の力、謙遜なる者には予の倨傲、心の愚なる者に予の知慧、惱める者に予の喜びを取らせる。予の賜物を受けい！」

其の時半白の髯をふり動かして容尊けな一人の老人が嚴かな聲で次ぎの歌詞を誦した。此の人は神聖宗門裁判の師父の一人で、同時に魔法師一流の頭領、且つ此の夜の魔法會式の司會者である——

「陛下の御名をば全世界に涉りて頌めた、へよ。我等を災殃より救へ！」そして「汝等忠臣一同は恐懼して平伏しませい！」と命じた。

するとガタリと音がして會衆一齊に跪いた。そして宛ら一人の聲のやうに「魔法師の懺悔」を唄ふ聲が轟いた——

「我れは信ず、我等の神ルシファーを信ず、神は天地を造り給へり。我等は又其の御子ベエルゼバブを信ず。」歌の最後の音が消えて再び靜肅になつた時、「不可知」王はまた地震のやうな聲を出して叫んだので耳は聾するばかりであつた。

「予の花嫁を此處へ連れて來い！ 予の無垢な鳩を！」

「陛下の御妃、陛下の無垢なる鳩様の御名は何と申しまするか？」

「カッサンドラ！ カッサンドラ！」と大きな聲が聞えた。

自分の名を呼んだのを聞いた時、カッサンドラの血は血管の中で凝結し髪は逆立つた。

「カッサンドラ様！ カッサンドラ様！」と群集の中から叫びが起つた。「何處に隠れてゐらつしやるのぢや？ 私等の君様は何處にゐらつしやるのぢや？ あはれ、來よかし、カッサンドラの君！」

カッサンドラは思はず顔を隠して逃げようとする、骨立つた指や、爪、觸鬚、長い鼻、毛むくじやらの蜘蛛の脚などが寄つて群つて自分を捕へて、顛へてゐる身體を玉座の前に引き据ゑた。すると山羊の臭氣、「死」の如き冷氣が襲つて來る。餘りの恐ろしさにカッサンドラは目を瞑つた。

と、牡山羊陛下は再び玉座から叫んだ。「來れ！」

「カッサンドラは首を垂れた儘で見ると、自分の足下に十字架が落ちてゐて、それが煌々と闇に輝いてゐる。これに力を得て一生懸命になつて漸つと前に一歩進んだ。そして目を舉げて見た。

其の瞬間に奇蹟が起つた。

即ち山羊の毛皮は蛇の衣のやうにカラリとその身體から落ちた。と、豈圖らんやカッサンドラはオリンピアのデオニサスと向ひ合つてゐるのであつた。例の杖と葡萄の枝を携へて唇に永遠の喜びの微笑を湛へてゐるこのデオニサスの足下には、豹が前足で葡萄の實を攫んでゐる。そして「巫女の安息日」は一變して酒神の神聖な酒宴となつた。巫女等は此の神の祭司となり、恐ろしい惡魔等は深切なる人身山羊足の牧神となり、大理石の圓柱に化した白聖質の岩石は、太陽に照らされキラ／＼光つて、紫雲變遷たる海が其の圓柱の間から見える。希臘の神々

た——

「我れは信ず、我等の神ルシファーを信ず、神は天地を造り給へり。我等は又其の御子ベエルゼバブを信ず。」

歌の最後の音が消えて再び靜肅になつた時、「不可知」王はまた地震のやうな聲を出して叫んだので耳は聾するばかりであつた。

「予の花嫁を此處へ連れて來い！ 予の無垢な鳩を！」

「陛下の御妃、陛下の無垢なる鳩様の御名は何と申しまするか？」

「カッサンドラ！ カッサンドラ！」と大きな聲が聞えた。

自分の名を呼んだのを聞いた時、カッサンドラの血は血管の中で凝結し髪は逆立つた。

「カッサンドラ様！ カッサンドラ様！」と群集の中から叫びが起つた。「何處に隠れてゐらつしやるのぢや？ 私等の君様は何處にゐらつしやるのぢや？ あはれ、來よかし、カッサンドラの君！」

カッサンドラは思はず顔を隠して逃げようとする、骨立つた指や、爪、觸鬚、長い鼻、毛むくじやらの蜘蛛の脚などが寄つて群つて自分を捕へて、顛へてゐる身體を玉座の前に引き据ゑた。すると山羊の臭氣、「死」の如き冷氣が襲つて來る。餘りの恐ろしさにカッサンドラは目を瞑つた。

と、牡山羊陛下は再び玉座から叫んだ。「來れ！」

「カッサンドラは首を垂れた儘で見ると、自分の足下に十字架が落ちてゐて、それが煌々と闇に輝いてゐる。これに力を得て一生懸命になつて漸つと前に一歩進んだ。そして目を舉げて見た。

其の瞬間に奇蹟が起つた。

即ち山羊の毛皮は蛇の衣のやうにカラリとその身體から落ちた。と、豈圖らんやカッサンドラはオリンピアのデオニサスと向ひ合つてゐるのであつた。例の杖と葡萄の枝を携へて唇に永遠の喜びの微笑を湛へてゐるこのデオニサスの足下には、豹が前足で葡萄の實を攫んでゐる。そして「巫女の安息日」は一變して酒神の神聖な酒宴となつた。巫女等は此の神の祭司となり、恐ろしい惡魔等は深切なる人身山羊足の牧神となり、大理石の圓柱に化した白聖質の岩石は、太陽に照らされキラ／＼光つて、紫雲變遷たる海が其の圓柱の間から見える。希臘の神々

は一道の火の後光に圍繞されて雲間に集つた。そして牧神や祭司達は羯鼓を打つて、ナイフで胸を切り裂きながら、黄金の杯に葡萄の液を絞り入れてこれに血を混じ、ぐるぐると踊り廻つて歌つた。

『デオニサスに榮光あれ！ デオニサスに榮光あれ！ 神々は起ちぬ！ 永遠の諸神に榮光あれ！』
そして永遠に若いデオニサスはカッサンドラを抱くため兩腕を開いて、

『花嫁、此處へお出で！ 無垢の鳩よ、此處へお出で！』と叫んだ聲は天地を震撼させる地震のやうであつた。

カッサンドラは身を投じてデオニサスに抱擁された。

九

東雲を告げる 鶏の聲が遠くから聞えて霞と煙の鋭い香氣が鼻を拍つ。鐘の音は徐ろに空中を縫つて此の山を震はした。するとデオニサスの祭司は又もや恐ろしい巫女となり、牧神は悪鬼となり、美はしきデオニサスは巨大なそして臭い夜陰の山羊となつた。

『家へ歸らう！ 飛ぶのぢや！ 逃げるのぢや！』

『俺は糞肥を盗まれたぞ！』と絶望的に吠えたのは布袋腹の僧侶であつた。

『これ豚や！ 此處へ来て呉れ！』と猪毛の吸血鬼が叫んだが、山の濕氣に身顫ひして、噫をしてゐる。

傾きかけた月は再び雲間を覗いた。怖氣付いた巫女の群は月光の蒼白たる紅の中を幾組も續いて不潔な蠅のやうに雪崩を打つて退却した。

『ガルルフルー！ ガルルフルー！ 底から上れ！ 頭を打つな！ 命が大切だ。さ、飛んだり、飛んだり！』

そして夜陰の山羊は哀聲を發して地中に沈んで、腐つて窒息せしめるやうな硫黄の臭氣が残つた。徐々に且つ莊嚴に響く寺院の鐘は益々澄み行く空の中で一層の勝利を告げてゐる。

十

カッサンドラはヴェルチェルリナ門側なる矮屋の中の暗室で自分の心に復つた。丁度酔後のやうに嘔氣がして、頭は鉛の如く、身體は疲れてぐたくになつて居る。

聖ラデゴダ寺の鐘は重苦しく且つ單調に鳴つてゐた。外では家の表戸を誰か知ら頻りに叩く者がある、何者であるか分らないが先つきから一再ならず叩いてゐる。

カッサンドラは耳を欬てると、聲の主は自分を欲しがつてゐるアピアテグラソンの伯樂である事が分つた。

『これさシドニアさん、御願だから此處を開けて下されい！ カッサンドラさん！ 二人とも聾になつたのかい？ 俺はズブ濡れぢやぞ、此の雨風の酷いのに俺をムザく歸らす料簡ですかい？』

娘は立つて窓際まで引き摺るやうに歩んで行つて、叔母のシドニアが緊と鎧戸に填めて置いた襦袢を取つた。

すると雨の日のドンヨリとした光線が室内へ流れ入つて老婆の上に落ちた。シドニアは膏藥で汚れた裸體の儘高軀を掻いて、木鉢の横の牀の上で死んだやうに熟睡してゐる。

カッサンドラは外を覗くと、天気は恐ろしく悪い、篠衝く如く降り頻る雨の、宛ら網の目のやうな中から、急き込んでゐる戀の男の姿が見える。其の傍には小さな牝の驢馬がゐる、荷車の梶棒に倚り掛りながら眠むさうな頸をダラリと垂れた。車の上の足は足を括られた一頭の犢で、鼻づらを引き伸ばすやうにして悲し気に唸つてゐる。

内から何の返答もないので伯樂は一段と高くドン／＼叩く。カッサンドラは何んな成行きになるか見てゐると控へてゐる。

すると遂に二階の窓が一つ開いて、老鍊金士は例の早朝の習ひとしてムッチリした顔を外へ出した。

「一體何ぢや、其の騒ぎは？ 貴様は狂氣にでもなつたのか？ 畜生、地獄へ行け！ 皆んな未だ寢てゐるのが分らんのか？ さつさと失せやがれ！」

「ま、ガレオット様、何故あんなに唾々言はつしやる？ 私は大切な用事があつて来たのぢやに。あんたの姪御の別嬪にな、遣ひ物を持つて来たのぢやに……若い犢を……」

「此の馬鹿野郎！ 貴様と其の犢を悪魔に呉れつちまへ！」

そして鎧戸はピシヤンと締まつた。伯樂は暫しが間開いた口が塞がらぬと言ふ始末。やがて氣が付くや否や粉微塵になれと計り拳を揮つて勢ひ猛に戸を叩き始めた。

驢馬は益々俛首れた。其の長い耳を雨は流れて居る。

「ま、何て斯んなに面白くないのだらう！」とカッサンドラは目を閉ぢながら呟いた。そして昨夜の安息日の

狂熱の事、夜陰の山羊がチオニサスに變じた事、古代諸神の復活の事などを考へて自問した。

「あれは實際あつたのか知ら、それとも夢か知ら？ 全くの處あれは夢で今のこれが眞實さ！ 何時も日曜の

次ぎは……必ず月曜よ！」

「開けないか！ 明けないか！」と伯樂は唄れた聲を張り上げて死物狂ひの體。泥だらけな潦に雨が落ちて單調に泥水を撥ね飛ばしてゐるし、犢は憐れ氣に啼いてゐる。近間の僧院の鐘は同一様に且つ憂鬱氣な音して鳴り續く。

五の巻

汝の意思の如く成させ給へ

——一四九四年

嗚呼爾力の源よ、爾の裁判こそは崇むべきなれ！ 爾は未だ力に對して其の必然なる効果に順序と性質とを缺かしめたる事あらじ。三たび驚嘆すべきは爾必然性なる哉、嗚呼！
——レオナルド・ダ・ヴィンチ。

御意の天に於てなる如く、地にもなさせ給へ——主の祈禱。

爰にゴルボロなる男はミランの市民且つ靴屋であるが、或る夜のこと一杯機嫌で歸宅すると、彼の所謂『疲勞れ切つてゐる驢馬に鞭つてミランから羅馬へ跑けさすよりも最つと酷い打擲』を妻君から頂戴したので、其の翌る朝、細君が隣家へ黒ブチングを取りに行つてゐる隙を窺つて、蝦蟇口の中へ密つそり隠して置いた何がしの錢を綺麗に取り出してから、店を小僧に預けて、一つ朝酒を聞召して元氣を回復しなくちやとブラリ表へ出たのである。

そして絲の脱ちたズボンの兜衣に兩手を突込んで、狭い往來をブラ／＼歩いて、(其の狭さつたらないので、

馬上の人は何うしても道を歩いてゐる人を拍車で突つかざるを得ない程であつた)、油や、腐れ卵や、酸つばくなつた酒や、徴びた糞などの相も變らぬ臭い匂ひを嗅いだ。そして口笛で何かの節をビュー／＼吹いて、屋根と屋根との間から、細い條片のやうに見える青空や、日に干すため小路を横つて幾筋にも擴けてある様々な色の襤褸や破れた衣類を見上げながら、己が好む金言『毒婦と美人とは俱に權威を揮はん』(併し此の金言の教へをば少しも守らない癖に)を思ひ出して、平かならぬ心を慰めた。

そして近道をするため未だ普請中である蓋の構内を通つた。構内は雑沓して其の騒々しさは丁度市場へ行つたやう、猥りに入る者は五ソルチの料に處せられる筈なのに、酒を持つた者、籠を擔いだ者、夫々箱、行李、盆、板、梁、風呂敷包みを抱へて行く者、甚しきに至つては驢馬や騾馬を曳いてさへ、門から門へと通り抜けてゐる。僧は祈を捧げ聖歌を歌つてゐるし、神壇に燈明がチラ／＼して、懺悔室からは低聲で何か言つてゐるのが聞えるのに、これは又何とした、子供の蛙飛び、犬の喧嘩があるかと思へば、頑丈な乞食共が我れ勝ちに群つて來て施しを強請して居る。ゴルボロは暫らく人込みの中に立ち止まつて、内々は興味を感じながら、フランシスカン僧とドミニカンの僧が宗論をしてゐるのを聞いてゐた。論の主意は惡魔が退轉したため天國では席が一つ空いた儘になつてゐるが、それを要求すべき權利はフランシス上人にあるか或はカタリン比丘尼にあるかと云ふのである。暗い伽藍からアルレンゴの廣場へ出ると急に太陽の強い光線に當つた靴屋は思はず目をバチクリさせた。此の廣場はミラン府中最も活氣ある場所、小商賣の店が櫛比して建ち並び、それに荷箱、ガラクタ物の類が所狭きまで置いてあるため、動もすれば往來の人は歩行も出來ない程であつた。これらの店は随分古くから何時とはな

しに廣場を滅茶苦茶に埋めたので、此處から立ち退かさうと如何に規則を布き科料に處しても寸毫の効もないのである。

『さあ〜ヴァルテルリナのサラダにレモンとオレンジ！ 朝鮮薊に西洋獨活！ さあ〜』と呼んでゐるのは八百屋である。

女古着商共がゴト〜言つたり、ベチャクチャ喋つたりしてゐる様は、鳥屋についた牝鶏のやう。それから山と堆い葡萄に橙に花甘藍、茴香に唐高苜の根、赤茄子、葱、の下に隠されたやうになつて、『へー……ホー……へー……ホー……』と苦し氣な呻きを揚げてゐる驢馬の瘦せた腹を馬子はしたゝか打つて、『ほうら……ほうら！』と喉聲で喚いてゐる。

杖をついて長い列を作つて行く盲人と、盲人の先導をする供人は共に打ち沈んだ冗々しい歎願の聲を揚げてゐる。珠數繫ぎにした齒を飾りにした帽子を被つた大道齒抜きは一人の男の肩車に乗つて、兩膝でその男の頭をさみ、手品師のやうな早業で大きな鉗を扱ひながら、それで自分の齒を抜いてゐる。子供連は往來を通る人の足下で獨樂を廻したり、豚の頭を持ち出して、一人の猶太人を意地目たりしてゐる中に、餓鬼大將のファルファニフキオは市場の女共のゐる中へ廿日鼠を一匹放した。すると鼠は果物を賣つてゐるバルバックアの廣い下袴へ這ひ上つたので、此の女は湯傷したやうに跳び上つて、悪少年等に毒つきながら、周圍も何も構はこそ着物をアタフタ打ち拂つた。

豚の死んだのを持つてゐた荷擔ぎは此の惡戯を見るため不意に振り返つた。と、それに怖れた外科醫ガッパデ

オの馬は撥ね上りまたどつかと下りて、例の商店に積み重ねてあつた臺所道具を全部引つくり返したので、ソー ス鍋、フライ鍋、杓子、おろし道具の類がガラ〜轉がり崩れた音は、耳を聳する計り。醫者は兩手で馬の頸に獅噛みつき、低い調子の大聲で、助けて呉れ！ と叫びつゝ神と惡魔にチャンボンに祈るし、馬はそれに頓着なく恐怖せる醫者に乗せた儘跑けて行つてしまつた。犬は吠えるし、見物人は窓からも見高い顔を突き出してゐる。高笑ひ、號泣、罵詈、口笛、叫聲は凡ての方面に起つた。驢馬は廣場の到る處で啼き立てる。

此の面白い光景を目撃してゐた靴屋は哲學者めいた口吻で獨語した――

『世の中は女さへ居なければ善い處なのだが。女といふ奴は丁度鑪が鐵を食ふやうに亭主を食ふからな。』

そして手を目に翳して、其處に足代を組んである未成の大建築物を見上げた。それは大伽藍即ち大寺院で『生誕の聖母』を記念するためミラン府が建てゝゐるのであつた。

上下擧つて此の伽藍に寄進をしたので、例へばサイプラスの女王の如きは金の刺繡ある高價な織物を奉獻したし、年寄りの女屑屋のカテリナは二十ソルヂの價ある一枚限りの外衣を聖母の神壇に捧げたのである。コルボロは子供の時分から此の建築物の進程を見てゐるのであるが、此の朝此の度新に成つた尖閣の一つが見えたので嬉しい氣がした。

此の邊は到る處礎や金槌の坎〜云ふ音が聞える。キラ〜光る大理石の大きな板はマッヂオレ湖岸の石伐場から運ばれて、サント・ステファノ沼の大病院から遠くない或る船着所で陸揚げをした後、更に此の建築場へ來るのであつた。起重機の鎖が轆つてカラ〜と音がする。鐵の鋸は大理石を伐つてゐるし、職人共は蠅のやう

に足代の周りに群つてゐる。一日々々大寺院は斯くして生長し、無数の尖閣、鐘樓、純白の小塔が燦として青空に聳えて居る。實に此の伽藍こそはミラン府民が『生誕のマリヤ』に對する榮光として造營した永遠の聖哥であつた。

コルボロはこの廣場を出た後、急な段梯子を下りて酒樽の並んでゐる迫持造りの酒屋へ行つた。店の亭主は獨逸人で名をチバルドと云つた。靴屋は先客の連中に挨拶をして、兼て見知り越しなるブリキ職のスカラブルロの傍に御輿を下ろして、酒を一本と百里香の香味を附けた熱い饅頭菓子を誂へた。そして頬張つた口で長く緩々と一つ飲みながら、

『スカラブルロ、お前利口になりたけりや決して嫌なんか持つちや可けないぜ』と言つた。

『何故だい？』と相手は訊ねた。

『何故つてお前、嫌を持つのお宛るであれだよ。あの鰻を出さうとして囊の中へ手を突つ込むと、それが鰻ぢやなく蛇なんだからな。嫌を取るよりか痛風にでも取つ憑かれる方が増しなんだ、な、スカラブルロ。』

此の二人の卓子の側には容易くもの事を信する性分のそして何でも喰ひたがる一群の人々が並んでゐるが、其の中の一人でマスカレロと呼ぶ陽氣な金工は樂土を頌する歌を唄つてゐた。其の樂土では葡萄の實が腸詰と一緒に房々と垂れてゐて、親鷲鳥一羽に子の鷲鳥一羽を添へて唯一錢で賣つてゐる。チーズが山を成して、それが

整然と刻み目がつけられて食はれる計りになつて居る。去勢鶏の脂肪で鹽梅された伊太利團子とマカロニを呉れと言へばロハで投げて呉れる。それから水は唯一雫も混つてない生一本無類飛切といふ白葡萄酒ヴェルナッキアが地中の泉から自然と湧き上る……。

其の時ゴルゴリーヨといふ男が酒屋へ駈け込んで来た。これは玻璃職人で目は瘰癧を煩つて以來半分位づゝ塞がつてゐるため、丁度生れ立ての狗子のやうな相好に見える。此の男は元來酒好きに加ふるに大の喋り好きで、今や帽子を取つて瀧のやうに汗の出て居る顔を拭きながら、

『おい兄い、兄い！ 俺あ今佛蘭人を見たぜ！』と叫んだ。

『なんだ、ゴルゴリーヨの野郎夢を見てやがる。今時分彼奴らの來る理由がねえ。』

『本統だと言つたらさ、ちやんと來てるんだぜ。何でもバヴィアにゐるんだとよ。ま、それよりか一つ息を吐かして呉れ。駈けられるやうな天氣工合ぢやねえのに、俺あ此處へ來るまで駈け通しなんだ。それと云ふのもお前、一番に此の事を知らせたい計りによ。』

『さ、さ、俺の銚子で飲つて呉れ。ま、飲りながら話すとしてな。それで何かい、其の佛蘭西人と云ふのあ何んな風の奴らだい？』

『それがさ、悪く出來てるんだ、兄い。大それた悪者だよ、お、皇天よ、我等のために佛蘭西毛唐を防がせ給へと來やがらあ！ な、兄い、うっかり奴らの口へ指なんか出さうものなら喰ひつかれるぞ。第一憚りつほくて、野蠻で、不信心で、宛るで猛獸さね。ま、早い話が蠻族でさ。何しろお前、長さ八ブラッチオ位ある火繩筒に眞

鑢の矛、礮の石砲を持つてるんだ。それに奴らの乗つてる馬だつても宛るで海から上つた化物さ、虜毛がモジャモジャ生えてゐて、耳や尾が短かくチョン切つてあるんだよ。』

『で、澤山ゐるのかい？』

『然うともよ、雲霞の勢ひだぜ。野山に満つる軍勢は喩へば蝗に似たりけりだ。第一何處まで續いてるか際限が分りやしねえ。これあ察するところ俺達の罪を懲らす積りで神様があんな黒死病、いやあの北の悪魔をお指し向けになつたんだぜ。』

『だがゴルゴリヨ、お前何故然う佛蘭西人を毒つくんだい、あれは俺達の友人——俺達の同盟者になつて來たんだぜ』とマスカレルロが言つた。

『ハッ、同盟者だつて？ おい、おい、黙つて引つ込んでろい。懷中を御用心なさいだ。然うよお前あんな同盟は敵よりか譯が悪いんだ。ま、あんな奴は角を買つて牛を盗む性質なんだ。』

『たはけた事を言つちや可けねえ、ゴルゴリヨ。何故佛蘭西人を敵視するのか其の譯さへ話せば好いちやねえか。』

『ちや言つて聞かさう。俺達の作物を踏み躪るからよ、俺達の木を斫倒して、家畜を搔つぱらつて、女子を手込めにするからよ。奴らの王様は狒々なんだ、齒の奥に魂なんかありやしねえ、で以て女が大好きと來てるから、此の國一等の別嬪達を描いてある本を毎時手放さないんだ。兵隊共の言ひ草は斯うだよ——神様の御助力があるからミランからネーブルスにかけて生娘は一人でも只は置かねえつて。』

と聞いたスカラブルロは、盃が動いて音のする位強く拳を固めて卓子を叩いて、『悪黨！』と嗚鳴つた。

ゴルゴリヨは更に續けて、『そしてイル・モロは佛蘭西の笛の音に合はせて後足で踊をやつてるんだぜ。全體佛蘭西の奴らは此方共を人間の中へ勘定してやしねえ。響めつ面して斯んな事を言やがるんだ。貴様らは皆んな泥棒と人殺し計りだ。正當の君主を毒殺したのは貴様らだつた、無辜な幼主を殺したのも貴様らだつた。依つて神罰貴様に降つて伊太利は我が佛蘭西人の版圖になるんだつてよ。何うだい兄い、それだに俺達は兩腕を斯う押開いて奴らを迎へて、そして御馳走をしてやつて居るわけな人だからな！』

『ゴルゴリヨ、本統にお前は婆の寢言を言つてるんだ。』

『俺の言葉に間違ひがあつたら、俺あ盲にされたつて好いぞ、舌を切られたつて構やしねえぞ。ま、諸君傾聴し給へと來るかな。で、斯うだ、斯んな大それた事を奴等吐かしやがるんだよ。我が佛蘭西人は全伊太利の民を征服すべき運命を荷つてゐるのだ。ありとあらゆる海と、海の國民を屈服させてから、大土耳古を滅ぼし、進んでイエルサレムの橄欖山に眞正の十字架を樹てる。そしてそれを樹てたら更に伊太利へ來て神の嗔怒を貴様らに示してやる。若し貴様らが屈服を肯じなければ、伊太利といふ名は地球の表面から拭ひ去られるのだぞ——ま、これが奴らの言ひ草なんだ！』

『祿でもねえ事を聞くもんだ。これお前代未聞の變事だな！』と金工マスカレルロが溜息する。他の連中は黙つてゐた。

其の時坊主のチモテアが手を天の方に舉げて、嚴かな口調で次ぎのやうな事を言つた。此の僧は先刻伽藍の中

先

覺

で榮光ある聖徒の事に就いて僧チボルラと議論を上下してゐた喪家の犬の如きトミニカン派の一人である——
 『ぢやに依つて神の大預言者デロラモ・サヴォナロオ様は斯う仰有つたのぢや——見さらつしやい、双に颯ら
 ずして運命既に伊太利を征服すべき人が来るぞよ。お、フロレンス！ お、羅馬！ お、ミラン！ 酒宴
 と歌の時代は過ぎ去つたぞ！ 悔いさつしやい、お前達悔いさつしやい！ チアン・ガレアツォの血、カインの進
 らせたアベルの血は、神様のお座の前で復讐を呼ばはつてゐるぞよ！ ——と斯う仰有つたのぢや。』

三

丁度此の時二人の軍人が店へ這入つて来た。

『そら佛蘭西人だ！ 見ねえな！』とゴルゴリーヨは仲間のを肘で衝いて言つた。

此の新人客の中、一人は佛蘭西ガスコン地方の者で、年は未だ若く、形整つて背の高い好男子、押強い顔には
 赭色の髭が生えてゐる。これは騎兵の伍長で、名をボニヴァルといふのである。今一人はムクムク肥つた老人で、
 首の具合は牛を見るやう、赭色の目ははれほつたく膨れて、耳に環が箱まつてゐる。これはピカルデ地方の産
 で、グロギョーシユと名くる砲兵であつた。そして二人とも既に微酔を帯びてゐる様子。

『おい、神壇の聖餐に有り付いたぜ！』と伍長は砲兵の背を一つ叩いて、『斯んな厭やな町でもこれで到頭旨い
 奴を一杯引つ掛けられる處が見付かつたと云ふものだ。何しろ此のロンバルヂの酒と來ちや酸つばくて醋のやう
 に喉を焼くのだからな』と言ひつゝ、ベンチの上でウンと伸びをして輕蔑の目をチラリ一座の者に呉れてから、

手を鳴らして、拙い伊太利語を大聲に言つた。

『酒れて一等古い白葡萄酒と、それに先づ第一の肴として腦の腸詰を呉れ！』

『全く君の言ふ通りだ』とグロギョーシユは言つた。『俺はあのバーガンデの酒の事や、俺の妻のリゾンの髪の毛
 見たやうに金色をしてゐるあの高價なボーヌ酒の事などを考へると、すつかり氣が減入つちまふのだ。な、お
 い、(酒は人の如し)とは甘く言つたものさな。さ、兄弟、佛蘭西の繁榮のために飲まうぢやないか。』
 そして二人で歌を唄つた。

佛蘭西王國の殃ひを希ふ者に
 大神の手ひとき呪ひあれ

『あれは何を言つてたんだい？』とスカラブルロはゴルゴリーヨの耳に囁いた。

『失敬な事を吐かしてやがるんだ！ 自分の國の酒を褒めて、俺達の酒を褒めないんだ。』

『あの二羽の佛蘭西鶏を見ろい。俺の腕は奴らの相手になりたがつてムヅムヅしてゐるんだ』とブリキ屋は呟い
 た。

此處の亭主のチバルドは布袋腹の癖に蚊の脛見たやうな足の男、革帯の間に恐ろしい澤山な鍵をブラ下けてゐ
 るが、今や酒を半ブレンタだけ酒桶から出して、それを土焼きの壺に入れ、至極怪訝さうに、二人の客を見守り

ながら其の前に壘を差し出した。ボニヴァルは一息に呷つて、此奴あ善い酒だと思つたものゝ態と唾を吐いて、さも厭やだと云つた顔をした。と、其の時チバルドの娘で姿の良い髪の毛の美しいロッテといふのが傍を通つたので、ガスコンの伍長は砲兵を肘で軽く衝いて、氣取つて管髭を捻りながら、ガイと飲んで聲高に次ぎの歌を唄つた。

グロギョーシユも噎れ聲を張り上げてそれに和する――

シャルルは數多戦ひて

伊太利國を征伐し

イエルサレムにぞ押し寄せて

オレブの山に登らん

間もなくロッテは恥かし氣に目を伏せて再び傍を過ぎようとするのを、伍長は猿臂を伸ばして腰を抱へ、自分の膝に引き寄せようとした。それを娘は男を押し除け、其の手を振りもぎつて逃げにかゝつた。と、伍長は躍り上つて酒で濡れた唇で娘の頬に接吻した。あつと一聲娘は叫んで、手に持つてゐた水甕を下に落としてウンと一ツ喰はしたので、伍長は一寸タヂくした。すると一齊に笑聲が起つた。

『よう出かしたぞ、阿魔ッちよ！ ゼルヴァン上人も照覽あれ、俺あ未だ斯んな小氣味の好い一ピシヤリは見た

事がねえ。そして丁度好い汐時に一本参らせるなんて、これも未だ見た事がねえ』と金工が叫んだ。

グロギョーシユは自分の連れを制しようとして、

『構つちや可けない。馬鹿な事をして呉れちや困る』と言つた。

併し伍長は酒に心が亂れてゐる。口の片隅にだけ笑を浮かべて、

『おい別嬪、貴様やりやがつたな。此奴あ腹に据ゑ兼ねたわい！ 今度は頬ぢやないぞ、其の唇だぞ！』と叫

びながら卓子を引つくり返して娘の後を追ひ掛けて引つ捕へ、あなや今言つた嚇し文句を實行しようとする刹那、

スカラブルロの鐵腕飛んで暴漢の喉を扼した。

『へ、此の犬の小倅奴！ コン畜生、恐ろしい響め面しやがる佛蘭西野郎だ！ こら、ミランの娘つ子に手出

しをすると何んな目に遭ふか思ひ知らさうかい』と罵りながら、小突き廻すので、伍長は將に窒息しさう。

『コ、コン畜生！ コン畜生！ 此の悪黨、手を放さないかッ。佛蘭西萬歳！ サン、ドニ上人、サンジョル

ジ上人！』と伍長は怒號して、劍の鞘を拂ふより早くスカラブルロの背へグサリ刺し通さうとした。と、此の時

遅し、マスカレルロ、ゴルゴリーヨ、マーン、其の他の面々が伍長を組み伏せて手を縛り上げた。此の騒ぎに邊

は大混雜、卓子が引つくり返る、ベンチが壊れる、酒樽が轉がる、壘の缺片が足で踏まれる、其處ら一面は酒の

池となつた。

血と抜かれた劍と振り廻すナイフとを見たチバルドは表へ飛び出して、廣場へ一杯に徹る聲で、

『人殺し！ 人殺し！ 佛蘭西人がミランで掠奪してゐるぞ！』と叫んだ。

直ちに市場の半鐘が鳴り出した。其の合棒たるプロレットの半鐘もそれに和する。物賣人は店を鎖すし、果物賣りと女古着商は品物を荷に作つて彼處此處へ逃げ去つた。

『南無チエルヴァソ上人様、プロタソ上人様！ 守護のお上人様方！ 何うぞ助けて下さりませ！』とブル／＼した聲で言つてゐるのは八百屋の肥つた女である。

『一體何だい？ 何が起つたのだい？ 火事なのか？』

『やっつける！ 佛蘭西の野郎をやっつける！』

例の餓鬼大將のファルファンニキオは嬉し相に踊つて歩いて、口笛を吹きながら、

『佛蘭西の野郎をやっつける！ 佛蘭西の野郎をやっつける！』と叫んでゐる。

銃と槍を提げて威勢を張つて活劇の場所へ来た近衛兵と普通の軍人とはグロギョーシユとボニヴァルの二人を野次馬の手から救ひ取つた。今少し後れると二人の生命はなかつたのである。近衛兵は左右に居たもの共を引つ捕へたが、靴屋のコルボロもその一人であつた。

此の騒動を聞いて此處へ駆け付けて来たコルボロの女房は、憐れむやうに手を揉んで泣き立てた。

『何うぞ憐れと思召して家の人を宥して下さいまし！ 何うぞ此の可哀さうな夫にお慈悲を垂れて下さいまし！ 家へ歸りますれば篤と懲らしめまして、二度と喧嘩はさせませぬ程に、何うぞ旦那様方、それは最う私の申し上ける事に偽りはないのでございます。家の人は元々何處に一つ缺け目のない好人物でございまして、繩を御かけになるやうな者ではございませぬ。』

併し夫コルボロは頭を垂れ、目を地に付けて、此の執成しを聞かぬ振した。そして身體のがつしりした近衛兵の後ろに我が身を隠してしまつた。女房に比して此の兵士の方が遙に恐ろしくないと彼は見たのである。

四

未成の伽藍を圍める足代の丁度上に方つて、主塔より遠くない細い尖閣の一角に繩梯子を懸けて、其の小塔の頂に安置すべきカテリナ聖尼の小像を抱へながら、其の梯子を上り行く一人の若い石工がある。前後左右に林立せる尖閣は鍾乳石の如く尖つてゐるし、其の他小塔や軽快な追持、他に類例のない花や葉を紐形に連ねた石細工、預言者、殉教者、天使、悪鬼の醜兒、怪鳥、海の妖女、鳥身女面の像、鱗翼開口の龍、雨樋の端毎にあつてあらゆる怪物の形に出来てゐる水吐き等、様々の裝飾が施してあつた。これらは凡て非常に純白な大理石から成つてゐるので、石の面に煙の如き青曇りの影を帯べる様は、冬木立に霜が被ぶさつて、それがキラ／＼光るのに似てゐた。四邊寂として、耳に聞こえるものとしては燕と鶺鴒が絶えず建物の上の方並びに周圍を翔りながら發する嬉嬉たる囀り位のもの、それから廣場の雑沓は蟻塚から發する低い囁きのやう、又折々寺院の内部に起るオルガンの音、祈りの溜息はこれら石材の内部の奥底から來るやうに思はれた。そして此の廣大なる建築物の全部が呼吸し生長して空の方へ伸びて行く様は宛ら生誕のマリヤを永久に頌するかのやう、又あらゆる人、あらゆる時代が聖處女に對して喜んで誦する聖歌のやうであつた。

突然ガ／＼する音が廣場から聞えた。と思ふとそれがムク／＼と増大して喧囂の聲がはつきりと石工の耳へ

傳はつて来た。石工は仕事の手を止めて下の方を見下ろした。すると忽ち脚下の伽藍が動くやうな気がして、今登りかけてゐる塔は葦の葉の如く撓へた。

「しまつた！ 落ちさうだ！ 神様、私の魂を受けて下さいませ」と祈つて、死物狂ひに繩梯子に獅噛み付いて、目を塞ぎながら低い聲で『あはれ慈恩深きマリヤ様』と言つた。

すると幾分か心が静まつたし、それに上から一陣の冷風が吹いて来たので、石工は元の心に回復して、力を絞つて上の方へ登つて行つた。そして地上の騒音に耳を傾けずに大なる熱誠を籠めて『あはれ慈恩に富むやさしきメリイ様』と誦しながら、晴朗且つ靜寂たる空の方へ攀ち上つた。

丁度此の時、大理石造の廣やかな屋根を横切つて来た人達があつた。これは伊太利人並びに外國人より成れる此の伽藍の委員會、即ち建築會の人々で、孰れも建築師であるが、主塔チブリオを圓屋根よりも高く出すに就いて會議を開くやうにと、イル・モロ公の命を受けて集まつたのである。此の中にレオナルド・ダ・ヴィンチもゐるので、彼は自分の設計書を提出したが、委員らはこれを高價に失し、巨大に失し、且つ寺院建築の傳襲と完全に一致せぬ理由の下に採用しなかつた。本件のために會議は異論百出して一致を見る事が出来なかつた。或る者は罵つて、此の建築物を糊めた者は斯道の知識に缺けてゐた、め内部の柱は甚だ脆弱で、チブリオ塔を初め其他の小塔、尖閣を支持するに足らぬと言ふし、一方の人達は世の終りの日まで儼然と持ち耐へて決して崩れないとの意見であつた。

レオナルドは此の論争に加はらずに、黙々として自分一人だけ側の方に控へてゐた。すると一人の職工が来て

手紙を渡した。

「旦那、バヴィアの使が此の書面を持つて来まして旦那に届けて呉れとの事でございしました。」

レオナルドは手紙を開いて文面を讀むと、

レオナルド殿要用有之即刻御來臨被下度候。

十月十四日

公チアン・ガレアツツ

とあつた。

乃ちレオナルドは委員達にお先きに失禮と挨拶して廣場へ出た、そして馬に乗つてミランからは二三時間の距離なるバヴィア城へ馳せ付けた。

五

大園の栗、楡、楓は秋の太陽に照らされて金色紫色に燃えてゐた。枝々から音もなく落ちる木の葉は死んだ胡蝶のやう、雑草噴泉に蔓つて潺湲の音絶え、捨て、顧みぬ花壇には紫菀が枯れてゐる。

レオナルドは城の近くで侏儒に逢つた。これはチアン・ガレアツツ公の忠實なる童坊で、瀕死の公に仕へてゐる者は唯此の者一人だけであつた。馬上の人がレオナルドである事を知つて、童坊は走つて飛んで来た。